

kinokopress.com
www.kinokopress.com

地球温暖化の果てに 第二部

焦熱列島

生野以久男

プロローグ

前年の夏、暖水塊群が日本列島近海に押し寄せ、原子力発電所が集中立地している地点で暖水塊が熱水塊へ変貌し、首都圏や関西地方に大停電をもたらした。

日本列島近海への暖水塊群の来襲は、グリーンランド氷床コアの分析によつて発見された「急激な気候変動」のはじまりを思わせた。この種の気候変動の周期は数百年から数千年と短く、急激な温暖化にはじまり、気温がピークを迎えるとゆっくり寒冷化へ向い、最後は急激に寒冷化して終わるという。

だが現在進行している地球温暖化が単純にそのようなパターンをたどるとは思えなかった。産業革命以来現在もつづいている大気中二酸化炭素濃度の上昇速度が、かつて地球が経験したことのないほどの超猛スピードなのだ。これが最大の問題点だった。

最近、北大西洋へ熱を運ぶメキシコ湾流が弱まり出し、寒冷化のはじまりかと思われる兆候が現れた。だが人間社会はいまだに石油や石炭などの化石燃料に依存し、大気中へ大量の二酸化炭素を放出しつづけている。二酸化炭素などの温室効果ガスの大気中濃度が増加すれば、さらに気温上昇がつづく。とすれば、従来の「急激な気候変動」のパターンとは別のものになってしまふのではないか。

人類は大量の二酸化炭素を吐きつづけ、地球温暖化をさらに加速し、気温上昇のピークを更新していく。地球温暖化が暴走し出しているのだ。

だが相変らず、誰もがこの新しい事態を認めようとしなかった。

メキシコ湾流が弱まり、熱塩大循環（深層海流大循環）に変調をきたせば、地球上における熱分布がいちじるしく不均衡化し出す。そうなればこれを是正しようと、地球気候システムは激しい運動を余儀なくされることだろう。

地球は振幅の激しい気候大変動期を迎えようとしていた。そのなかにあつて、日本列島は地球のホットスポットとなり、ヒートアイランド化していく。

第一章

1

「あのう……、柏田さんじゃないですか」

額の禿げ上がった大きな顔に向って、九鬼は声を掛けた。

「九鬼陽一郎ですよ。海洋研で一緒だった……」

彼はもう一度声を掛ける。だが彼に向けられている男の目にも顔の表情にも変化がなかった。

男は九鬼を一瞥すると、くるりと踵を回して背を向けた。

駅構内の広い通路は乗降客でごった返していた。彼は目でしばらく後ろ姿を追った。だがすぐ、男は人込みのなかに紛れてしまった。

人違いだったのかと思った。だがあの額の禿げ上がった大きな顔は確かに柏田のものであった。

別れの挨拶のせずに研究所を去った九鬼に柏田はいまも腹を立てており、全く無視してしまったのか。それとも彼のことを忘れてしまったというのか。

九鬼は人の流れに身を任せ、プラットホームへの階段を上った。

ホームへ出ると、まだ四月だというのに、真夏のようなむっとした蒸し暑い空気が顔を襲う。

電車が入ってきた。扉が開いた。乗降客が動く。

一輛前の車輻に乗り込む乗客のなかに、柏田の後姿があった。

九鬼は発車ベルに促され、電車に飛び乗る。扉が閉じた。

ラッシュにはまだ間があるのに車内は混んでいた。彼は乗客の間をかき分け、身をよじるようにしてすり抜け、前の車輻へ移動する。

目の前に柏田の横顔があった。彼は前へ回って、声を掛ける。

「ああ……」

急いで声を呑む。人違いだった。横顔が柏田そっくりだったが、真つ正面から見ると別人だった。

先刻、駅通路の人込みのなかで声を掛けた柏田らしき人も別人だったのだろうか。彼は不安に襲われ、柏田の顔をもう一度思い浮かべる。

輪郭のはっきりした癖のある大きな目と禿げ上がった額が、大きな顔を一層大きく感じさせ、いかにも尊大に見える大顔だ。以前勤めていた海洋科学研究所で何度も会い、記憶に刻印した顔だった。

間違はずがない。彼はもう一度通路で声をかけた男の横顔を思い浮かべる。確かに記憶に刻印した顔だった。それなのに人違いとはどうしたところか。

九鬼が海洋科学研究所を突然辞めてからそろそろ半年になる。いろいろな出来事がつづいた六か月だった。たった六か月に過ぎなかったが、彼には何年も前の遠い昔のことのような気がするのだ。

九鬼は電力業界の社長会での発言の責任を取らされる恰好で海洋科学研究所を解雇されたが、その前に彼は辞表を叩き付け、その日のうちに職員住宅を出てしまった。

それ以来、海洋科学研究所とも、柏田とも没交渉だった。柏田の記憶が薄れてしまっても当然といえば当然だった。

九鬼は研究所を退職後郷里に帰ったが、四月から大学に戻っていた。

大学に戻ってしばらくして、大停電の事故調査報告書が公表された。首

都圏と近畿圏の広範囲にわたって発生した大停電事故にもかかわらず、原因の解明が不徹底で、責任の追及も曖昧だった。

これでは有効な対策を講ずることもなく、暖水塊の来襲のたびに大停電事故を繰り返すことになるにちがいない。

白々しい気持ちで報告書を机に放り出し、彼は二度と見る気がしなかった。

彼には妻亜耶子を熱中症に追いやり、生命を奪った停電事故が原因も解明されず、うやむやに処理されてしまうことは許しがたいことであった。

とはいえ、彼自身「急激な気候変動」の研究に夢中になり、身重の妻を残したまま米国の研究機関へ出向し、妻を死に追いやった自分を許すことはできなかった。

彼は後悔し、自責の念に駆られて自分を責めつづけた。もはや、二度と気候変動の研究をすることはないと心に誓っていた。

だが彼は突然襲った四月の真夏のような暑さに戸惑い、今夏も停電事故に襲われるのではないかと急に心配になった。こんな気掛りがあって、人込みのなかでも知らず知らずのうちに柏田の姿を追い求めているのだろうか。

それにしてもなぜあのような大規模な停電事故となったのか、九鬼には未だに釈然としないところがあった。

彼には電力が突然供給不足の事態に陥った原因は原子力発電所の冷却システムの問題不全に起因するものと思えなかった。冷却装置の心臓部である復水器系統が設計構造上想定外の急激な海水温上昇に対応できなかったのだ。いいかえれば、冷却水として用いる海水の水温が急上昇し、復水器の設計上の運転条件を超えたために、冷却機能が十分働かなかったとい

うことだ。

だが問題はなぜ電力供給の不足分を超えて停電範囲が連鎖的に広がり、大規模化していったのかだった。彼にはこの点が理解できなかった。

発端となった発電能力の低下から大規模な停電発生までの因果関係はどうだったのか。電力供給システムは過去の停電事故を通して改善されてきたはずだが、果たして十分改善されたといえるのか。

彼は柏田に会って、もう一度大停電事故の原因を確かめてみたかった。彼は何度か電話したが、柏田を掴まえることができなかった。かといって、

今更海洋科学研究所まで出掛ける気はさらさらなかった。

実際、海洋科学研究所から離れてしまいたいまま、大停電事故の原因はもうどうでもよいことだった。だがなぜか柏田のことが気になってしかたがなかった。人違いするはずがないのに、人違いだったことがショックだった。

彼は吊り革に掴まり、頭上のクーラーの吹出口から吹き出す冷風を受けながら車窓に目を向け、ぼんやりと変わりゆく風景を追った。二度も柏田を見間違ったことが彼のところに暗い陰を落とし、澱となって胸の底を果てしなくひろがっていく。

彼は大停電のことは忘れてしまっていた。一切合切忘れてしまおうかと思った。できればあの忌まわしい出来事をいまず忘却の彼方へ追いやってしまいたかった。

だがそれはできなかった。大停電事故を忘れてしまうことは、必死に熱中症と闘い、ついに力尽き、生命を奪われた亜耶子をも忘れることのように思われるのだ。

彼は亜耶子を思い浮かべた。彼女が残っていたわが子アキラに微笑み

かける老母良子の白い顔が浮かんだ。

その瞬間、老母良子の声はつきり聞こえた。

「このクーラーはあまり効かないね」

母はいつも「子どもにはクーラーよりも自然の風のほうがいい」と言い、マンションのベランダに面したガラス戸を解放していた。だがそのたびに「空気が臭う」と言い、ことあるごとにもうじき一歳を迎えるアキラに「おばあちゃんと一緒に田舎に帰ろうか」と話しかけていた。

亜耶子の死後、彼は一度郷里に帰ったものの、指導教官で亜耶子の兄でもある佐々木教授に呼ばれて大学に戻ることになって、アキラを連れて東京に戻ったのだった。

不意に、脳裡に奇妙な風景が浮かんだ。

「そうか……」

彼は思わず声を上げた。

周りの乗客が不審そうに振り返る。彼は奇妙な風景を思い浮かべながら、素知らぬ顔で車窓に目を向け、素早く変わる風景を追っているふりを装う。

日本列島を取り巻く海が真っ赤に染まり、しばらくすると列島が炎を上げはじめた。白熱の炎のなかで列島が光を放ち、次第に小さくなっていく。やがて列島は姿を消し、一面に赤い海が広がった。

赤い海は徐々に色あせていき、青い海に戻った。青い海に流水が漂い出し、一面白い氷に覆われていく。

電車が速度を緩めた。彼は身体を動かし、乗客の間をすり抜けるようにしてドアのほうへ移動しはじめた。

2

「九鬼先生ですね。先生は大停電事故の発生を予測していたそうですね」
研究室に戻ると、細い黒縁のメガネをかけた若い小柄な男が待っていた。佐々木教授から聞いたという。

彼はちらつと男の顔を見た。差し出された名刺にはM新聞科学部佐藤由紀夫とある。彼は口を嚙んだまま、ふたたび小柄な男に視線を移す。若いと思っただが、よく見ると三〇を過ぎているのか、メガネの奥で小さな目が鋭く光っている。

「今年はどうですか」

佐藤という記者は堪えきれないという面持ちで、口を閉ざしたまま黙っている彼に問いを重ねる。

「分かりません」

「でも先生は大停電の発生を予測なさったんでしょ？」

「暖水塊がやってくることを予想しただけです」

彼は無愛想に応える。妻亜耶子を熱中症で奪われた彼には若い記者の問いが詰問のように響くのだ。

「予想だったのですか。ところで、先生はいまの地球温暖化が急激な気候変動をもたらすタイプだと指摘なされておりますが……」

「と思っております」

返事がぶっきらぼうだ。それでも佐藤という記者の目が輝いている。

「急激な気候変動というのは……」

「急激な気候変動をとまなう地球温暖化のことです。地球温暖化は大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが増加することによって生ずるのですが、

急激な気候変動タイプでは気温上昇が温室効果ガスの大気中濃度の増加に比例して徐々に進行せずに、温室効果ガスがある程度の濃度に達すると突発的に気温が上昇して急激に温暖化が進み、ピークに達するとゆっくり寒冷化していくのです。そして最終段階で急激に寒冷化して終わるといったパターンをたどることが分かっています」

急激な気候変動のパターンはグリーンランド氷床から採取したアイスコア分析の結果から見つかったが、この種の急激な気候変動は過去一〇万年間に二〇数回も出現していたというのだ。

「なにもしなくても、気温上昇がピークに達すれば寒冷化し出すのですか」
「そのようですね」

「じゃ、いま騒いでいる地球温暖化もいずれ寒冷化しておさまるのですか」

「長い目で見れば、そういうことになるでしょう」

「長い？」

「数百年数千年です。地球にとってはほんの一瞬のような長さですが、われわれ人間には長い期間です。でもわれわれにとつてさらに問題なのはその間の過程です。いま進行している地球温暖化がピークに達し、それからゆっくり寒冷化していく数百年数千年の間に出現するさまざまな異常気象や気候異変が大問題なのです。それに最後に待っている寒冷化はどんなものか」

「数百年から数千年の間、異常気象が頻発するというのはですか」

「そうです。地球温暖化がおさまるまでに直面する気候の大変動に、果たして人間社会が耐えられるかどうか、このことがわれわれ人間にとつて一番懸念されることなんですよ」

「本当ですか……」

佐藤は半信半疑の面持ちでいる。

「われわれは極めて短時間に石炭や石油などの化石燃料を大量に使用して、大気中に大量の二酸化炭素を放出してしまった。そして超スピードで大気中の二酸化炭素濃度を増加させている。このままわれわれがいまの生活をつづければ、これからも二酸化炭素を倍加して放出しつづけて、大気中の二酸化炭素濃度を上げていくことになるだろう」

グリーンランドアイスコア分析で、氷期から間氷期へ移行するときには大気中の二酸化炭素が五〇パーセント、メタンが七五パーセント増加しているという。産業革命時に比べ、現在、メタンはとつくに倍増を超えてしまっているし、二酸化炭素は二〇〇六年に三六パーセントを超えて、いま限界ラインに接近しているのだ。

「では急激な気候変動がもうすぐはじまるのですか……」

佐藤はまだ信じられないのか、言葉尻を濁す。

「いや、わたしはすでにはじまっていると思っと思っています。これまで見られなかった現象が現れるようになっていくからです。日本近海にこれまでにない規模の暖水塊群が来襲するようになった。これがなよりの証拠だと思っ」

「大停電をもたらした熱水塊のことですか」

記者の目がふたたび光りだした。

「ええ……」

彼は軽く頷く。不意に、大きな目をくりくりさせた亜耶子の元気な姿が浮かんだ。

「今年も大停電を起こすような熱水塊がやってくるのですか」

「……」

「急激な気候変動のもとでは、あのようなことが毎年繰り返して起こるということですか」

「あれはほんの序の口だろう」

彼は電車のなかで脳裏に浮かんだ奇妙な光景を思い浮かべた。

「え？ じゃ、一体、どんなことが起こるといいますか……」

佐藤は理解できないというように、じつと彼の目をのぞく。

「まあ、空前絶後の気候異変が世界中を襲うことだろう。一回や二回じゃない。これから何年も継続する。世界各地で異常気象が頻発していることから分かるように、すでに地球気候システムはすっかり攪乱されてしまっているからだ。この攪乱がおさまるには少なくとも数百年数千年を要する。いよいよ地球は気候大変動期に突入したと言っているでしょう」

彼は身体の奥からなにか得体のしれない力が突き上げてくるのを感じた。

地球は太陽からエネルギーを受けているが、地表に降り注ぐ太陽エネルギーは均一ではない。赤道付近が一番強い。地球は球体であるうえ、地軸が幾分傾むいて自転しているからだ。

地球は太陽エネルギーで生じた地表の熱分布の不均衡な状態を是正しようとする。このために地球は定常的な熱配分システムをいくつかつくりあげてきた。その最大級のひとつが熱塩大循環（深層海流大循環）だ。これは二〇〇〇年もかけて世界中の海洋を表面から深層への三次元を循環する大海流である。北大西洋から深層へ潜り、南極海の深層を抜けて北太平洋へ向い、そこで浮上して太平洋を戻り、赤道付近を抜けてインド洋を通り、大西洋へ向うとメキシコ湾流に合流して北上して最初の深層へ潜る地点へ戻る。海洋の表面から深層への三次元ルートで、熱や塩類を地球規模で再分配しているのだ。

この三次元循環大海流に最近に異変が生じているらしいという。

「数百年数千年もつづくのですか。それで日本には……」

「でも、実際のところ、日本がいつどんな異常気象に襲われるのか、確実に予測することはまだできません。熱波や日照り、干ばつ、大暴風雨はもちろん、巨大な台風や竜巻も襲い来るでしょう。といっても、いつ熱波や大干ばつがやってくるのかまだはつきり言えません。今年かもしれない。来年も来るかもしれない。いや、毎年連続して超異常気象が何回も発生することになるかもしれない……」

「と言われても、それじゃ、何をしたいのか分かりませんね。いつ襲ってくるか分からないことに対しては誰も真剣になれないでしょうから」

「……………」

彼にはまだ分からないことだらけであった。地球温暖化といっても、地球全体が一樣に温暖化するのではない。気候変動といっても、全世界の気候が一樣に大変動するわけでもない。

大まかに言えることは、地球の気候システムが攪乱し、地表の熱分布のバランスが狂いだしているらしいということだけだった。

彼はいくつもの仮説を立て、生起する異常気象のシミュレーションを重ね、予測への道筋を考えていた。とにかく異常気象の種類別に発生時期や規模程度等を的確に予測できるようにしなければならない。

天気予報のように、異常気象予報ができるようにすることだ。将来の数十年から数百年にわたる異常気象の種類程度別発生頻度予測のほかに、一か月、三か月、六か月程度の詳細な予報ができるようにならなければならない。さもないければ、誰も対策を真剣に考えようとするのはいない。

彼はいつ襲うかわからない超異常気象を来る来るといつづける自分が

まるで「狼少年」のような気がした。

佐藤は口をつぐみ、考え込んだ九鬼をしばらく見守っていたが、軽く会釈して「また伺います」と言うと、立ち上がった。

3

「アキラを田舎で育ててもらおうかと……」

九鬼の声に佐々木教授が机から顔を上げた。

「え？ どうかしたの……」

教授は窪んだ眼窩の奥の小さな目をしばたかせる。

「実は……」

九鬼は一瞬躊躇いを覚える。佐々木は熱中症で生命を奪われた亜耶子の兄で、かつての指導教官だった。とはいえ、亜耶子はもういない。いつまでも甘えているわけにはいかない。

彼は電車のなかで突然浮かんだ奇妙な風景を思い返した。

急激な地球温暖化の進行のなかで、熱波に襲われた日本列島が炎上し、白熱化して燃え尽きてしまうのだ。

「……あの大停電は冷却水用の海水温が冷却システムの設計時に設定した運転条件を超えたことによってもたらされたものだったのです。ですから、たとえ停電を免れることができたとしても、もし気温が異常に急上昇して、家庭用クーラーなどの諸々の機器の設定運転条件を超えたらどうなるでしょうか……」

九鬼はことさら冷静さを装う。

このまえの大停電は発電所の復水器系統の設計上の運転条件を上回る海水温の上昇（熱水塊の出現）によって冷却システムに機能不全が生じ、これが原因となって電力の供給不足が発生したのだった。これと同様に、急激な気温上昇によって日常使用しているクーラーやパソコン、ATMなどの無数の家電製品や電子機器も誤作動や機能停止を起すにちがいないのだ。コンピュータやクーラーなどに組み込まれた半導体などの電子部品には適正に作動する温度範囲などの運転条件が設定されている。それらの条件を超えた場合には誤作動を起すか、安全装置や保護装置が働いて自動的に停止する仕組みになっているのだ。

たとえば、多くの家庭用エアコンの運転条件は、一般に、湿度は八〇パーセント以下で、冷房モードでは外気二一℃から四三℃、屋内二一℃から三二℃程度の範囲だ。ドライモードでは同一一℃から四三℃、同一一℃から三三℃の範囲となっている。

たとえ停電を免れても、運転条件を超える気温急上昇でさまざまな電子機器が突然停止するようなことになればどうなるか。交通信号が点滅を繰り返し、交通機関は止まり、ATMが誤作動を起す。クーラーが突然止まって家のなかには蒸し風呂となり、住民はパニックに陥るにちがいない。大都市システムはマヒし、住民全体が大混乱に陥ってしまうことだろう。

「それでアキラちゃんを田舎へか」

「え、まあ……、母が……」

九鬼はクーラーの効かないマンションの一室で突然熱中症に罹り、アキラの傍らで意識を失って倒れている老母を想像する。

「このところ、暑い日が続いているからな」

佐々木はのんびりとした声で応える。彼は佐々木がまだ事態の緊迫さに

気付いていないらしいことに苛立ちを覚えた。

「熱中症で多くの犠牲者がでることでしょう」

「……………」

佐々木はじつと九鬼の目を見た。それから教授はおもむろに自分が覗いていたディスプレイを彼の方に向けた。

ディスプレイの中央に日本列島が写しだされていた。地球探査衛星から送られたデータの解析画像だった。

佐々木は海洋科学研究所を辞めた九鬼を大学に呼び戻したものの、亜耶子を奪った大停電のことを思い出させてはならないと、海水温上昇や暖水塊のことなど地球温暖化と関連することについては一切口にせず、彼と話すこともなかった。九鬼も意識的に避けて、自分から話題にしようとはしなかった。

暗黙の了解ごとのように、いつの間にか、妹であり妻であった亜耶子を奪った地球温暖化に触れることは、ふたりにとって禁句となっていたのだ。

佐々木は九鬼のこころのなかを窺うように、ディスプレイをじつと覗く彼の目を見ている。

「先生、やはり、北極海の温暖化がかなり進んでいるのですね」

ディスプレイから顔を上げ、彼は教授に目を向けた。

「そうらしい」

九鬼がこだわりなくふたたび地球温暖化を口にし、十分な関心を示したことがまだ半信半疑なのか、佐々木の深く窪んでいる小さな目はまだ彼を窺っていた。

「もし親潮が衰えれば、どうなるんですか。日本列島の周りに出現している無数の暖水塊が列島を包囲するようなことになるのでしょうか」

ベーリング海から千島列島沿いに南下して日本列島の東北部の東岸へ流れてくる寒流が親潮である。親潮は北極海やベーリング海から流れてくる冷たい栄養豊富な海流で、北上してくる暖流黒潮と銚子沖付近で出会う。

黒潮は暖かい海水を運んで北上してくるが、地球の回転の影響も加わり、南下する冷たい親潮に行く手を阻まれるような恰好で、銚子沖で流れを東北東から南東へ転じる。方向を転じて日本列島から離れた黒潮統流は北太平洋海流と名を変えて北米大陸西海岸を指す。

「暖水塊群のせいだ、日本列島周囲で海水温が上昇しているようだ」

親潮の勢力が弱まり、黒潮が銚子沖よりさらに北上しているのか。それとも親潮の水温が上昇しているのか。

「日本海の水温も上昇して列島の周囲全体が暖水化するようなことになれば……………」

「そうなれば、日本列島も熱せられてヒートアイランド化することになりかねない」

佐々木はけしかけるように言う。

「日本列島全体がヒートアイランド化ですか」

大都市の中心部で気温が周辺より高くなることがよくある。このような部分的な高温化現象をヒートアイランド現象というが、都市のなかでもエネルギーを大量消費する高層ビルが建ち並ぶ都心などに島状の高温地帯が形成されやすいのだ。

地面がコンクリートやアスファルトで覆われた大都市の都心部では、日中の強烈な太陽光線に熱せられてコンクリートやアスファルトに大量のエネルギーが蓄熱され、輻射熱を放射する。これらは日没後にも放熱しつづけ、都市では夜になっても気温がさがらない。

「東京などの大都市では二重のヒートアイランド現象によつて、其処彼処に超高温地帯が出現することになるかもしれない」

一瞬、佐々木の目が曇った。

「ヒートアイランドのなかにヒートアイランドができるのですか。そんなことになれば、日本はもちろん、東京などの大都市はどうなりますか」

九鬼の脳裏を真っ赤になって炎上するヒートアイランド列島がよぎる。

真夏には三五度を超す日はざらだ。四〇度を超える日も何日もある。急激な温暖化が進めば、気温がさらに数度から一〇程度急上昇するのだ。

クーラーの排熱や自動車からの高温の排気ガスが集中し、さらにヒートアイランド化を加速すれば、真夏の最高気温時には日陰でも外気が五〇度をはるかに超すことになるだろう。

「発電所ではなんらかの対策を講じるだろうから、暖水塊襲来でふたたび大停電が起こるとはかぎらない。だがたとえ大停電が起こらなくとも、電子機器類が機能不全や誤作動でダウンし、もろもろの家電や電子機器類がストップするおそれがあるとなれば都市機能がマヒすることになるかもしれない……」

「そうなるには、五〇度とか、想像を絶する気温でしょう。そんなことが日本中で起きますか」

「それは分からない」

「そんな気温になるなんて思えません、念のために、東京を脱出して、アキラを母の田舎で育てることにしたいと思っっているんです」

「きみはどうするつもりなんだね……」

佐々木はじつと九鬼の目を覗き込む。彼は教授の視線を避け、しばらく窓の外に目を向けたままだった。

ふと、彼は亜耶子を思い浮かべた。地球温暖化にこころを奪われ、ふたたび気候変動の研究をはじめめるために、わが子を母に預けようとしている自分に対して、彼女ならなんと言うだろうかと思つた。

4

「九鬼先生ですね」

見知らぬひとりの男が研究室を訪ねてきた。

九鬼は差し出した名刺を受け取りながら、男の顔を一瞥する。額が禿げ上がり、どこことなくいささか横柄な感じがするのも柏田に似ている。まえにどこかで会つたような気もするが、心当たりがなかった。

五月も半ば過ぎると、気温が急激に上りだした。日本列島に高気圧が何日も居座り、ガラガラした太陽が真夏のような強烈な光線を放つ。

ことに太平洋側では毎日のように最高気温を更新し、連日真夏日となり、日中は三〇度を超す日がつづいた。古いビルの二階にある研究室は冷房があまり効かず、湿気が多く、蒸し暑い。

男は手に持った小さなタオルで禿げ上がった広い額の汗を拭いた。

そのとき、九鬼の脳裏に駅の雑踏での情景が蘇つた。

「あの、駅で……」

「ええ、あのとき、声をかけられたものです。実は……」

男は柏田の兄で、柏田本人とは連絡が取れず、探しているという。九鬼も弟を探しているらしいことに気付き、訪ねる気になったのだと言つた。

「いつから連絡が取れないのですか」

「暮れから……、毎年、正月には兄弟が顔を合わせるのですが、弟は姿を見せなかった。それで……、勤め先の研究所へ電話したところ、長期出張だというのですがね。そんなことつてあるんですかね」

「ご家族は……」

「あれはいまは独り身で……、研究所の独身寮にいますよ」

九鬼は柏田が独身寮にいるとは知らなかった。かなり年下の綺麗な奥さんがいると聞いていたが、離婚したのか。

柏田の兄は九鬼が弟についてなにも知らないことを知ると、なにか分かったら連絡して欲しいと言いつつ、早々に引き揚げていった。

九鬼も後を追うように、廊下に出た。

柏田と見間違えた男の後ろ姿が見えなくなるまで見送りながら、彼はなぜか胸騒ぎを覚えてならなかった。

海洋科学研究所では研究員の長期出張は珍しくはなかった。だが家族や兄弟に連絡がないとはどういうことか。誰かから研究所へ問い合わせがあれば、「電話があった」ぐらいの伝言は柏田へ届けられるだろう。たしかに返事がないのは変だ。

九鬼は研究室に入ると、受け取ってテーブルのうえにそのまま置いた柏田の兄という男の名刺を手を取った。R大の工学部非常勤講師柏田康平とあった。

彼は名刺をしばらく手に持ったまま、ニヒルな柏田の横顔を思い浮かべた。兄がいることも独りであることも知らなかった。

彼は姿を消した柏田のことを気にしながらも、かといって兄だという柏田康平に協力して積極的に探す気にもなれなかった。海洋科学研究所とは断絶状態だったし、同室だった研究員らに問い合わせる気にもなれなかつ

た。

だが柏田の兄という男がわざわざ訪ねてきたことが、彼に郷里で父のあとを継いで医者となった三歳年下の弟を思い起させた。

一度は佐々木教授にアキラを田舎で育てたいと言ったものの、彼は迷っていた。まだいつ母とアキラを送って郷里へ行くかも決めていなかった。

佐々木に話して決心を固めようと思っていたのに、かえって亜耶子をひとり残したときのように、アキラと離ればなれになることに言い知れぬ不安を覚えていた。それに郷里で祖母に育てられるアキラのことを亜耶子が必要と思うか、急に気になつていったのだった。

そんなとき、弟を探している柏田康平が訪ねてきたのだ。

窓辺に佇み、彼は柏田を思い浮かべた。一体どこにいるのだろうか。

突然、郷里に帰りたいと思った。しばらく顔をあわせていない弟信二郎に急に会いたいと思った。

5

「すまん。オレもいずれこっちの大学へ移ろうかと考えている。それまでこちらでアキラを母上に預かってもらおうと思ってるが、いいかな。圭子さんにもなにかと厄介をかけることになるが……」

九鬼は久しぶりに会う弟に目を向け、しげしげに見た。

開業医としての何年ものキャリアがそうさせたのか、信二郎はゆったり落ち着いた態度で応接セットの大きな椅子にどかかと腰を下ろしている。弟の大きな顔は自信に満ち、身体もひとまわり大きくなって生き生きとし

ていた。

「なにを急に改まつて……。うちにはまだ子がいないから、圭子もとてもよろこんでいるよ。アキラちゃんがいつ来るか、二人で毎日待っていたんだ」

信二郎は親に背いて逃げ出した兄に代わって医者になり、父親の医院を継いで開業医となった。薬剤師の圭子と結婚し、同じ敷地に薬局を開き、夫婦で医院を切り盛りしていた。

「忙しいんだろ」

「ああ、なんとかやっているよ。ところで、母さんは『東京は人の住むところじゃない』と言っているけど、そんなに酷いところなの」

「慣れればそうでもないが、母さんの歳になるとどうかね」

「ここだって、前とは大分変わったろう。東京とそんなに変わりが無いと思うけど、母さんにはマンション暮らしはムリかもね」

「うん、それに停電にもなれば水道までが止まる。大変なんでね」

「停電か、このまえば無事だったけど、今度はこれも危ないと噂されている。なにしろ、海岸辺の原発でも制御棒脱落事故があったらしいし……」

電力会社による原子力発電所のデータ改ざんや事故隠ぺいなどの不正が相次いで明らかになった。なかには点検中に原子炉が臨界状態となる事故さえあったという。

「……………」

そのとき、突然、彼の脳裏にひとつの情景が浮かんだ。

白い水蒸気を噴き上げ、爆発を繰り返す原子力発電所。事故で放射能洩れが起これば、停電どころの騒ぎではすまない。五、六〇キロの距離があるが、風向きではこの辺りまで放射能汚染が広がるだろう。

「最近漁民が騒ぎだしているとか……」

「え？ なにか……」

「よく知らないけど、なんでも原発を止めろとか言っているらしい」

「あの海岸の……」

彼の頭のなかに海岸に聳える巨大な原子力発電所群が浮かだ。漁民が騒いでいる原因はなんだろうか。事故による放射能洩れをおそれているのだろうか。放射能洩れなら漁民だけが騒いでいるのはおかしい。もしかしたら、温排水による海水温上昇がトラブルの原因ではないのか。漁業権消滅範囲を超えて昇温範囲が広がっているということではないのか。

とすれば大停電の事故対策は未だに全然進んでいないということではなにか。暖水塊が来襲すれば、この夏も大停電がふたたび起こるのだろうか。

お茶を持ってきた母良子が加わって、話題が近況や世間話になった。弟や母の話に相づちを打つものの、彼はなにも聞いていなかった。

彼は母の話す声をぼんやりと聞き流しながら、二〇数年前、思いがけず、建設中の原子力発電所を目にしたときのことを思い浮かべた。

家族で海水浴に出掛け、砂浜で貝拾いに夢中になっていたときのことだった。

彼は打ち寄せる波を見ながら波打ち際を歩いて貝殻を探していると、突然視野のなかに異様な物体が飛び込んできた。遠く離れた対岸の岬の尖端からぬつと顔を出しているような姿で彼を見つめていた。無数の鉄パイプで組み立てられた足場に囲まれた建設中の原子力発電所だった。

不意に原子力発電所の全容が浮かんだ。彼は目の前に現われた原子力発電所をしげしげと見た。なにかしら彼に訴えているように見える。暖水塊

の急襲を受け、困っているのか、原子力発電所が喘ぐように揺れている。彼は椅子から立ち上がると、誘われるように家を出た。後ろで母の声があった。

6

「九鬼くんじゃないか」

振り向くと、柏田が立っていた。

「……………」

九鬼は声も出さず、呆然として柏田の禿げ上がった大きな額と不釣り合いな黒々とした無精ヒゲの覆われた髭面をじつと見た。

「久しぶりだね。どうしてこんなところに……………」

柏田は微笑んだ。

九鬼はわれに返ると、柏田と同じことを繰り返した。そのことに気付いて、二人は互いに顔を見合わせ、笑った。

退社時のラッシュには間があったが、駅頭には人が群がり、人込みができていた。先を急ぐ行き交う人びとが列をなして流れていく。

二人は人込みのなかでしばらく立ち話をつづけたが、九鬼は近くにコーヒーストップを見付け、柏田を誘う。

駅構内にあるガラス張りのコーヒーストップにはスタンド風の高く細長いテーブルがあり、高い椅子に腰掛けてコーヒーストップを啜っている客の姿が丸写しになっている。

「いまどこに」

「すぐその原発で……………」

柏田は九鬼がまえに訪れたことのある原子力発電所で仕事をしているらしい。

「それで……………長いの」

「そう。あそこは温排水の放出に水中放流方式を採用しているんだが、最近、温排水による昇温範囲が漁業権を消滅した範囲より広がり出すことが多くてね。漁民とのトラブルも頻発するようになって……………」

水中放流方式を奨めたのが柏田だった。自分が奨めた方式のアフターケアとしての対応のために、発電所へ短期出向していると言う。

「トラブルの原因はやはり海水温の上昇じゃないんですか」

「そうとしか考えられないんだが、漁民は納得しない。そこで温排水の放出口をもう少し下げて見ようということになって工事をやっているんだ……………」

発電所の温排水をさらに二、三メートル下に放流するのだという。水深を下げることによって温排水と海水との混合度を高め、昇温範囲を漁業権消滅範囲に留めようということらしい。だが問題は新たな放出口となる二、三メートル下の海水温がどれだけ低下しているかだった。

「うまくいけばいいですね」

「まあ、ムダだろうな」

柏田は九鬼の心配を他所に相変らずニヒルな薄笑いを浮かべ、素っ気無く他人事のように言う。

来襲する暖水塊は巨大な高温水塊だ。放出口を二、三メートル程度下げたところで水温低下はしたもので、期待するほどの効果はないのだ。

「ところで、柏田さん。大停電の本当の原因はなんだったのですか」

温排水の昇温範囲を問題にするより、原因対策を優先すべきではないのか。九鬼はそう言いたかった。

「原因か。事故報告書を見ていないのか」

「本当の原因は……」

「海水温の異常上昇が直接の原因だ」

「事故原因報告書では、海水温の異常上昇があり、これに対する運転要員の対応ミスや原子炉の自動停止によって供給不足が生じ、大規模な停電が発生したというようですけど、なぜ停電があれほど広い範囲に拡大したのか……」

「一年前、日本で発生した大停電は、まず関西を襲い、近畿圏一円に広がり、しばらくして関東に飛び火し、首都圏一円におよんだ。」

「いろいろな要因が重なったからだろう」

「いろいろなことで、一体なんですか」

「いろいろなことが重なったということ」

「そんなことでお茶を濁して済むんですかね。原因の一つ一つを徹底的に洗い出して対策を講じるのでなければ、この夏にも大規模な停電が起こるでしょう。この夏ばかりではなく、毎年のように、大停電が頻発するようになるし、規模も年々大きくなるにちがいない」

「そうかな……」

「海水温の異常上昇はこれからもたびたび起こる。いや、海水温の異常上昇が常態化しつつある」

「……」

柏田は口を閉ざしたまま、ガラス越しに通路を行き交う人びとを眺めている。

「海水温が復水器の設計条件を超えるほどの高温になれば、発電能力の低下や原子炉の自動停止が生じるかもしれない。たとえこうなって電力供給量が不足する事態が生じても、直ぐ別の休止中の発電所を緊急稼働して直ちに不足分を補えさえすれば、停電を防げるはずだ。電力会社はこんなふうに考えているんじゃないんでしょね」

九鬼はけしかけるように言う。

「まあ、そんなところだろうな。温排水の昇温範囲対策以上のことは考えていないようだからな。漁民とのトラブルを回避できればそれでいいのだと思っている」

柏田は九鬼の心配を軽く受け流す。

「でも暖水塊が個々の発電所を襲うような段階は過ぎて、日本列島の周辺海域の海水温が軒並み上昇しはじめている。いずれ臨海発電所はすべてほぼ同時に高温海水に見舞われることになる。だとすれば日本全域に大量の電力不足が生じることとなる。こうなれば予備の発電所を稼働しても追いつかないかもしれない」

「それで……」

「予備の発電所を稼働して電力不足を凌ごうとする対策はムリだと思う。むしろ、海水の高温化に対応して、個々の発電所で復水器を高水温用に改造すべきだと思う。現行のいわゆる設計条件水温限定方式をどのような水温変化にも即応できる方式の復水器へ変更することだ」

「それには復水器の細管の総延長距離を延ばしたり、循環水量を増やしたりする必要があるが、可能かどうか。それに合わせて循環ポンプも変えなければならぬ。たとえそのようにできるとしても、莫大な費用と工事にかなりの日数が必要だし、運転コストもかなり嵩むことになるだろうな」

発電所用復水器の熱交換装置は何万本もの一〇数メートルの細管で構成されている。細管はチタンなどの金属でつくられ、そのなかを冷媒などの熱媒体を高速で通し、細管の外側の液体や気体などと熱のやり取りをする仕組みだ。

海岸に建設された原子力発電所など蒸気でタービンを回して発電する汽力発電所では殆どが海水を冷却に用いるが、海水は膨大な量にのぼる。現在、一一〇万キロワットの原子力発電所クラスでは、循環ポンプで毎秒七〇トンの海水を細管に送り込んでいるが、これには総発電電力量の一パーセント弱の電力を消費している。

「これともうひとつ考えておかなければならない問題がある。なぜ、あのとき、トカゲの尻尾ぎり方式で停電範囲を小範囲に止めることができずに、広範囲に拡大してしまったのかです」

「自動停止で、急激に大電力がロスしたからだ」
「でもあの大停電はそんな単純なものだったのですか。一部の発電所が止まれば、電力生産が途絶えて供給不足となり、部分的に需給バランスの崩れが生じることは分かりますが、局部的に生じた停電（供給不足）がなぜあのような広範囲に波及して大規模な停電事故を引き起したのでしょうか。これにはこれまでとは違った別の要因が働いたからじゃないんですか」

「……………」

柏田は「なにを言いたいんだ」という目を向け、黙ってじつと九鬼を見据えている。

「あの大停電には電力供給不足のほかに、これとは別に停電を大規模化した要因があったとしか考えられないのですよ」

九鬼は考えていること話した。

電力を生産する発電所面の対策のほかに、急激な気温上昇下における電力供給システム面、ことに電力送電システムの問題点を洗い出し、システム構成のほかに、事故自動チェックシステムなど全般的な見直しが必要だ。真夏日が何日も続いていたから、高温下で送電や制御用の電子機器類に誤作動や機能不全が生じたのかもしれない。これらを完全にチェックしておかなければ、また大規模停電を引き起こすことになりかねない。

「そうかもな。だが問題点を洗い出すといっても、相手が超巨大システムだ。事前に問題点をすべて洗い出すことは至難なことだ。問題が発生してはじめて問題だったと気付くのが関の山だろう」

「かといって、温排水の昇温範囲対策だけでお茶を濁してすむと思ってい

るわけでもないでしょう」

「うん……」
柏田は口を嚙み、ガラス越しに通路を歩き来する人の群れを眺めていた。しばらくして、やおら九鬼に暗い目を向け、「ところで、今夜、漁民たちとの話し合いがある。出てみるか」とぼつんと言った。

7

「親潮（千島海流）の水温が上昇しているのかな」

九鬼はディスプレイに写しだされた地球探査衛星の画像データを見て、
呟く。

彼は虚ろな目をしばらくディスプレイに目を向けていた。

頭のなかを真っ赤に染まった日本列島が渦を巻く。

彼は椅子から腰を浮かせてたものの、佐々木教授がまだ海外出張から戻っていないことを思い出し、ふたたび椅子に身体を落とした。

今年はおかしな天候がつづいた。例年ならまだ寒の名残りが残る二月中旬に初夏のような陽射しがつづいたかと思うと、三月になって冷たい風が吹き荒び、雪が降り、真冬に戻るのであった。

こんな荒々しい天気と激変する気温に草木は完全に調子を狂わせてしまった。桜は例年より早く咲くものが多かったが、満開になるまえに若葉が出たり、瞬く間に強風につぼみはもぎ取られ、開いた花びらは散ってしまった。雑草が蔓延り、いたるところで繁茂した。

檜などの常緑樹が突然落葉した。まだ青みの残る葉を落とし、夥しい枯葉が春先の強風に舞った。

「それとも……」

彼はひとり呟く。

五月が終わらないうちに、日本列島をとりまく海の表面水温がぐまなく二八度を超えていた。西の方は三〇度を超え、三〇度ラインは銚子沖までおよんでいるのだ。

太平洋の赤道付近で熱せられた海水が西へ流され、フィリピン諸島に阻まれて北上し、黒潮となる。黒潮本流は日本列島の東側すなわち太平洋岸に沿って北上し、例年なら、銚子沖付近で日本列島を離れ、その続流は北大西洋へ向う。だが今年さらさら北上し、親潮の通り道である三陸沖に達しているのだ。

九鬼はてつきり北極海から流れ出る親潮が弱まっていると思った。だがそれにしては日本列島北部の海面水温が高すぎる。もしかしたら、北極海の海水温が急上昇しているのかもしれない。これによって、親潮の海水温

までが著しく上昇しているのではあるまいか。

この数年、北極圏の気温が急上昇していた。

北極海から大量の海水が消え、グリーンランドの水床も急激に縮小していた。氷の日覆いがなくなった海面や剥き出しとなった陸地は太陽光線をよく吸収し、日中に存分に熱を貯える。夜になると放熱して、北極圏は冷えることがない。

日本列島周辺の海面水温は年々高くなっていった。夏には表面水温が三〇度を超える海水が九州や四国を越えて北上し、勢力を広げ、房総沖に迫っていた。

彼はこの夏には日本列島全体を三〇度の海水が周囲を取り巻くことになるとかもしれないと思った。こうなれば、九州や四国はいうにおよばず、本州沿岸のかかなりの範囲に三五度を超える暖水塊が押し寄せるだろう。

昨年、暖水塊に襲われ、発電を停止した原子力発電所を思い浮かべた。今夏もこれらの発電所のいくつかが発電停止に追い込まれることになるのか。

地球温暖化で日本列島沿岸の海面水温がこれほど高温になるとは誰にも予想できなかったにちがいない。高温の海水に取り囲まれた日本列島はどうなるのだろうか。

海面からの蒸発量が増え、降水量が増えるのか。低気圧の発生頻度も増え、台風も勢力も強大化するにちがいない。それよりも、高温の海の囲まれた日本列島が熱の溜り場になって激しい気候異変に曝されることになるのではあるまいか。

彼は日本列島全体がヒートアイランド化するのではと指摘していた教授の話の思い浮かべた。だが日本全体がヒートアイランド化するとはどうい

うことか。日本列島が地球のなかのヒートアイランドとなるということか。

日本列島が白熱の炎に包まれ、炎上する様子が目に浮かんだ。

太平洋高気圧が日本列島の上空に張り出し、何日も居座り続ける。家庭やビルのクーラーは朝から唸り出す。モーターは一日中途絶えることなく回転する。

電力需要は急増し、毎日ピークを更新する。停電の不安が囁かれるなか、発電所はフル回転を続ける。

そんなある日、日本列島が突然天高く火を噴き上げ、白熱の炎に包まれ、炎上してしまうのだ。

九鬼はもう一度ディスプレイを覗いた。日本列島の周囲の海域全域が赤く染まっている。海水温が三〇度を超えているのだ。

彼は郷里から戻ってから、毎日大学の研究室に立て籠もった。ディスプレイを覗き、地球探査衛星のデータをチェックしつづけた。

だがディスプレイをぼんやり眺めていることが多かった。なんとなく身体が怠く、気が入らないのだ。疲れが溜まっているのかもしれない。マンションに帰って身体を休めようかと思うが、アキラがいなと思うと、その気にもなれなかった。

今日も彼は漫然とディスプレイに向っていた。

突然、荒々しい声があった。彼は辺りを見回す。誰もいない。彼はふたたびディスプレイに目を向ける。

不意に、日焼けした漁民たちの顔が浮かんだ。柏田に誘われて覗いた漁民集会の会場だった。

電力会社幹部や原子力発電所関係者を取り囲んだ漁民たちが声を荒げ、声高々に抗議する声が響く。

「地球温暖化で海水温が上がったから温排水の拡散範囲が広がったというが、原発は二酸化炭素を出さないから温暖化対策になると言っていたではないか……」

「二酸化炭素の代わりに大量の温排水を出しているから二酸化炭素を出しているのと同じだ。温排水で海水を暖めているのだから、地球を温暖化しているのとなんら変わりがない……」

「温暖化で海水温が上がっているのか、それとも温排水のせいで海水温が上がるのか、一度原発や火力を全部止めて確かめてみる……」

「原発は二酸化炭素を出さなくても、大量の温排水を出すなら、同じだろ。どっちにしても地球を温暖化するんじゃないのか。それに原発の温排水は火力より一割から二割多いんだ。温暖化対策になるなんてデタラメだ……」

「海水温は変化して例年やってきた魚が回避してこない。漁業者には死活問題だ。温排水のせいで寒流魚が寄りつかないのだ。温排水による昇温範囲がさらに広がるとますます魚が離れていく……」

「地元では原発が発電した電力を殆ど使っていない。それなのに放射能汚染のおそれのある原発をつくり、排気や温排水を全部地元で吐き棄てている。そのくせ海水温があがったのは地球温暖化のせいで、それで温排水の拡散範囲が広がったという。だったら原発はもういらん、もう沢山だ……」

「なんでも大きくすりやいいというもんでもないだろ。こんな大きな発電所つくって大量の温排水を吐き出す。電気を都会へ送るなら、温排水も一緒に送り付けろっていうんだ……」

「原発は温排水を吐き出し、放射能を垂れ流す。温排水による影響はない範囲に止める、放射能も極微量で健康には影響がないと言ってきた。だがどうだ。海水温は上昇し、魚がいなくなった。食物連鎖で海藻や貝類の放

射能汚染が進んでいる。お前たちは海を殺し、オレたちの息の根を止めようとしている。こんどはオレたちの番だ……」

「原発はオレたちには無用の長物だ。どこへでももつていってくれ。オレたちと海と共生できるものしかダメだ……」

漁民の抗議が延々とつづく。

ディスプレイに目を向けている九鬼の頭の中に響き渡る漁民たちの声に溢れ、延々とこだましつつづけた。

8

「弟から連絡がありました」

人の気配を感じて、九鬼がディスプレイから顔を上げると、禿げ上がった額に汗粒を浮かした男が立っている。

柏田康平だった。

開放したままにしてあるドアを何度かノックしたという。

九鬼はディスプレイに気を取られていたわけではなかった。ドアのノック音を漁民たちが机を叩いている音と聞き違えていたらしい。

彼は脳裏に住みついたように機会あるごとに蘇ってくる漁民集会のざわめきを急いで頭の片隅に追いやる。おもむろに机から離れて、柏田康平を来客用にも使う作業用テーブルへ案内した。

彼は柏田康平の突然の出現に驚きを感じたものの、わざわざ研究室まで訪ねてきたのにはなにか特別の用件でもあるのかと思ったのだった。

柏田康平は礼を言いながら、突然の訪問を謝した。

彼は軽く応じて、広い額から顔全体にじろつと視線を走らせる。彼の視線に促されて、柏田康平は口を開いた。

「昨年の停電事故がなぜ大規模化したのか、原因をお調べとか……、実は、私も気になっておりましたので、先生のお話を一度伺いたくて……」

昨年襲った停電が小範囲で収まらずに、なぜ連鎖的に広がって大規模化していったのか、ずつと不思議に思っていたという。それが近畿圏に比べ、なぜ首都圏のほうでより顕著に現れたのか。

「いや、電力供給システムには異常が発生すれば自動的に他のルートを探して再接続する仕組みなどが組み込まれ、事故時に停電範囲が極力狭い範囲に収まるようになっていっていると聞いていたもので……、いささか疑問に思っただけです」

「やはり、なにか別の要因が働いたと、先生は見ておられるんですか」

「ええ、そう考えなければ辻褄が合わないじゃないかと……」

「それで、どんな要因が考えられるんですか」

柏田康平はじつと彼の目を覗き込む。

「電力供給システムに組み込まれている機器や装置が気温の急上昇といった動作環境の急変によって誤作動か機能不全に陥ったのじゃないかと……。これは単なる推測の域を出ていないものですが、いまはそんな気がしているんですがね」

彼は柏田康平が別の考えをもっているにちがいないと思い、ことさら自分の考えが推測にすぎないものであることを強調した。

「なるほど、そうかもしてませんね。IT機器が多く使われていますからなあ……。太陽光線の直射を受ければ、機器類は軽く五、六〇度になるだろうし、最近の気温上昇でさらに高温になっているかもしれない」

柏田康平は自分に言い聞かせるように呟く。だがその程度の温度上昇で誤作動を起すというのか。

「いや、確認データがないので……。ところで、柏田さんはどんなふうにお考えなんですか」

「わたしですか。実は発電所側に問題があつたんじゃないかかと考えていたんですが、これは間違いかもしれません」

「発電所側ですか。それは……」

「こんなふうを考えていたのです……」

柏田康平は考え考え、つぎのようなことを言った。

日本の発電用原子炉は殆どが軽水（通常の水）を用いてタービンを回転させる蒸気をつくる軽水炉だが、これには加圧水型と沸騰水型とがある。

両者の違いは発電用の蒸気をつくるシステムが間接方式か直接方式である。

だが、それより重要なことは方式の違いによって原子炉を制御する制御棒の挿入方法が異なるということである。一方は上から落とすもので、他は下から挿入するものである。近畿圏と首都圏とで停電の広がり方が若干異なつたのは、このような発電用原子炉の制御システムの違いによるのではないかという。

「そんなことが影響するんですか」

「はつきり言い切れませんが、熱水塊の襲来という緊急時の対応のタイミングに微妙に影響したのじゃないかなと思えるのです」

柏田康平は極めて慎重な言い方をする。

関西方面に電力を供給している発電所の原子炉は加圧水型であり、首都圏向けは沸騰水型であつた。

九鬼は上から落ちていく制御棒と下から挿入する制御棒を思い描いた。

制御棒は長くて大きく、かなり重い。上からは重力でひとりで落ちていくが、下から挿入するには制御棒を押し上げるかなりの力が必要だ。だがこれらの違いが停電規模の広がり具合にどう影響するのだろうか。

「原子炉の制御に要する時間に差があるというのですか」

彼はじつと柏田康平の顔を見た。

「熱水塊の突然の襲来に原子炉の運転員はかなり戸惑つたと思う。数基ある発電所で原子炉の熱出力抑制や炉の緊急停止の行動に出るまでに時間のロスやラグが生じた。これが停電範囲が断続的に拡大していった原因じゃないかと思つたんです」

「では停電範囲の拡大は電力供給システムの問題ではなく、発電所からの電力供給が段階的に低下し、それに応じて停電範囲が拡大していったということですか……」

「いいえ、先生が指摘するような電力供給システムを構成する機器の誤作動や機能不全がなかったとは思えません。異常高温下では機器の誤作動や機能不全が発生しやすいものです。私は発電所サイドにとられ過ぎていたようです。発電所をも含めたシステム全体の問題として捉えるべきでした」

柏田康平は彼に微笑みを返しながら、さらに付け加える。

「……実は、熱水塊の襲来といった緊急事態に、あの地点に立地している数基の原子力発電所が一斉に緊急停止しなかったのはなぜか、このことが気になっていたので。もしこれらの原子力発電所が自動的に緊急停止すれば一度に大規模停電が発生するにしても、停電範囲が段階的に広がっていくようなことにはならないはずですからね」

彼は柏田康平の目をじつと覗き込む。柏田康平はなにか重大なことを懸

念しているらしい。

「冷却水の水温が急上昇すると、原子炉が自動的に緊急停止するのですか」

「設定温度を著しく超える事態がある時間継続し、炉が過熱する危険があるときにはその可能性があるでしょう」

柏田康平は一瞬むっとした顔をした。

「すると、手動……」

「そうです。この場合は判断を誤れば、極めて危険な状態に陥る」

「そういうことだったのですか」

柏田康平が弟を探していたのはそのことを確認するためだったにちがいない。

停電規模が段階的に広がったのは、瞬時に緊急停止するはずの原子炉が停止せずに核反応を続けていたということか。柏田康平はこのことを問題視していたのだ。

なぜそのようなことになったのか。緊急停止の自動装置が働かなかったのか。それとも自動装置を解除していたのか。解除していたとすればなぜそうしていたのか。

海水温の上昇によって温排水の限度を超えた昇温が常態化していたからか。自動停止によってそのことが明るみに出ることを避けたかったのか。

「わたくしにはあの程度の熱水塊では自動装置が作用しなかったのか、それとも自動装置を解除して運転していたのか、分かりません。制御システムの違いによって制御棒の出し入れに時間差が生じたのかも分かりません。でも、これらが全然ならんらの影響もおよぼさず、電力供給システムだけの問題で停電規模が段階的に大規模化していったとはとても考えられないのです」

九鬼はようやく柏田康平がわざわざ訪ねてきた訳が分かったような気がした。

大停電を呼び起こしたような熱水塊は今後たびたび日本の沿岸を襲うことだろう。そのたびに原子力発電所は極めて危険な状態に陥る可能性があるのだ。

酷暑期の電力需要を賄うためにできる限り原子炉の緊急停止を避けたいという思いから、自動装置を解除して運転することがあるのだろうか。もし解除したまま運転するときは、緊急時における炉停止の判断を運転員に委ねているのだろうか。だとすれば、もしもの時に制御棒の出し入れが、自動の場合と同じように、スムーズにおこないうるものだろうか。ことに下方から押し上げて挿入するタイプの構造の沸騰水型原子炉ではどうか。

原子炉の自動停止装置を解除することなどありえないことだ。いや、あつてはならないことだ。

九鬼は妄想のような考えを急いで打ち消した。

だが昨年の大停電のうちに、首都圏における停電範囲がかなりの間隔を置いて段階的な広がり方を見せたのはなぜか。ふたたび疑念が頭をもたげる。あれは自動停止装置を解除していたからか、それとも沸騰水型原子炉のせいだったからなのだろうか。

そうじゃなくて、電力送電システムの問題だったのか。

突然、母良子の腕に抱かれたアキラの寝顔が浮かんだ。背後に亜耶子の怒って紅潮させた顔が見えた。

彼は郷里の近くにある原子力発電所を思い浮かべた。暗い闇夜のなかで青白い光を発し蠢く得体のしれない巨大な物体を思い、大きな溜息をつい

た。

9

「どうした。なにを考えている」

目を開けると、目の前に佐々木教授が立っていた。

柏田康平が帰ったあと、九鬼はしばらく椅子に座ったまま立ち上がるこ
とができずにいた。

大停電のほかに、IT機器や家電機器の機能不全が懸念され、さらに原
子炉の暴走の危険が加わったのだ。

彼はあれやこれやと思いつくままにデータの整理に没頭したり、さまざま
な片づけごとをこなして気を紛らわせようとしても、一度脳裏に焼き付
いた過熱していく原子炉の映像が消え去ることがなかった。

アキラを郷里に預けてきたのは間違いではなかったのか。亜耶子をひと
り日本に残して熱中症に追いやったように、同じ轍をふたたび踏もうとし
ているのではないか。

この夏も、熱水塊の来襲を受け、高温の海水（冷却水）が復水器に流れ
込み、原子炉が十分冷却されないまま次第に過熱していくのか。運転員が
自動緊急停止装置をオフにしていることに気づき、早めに制御棒を挿入す
るだろうか。それとも大規模停電を恐れ、過熱した蒸気をタービンへ送り、
フル回転で電力生産をつづけるのだろうか。

佐々木が現れたとき、彼は目を閉じ、もう一度柏田康平とのやり取りを
思い返していたのだった。

「お帰りでしたか」

彼は反射的に椅子から立ち上がりながら、言った。

「日本列島ヒートアイランド化モデルが思いのほか反響を呼んでね。早速、
二、三か所から共同研究の申し出があったよ」

日本列島ヒートアイランド化モデルは地球温暖化による地球上の熱分布
不均等化に関する理論だった。世界の気温が上昇するなかで、北半球にも
熱が集中集積するいくつかのホットスポットが形成されているが、このメ
カニズムを解明するのに役立つものと評価されたのだ。

はじめてヒートアイランド化のアイデアを耳にしたとき、彼がまだ半信
半疑だった。だが佐々木教授は早速このアイデアを理論モデルとして纏め、
国際会議の席で発表してきたのだった。

「どこですか、関心をもっているのは……」

彼の頭の片隅で過熱気味の原子炉が青白い光を発して燃えつづけている。

「ACARもあつたが……。ところで、なにか気になることでもあるの」

教授は九鬼がいつもと違って浮かぬ顔をしていることを感じたのか、窪
んだ小さな目を光らせ、じっと窺うような目付きをした。

「大停電の原因は発電所サイドにもかなりのウェイトがあつたようで……。
今後は停電のほかに発電所そのものの事故をも考えておかなければならな
いかもありません」

「どういうこと……」

「原子炉が暴走することも考えられるらしいというのです」

彼は原子炉の構造や緊急自動停止装置の解除の危険など、柏田康平から
聞いたことをすべて話した。

「最悪ではメルトダウンということか……」

「……………」

窪んだ小さな目が彼を捉えて放さない。彼は頭を鷲掴みするような佐々木教授の視線にじつと耐えた。

彼は郷里の海岸にある原子力発電所を思い浮かべた。

熱中症の危険を避けようと大都市東京から母良子と郷里へ向ったわが子アキラに、原子炉暴走の危険が待ち受けていたのだ。熱中症を避けようとして、かえってアキラを新たな危険に近づけてしまったのか。

「対策はないのかね」

「電力関係者が最悪のケースを認識しているかどうか」

不意に、彼の脳裏に「金や時間のかかることは土台ムリだ」と言い、温排水の放出口を数メートル深いところへ移動しようとしている柏田のニヒルな顔が浮かんだ。

電力サイドでは大停電事故にこりて、運転員には多少ムリしても発電をつづけさせるようとするにちがいない。一方、漁民たちは海水温の上昇範囲をこれ以上広げまいと取水口を塞ぎ、温排水の排出量を抑えにかかることだろう。

そんなことになれば原子炉は一気に暴走しかねない。

「分かった。だがね、日本列島ヒートアイランド化問題は、停電や個々の原子力発電所のメルトダウンといった一地域のことじゃないよ。これは日本全体の問題なのだ。いや、日本だけの問題じゃない。世界の、いや、地球全体に関わる問題だ。停電事故や原子炉のメルトダウンもその一環にすぎない。日本列島がヒートアイランド化すればどうなるか。世界のいたるところで同じようなことが起きるのだ。そうなれば人類はどうなる。このことを社会へ突き付けてやろうじゃないか」

九鬼は頭を思いきり殴られたような気がした。わが子アキラを思い、い

ままで停電や原発事故に気をとれられたことが恥ずかしかった。

彼はひさしぶりに顔を紅潮させている教授を眩しそうに見た。

第二章

10

「九鬼先生、地球温暖化で日本が地球上のホットスポットとなり、日本列島全体がヒートアイランド化するって、本当ですか。一体、いつからそうなるのですか」

まえに一度訪ねてきたM新聞の佐藤がソファに腰を下ろすなり、メガネの奥から鋭い目を突き出し、唐突に言う。

「もう始まっている」

九鬼は微笑みを浮かべ、ソファの中央にデンと構えている記者の細いメガネをかけた小造りな顔をしばらく見ていたが、ぼつりと言う。

「え？ もう始まっているのですか。予測ではなかったのですか」

「残念ながら、予測することができなかった」

「でも世界の気温上昇はまだ一度そこそこじゃありませんか」

「平均気温はそんなもんですね」

地球上の気温は均一ではない。地球表面では赤道直下や熱帯などの低緯度地域に比べ、高緯度のほうが一般に気温が低い。

地表の気温を表わすときにはこれらを平均した値で示すのだ。地球温暖化で一度上昇したといっても、世界中で気温がまんべんなく一度上昇しているのではない。丁度一度上昇したところもあれば一〇度上昇したところもあるし、二度低下したところもある。これらを平均すれば、地球全体で一度上昇しているということだ。

「では世界中の分を一身に引つかぶって、日本だけが高温になるというんですか。そんなの、不公平じゃないですか。日本の二酸化炭素排出量は年々低下して、いまでは世界の五パーセントにも達していないでしょう。どうして日本だけが二酸化炭素を排出したツケを支払わされることになるのですかね」

佐藤は細く尖った鼻をびくびくさせながら言った。

「日本列島の地理的位置のせいかな。地球温暖化で熱帯が中緯度付近まで広がり、海面水温の高温域も広がってきている。それに日本周辺には熱が溜まりやすい気圧配置がしやすい。北極圏が温暖化して以来、ますますその傾向が強まってきている」

地球には太陽光線エネルギーが降り注ぐ。太陽光線エネルギーを受けた地球は赤外線を放射し、陸地や海洋、大気を暖める。だが地球に降り注ぐ太陽光線エネルギーの量は均一ではなく、位置によって異なる。太陽と真正面に向いているときの赤道付近が最大で、高緯度になるほど少ない。

地球の自転軸が傾斜していることもあって、北極や南極では一年のうち殆ど太陽を見ない日が何日もある。また地表から上空へいくに従って大気が薄くなり、気温も低下する。それも成層圏あたりまでだ。

地球に大気や海洋がなければ、地球上に灼熱の地獄と厳寒の墓場が広がり、人間や生物も棲めない死の世界となってしまう。これを救っているのが地球の大気と海洋である。ことに大気中に含まれている微量の温室効果ガス二酸化炭素が重要だ。

赤道付近で熱せられた大気は上昇し、海から蒸発した水蒸気をとまなつて流され、雲を作り、雨を降らす。海洋は大量の熱を貯える。大気中や海洋では、熱によって暖められて軽くなった大気や海水が対流によって冷た

くて重い大気や海水と入れ代わったり、大気や海水に含まれている水蒸気や塩分を入れ替えたりして、循環を繰り返す。こうやって地表に降り注ぐ太陽光線エネルギーを地球上で再配分しているのだ。

いいかえれば、地球上の熱配分をつかさどる大気や海洋の循環システムのエンジンを駆動しているのが、地球を暖めている太陽エネルギーそのものなのだ。

長い時間をかければ、地球上の熱配分も万遍なく進み、熱分布も均一化の方向をめざすはずである。だが、地球上に降り注ぐ太陽光線エネルギーの量に場所による差異があるかぎり（インプットされるエネルギーの量が異なる）、大気や海洋の対流は永久につづく。

それに地球上における熱の移送や配分はそう簡単ではない。大気にしろ、海水にしろ、温度が違えば簡単に混合しないのだ。そのうえ大気や海水にはさまざまなものが混じったり溶け込んでいる。そのため、大気中に暖気団や寒気団が固まって別々に存在したり、海中では暖水塊や冷水塊が拡散されずに海洋をさまよいつづけることが往々にしてある。

大気や海水の流れ（循環）が滞ったり、逆に、大気や海水の何か所か複数か所に暖気や暖水あるいは冷気や冷水が集中し、蓄熱しまうことがある。ことに、地球温暖化によって熱の配分システムに変調をきたしており、一層地球上の熱分布が不均衡の度を強めているのだ。

「それで日本付近が世界のホットスポットということですか。どうして日本だけがそんなことになるんですか」

「エルニーニョ現象やラニーニャ現象のように海域の広い範囲の一部で海水温が変化すると同じようなことかな」

エルニーニョはペルー沖から中部太平洋赤道域の海水温が上昇する現象

であり、ラニーニャは強い東風で中部太平洋赤道域の暖かい海水が西へ流されて生じる現象である。ラニーニャ現象は太平洋西部の海水温を上げるので雨雲が活発になったり、台風が発生しやすく、台風は大型化しやすい。

「日本周辺海域にエルニーニョが発生するということですか……」

「日本列島がヒートアイランド化する」

「どうしてそんなことになるのですか」

「北極圏が温暖化して海水温が上昇しており、ベーリング海から南へ流れ出る海流の水温が上昇している。これに対して、暖流である黒潮の水温がさらに上昇し、日本列島周囲の海面海水温が三〇度を超え出した。これとともに、北極圏から張り出す寒気も弱まっている。それにジェット気流（偏西風）が日本列島付近から離れて、日本列島が無風地帯のポケットに入り、熱を溜め込むことになるらしい」

ジェット気流が日本列島から離れて無風地帯のポケットができるのは、日本付近でジェット気流が大きく蛇行して高緯度へと後退するか、ジェット気流が二筋になって高緯度と低緯度に分かれ、ジェット気流が日本列島から離れてしまうときだ。

「そのポケットがホットスポットということですか」

「とにかく、このような条件がそろえば、そこに熱が溜まりやすいポケットができる。こうして日本列島は灼熱化してヒートアイランド化していくと考えられる」

九鬼はふと日本列島を包むポケットの上空に経済成長が著しい中国大陸から流れ込んでくる二酸化炭素濃度の高い大気が居座っているような気がした。さらに日本列島を取り巻く高温の海水域がバリアーとなって熱の放散を妨げるのではないか。

「どんなふうになるのですか」

「そのときは日本列島の広い範囲に熱波が襲い、付近の気温が極度に上昇することだろう」

彼はなぜこんなことを断定的に言うのか自分でも分からなかった。まるで自分の意識とは別の指令に従っている自分がいるようだった。国際会議から帰ってきた佐々木教授と久しぶりに話したとき、突然、インスピレーションが湧いた。そのインスピレーションが彼を揺り動かしているのだ。

「一体、それはどんな条件ですか」

「たとえば、日本列島周囲の海域で海面水温が三〇度前後になり、偏西風が日本列島から離れ、太平洋高気圧の張り出して日本列島を覆うように広がれば……、このような状態が何日かつづけば、気温は確実に急上昇しはじめる」

「日本はどうなるのですか」

若い記者は血の気のない顔を九鬼の顔に近付ける。

「多分、日本列島全体が地球のヒートアイランドとなる。このようなホットスポットが地球上の方々にできると、地球の気候システムが大攪乱を起し、気温がますます不安定化していく。熱の再配分のために、気候がさらに振幅の大きい大変動を起すことになる。たとえば、エルニーニョ現象やインド洋ダイポールモード現象のときのようにだ」

エルニーニョ現象は太平洋で発生する現象であるのに対して、インド洋ダイポールモード現象はインド洋で起こる海水温変動現象である。通常ではインド洋東部の熱帯域で海水温が高いが、この海域の海水温が低くなり、アフリカ沖で海水温が高くなる現象だ。こうなると地球の気候にも大きな影響が生じ、台風が超巨大化したり、インドネシアやオーストラリア西部

に激しい干ばつ、東アフリカに多雨、日本を含む極東に猛暑といった異常気象を呼び起こすというのだ。

「多分ではダメです。的確な予測でなければ説得力がありません。この夏も酷暑が襲い、大停電発生の可能性があるのですね」

「まあ……」

九鬼の脳裏に、一瞬、郷里に残してきたアキラの寝顔が浮かんだ。その瞬間、アキラを残してひとり逝った妻亜耶子の呼ぶ声を聞いたように思った。彼は椅子の背に身をもたせ、若い記者にじつと目を据えたまま、亜耶子の声を待った。

「被害を食い止めるためにはどうすればいいのですか」

記者は言葉を変えて何度か同じことを繰り返したが、彼は微笑みを返すだけで二度と口を開くことはなかった。

記者も退け時と感じたらしく、メモ用のノートを閉じて立ち上がった。

記者が帰っても、九鬼は応接セットの椅子に身を沈めていた。

どこからか日本列島ヒートアイランドの話を嗅ぎ付けて取材にやつてきた佐藤という若い記者の小造りな顔を思い浮かべながら、彼は小柄な記者が明日の夕刊にどんな見出しでどんな記事を書くのだろうかと思った。

一瞬、不安が過った。

問題が問題だけに、この問題に対する社会の関心を幾分でも高めることができればいいと思ひ、佐々木教授の奨めに従い、急な取材に応じたのだ。だが、もしあまりにもセンセーショナルな見出しだったら、かえって社会不安を煽ることになりかねない。

後悔に似た苦い思いが彼を包んだ。アキラと離ればなれになっているこ

とがこころを不安定にしているにちがいない。身重の妻亜耶子をひとり残して米国へ旅たち、熱中症に苦しむ妻をしり目に、ひとり研究に明け暮れていたことが思い出され、やりきれなかつた。

やおら腰をあげると、彼は記者の後を追うように研究室を出て、佐々木教授の研究室へ向かつた。

11

「シミュレーションの結果が出ました」

九鬼はプリントアウトしたデータを作業机に広げた。

「どうかね。マキシマムで気温ほどの程度上昇することになるかな」

佐々木は執務機の椅子から立ち上がりながら、九鬼を迎える。

「一〇数度でしょうか。それよりも昇温速度が考えていたより速いですね。

ラフな計算ですが、この点が問題です」

「一〇数度か。これには都心のヒートアイランド分を加味しているの。二酸化炭素濃度の増分はどうか……」

東京など大都市の都心気温は周辺部より数度高い。この点を考慮すれば、最大最高気温はさらに高くなる。

それに大都市や工業地帯など二酸化炭素の排出量の多いところでは大気中二酸化炭素濃度が平均値より高めであるのだ。大気中の二酸化炭素濃度が高ければ高い分だけ、その上空付近の温室効果も強いはずだ。陸地から放射される赤外線が大気中の二酸化炭素が吸収し、吸収した赤外線を再度陸地へ向って放射する。それを何度も繰り返すから、大気中の二酸化炭素

などの温室効果ガス濃度が高ければ、それだけ陸地へ放射する赤外線の量も増えることになるのだ。

工業地帯や大都市を抱えた中国や韓国から日本へ連なる上空には二酸化炭素高濃度ベルトが形成されている。ことに日本の大都市や太平洋工業ベルト地帯は、自国分のほかに中国や韓国から西風に流されて来る二酸化炭素も加わり、かなり濃度が高い。

「それらの補正はまだです。都市におけるヒートアイランド現象をも当然考慮すべきですが、その範囲をどこまでとるか。これらを考慮すれば、東京都ではかなりの高温になることでしょうね」

都市におけるヒートアイランド現象は地球温暖化の進行とともに年々激しくなり、範囲も拡大傾向にある。都市におけるエネルギー消費の増大傾向に加え、都市そのものの構造が蓄熱効果をもたらしているのだ。高層ビルが乱立して風の流れを妨げたり、道路ばかりでなく、広場や駐車場などいたるところをアスファルト舗装して気温をコントロールする水蒸気の発生を抑えてしまっている。

「現代文明都市がホットスポットそのものだからな」

都市の表面温度分布を表示している画像を見つめながら、教授が呟くように言う。

教授の呟きに触発されたのか、九鬼の頭のなかでひとつの奇妙なイメージが育ちはじめていた。

真つ赤に灼けた巨大な溶解炉のなかで、現代文明都市に聳える超高層ビル群がまるで蠟細工のように溶け出し、液体となって流れ一面に限りなく広がっていく。超高層ビル群だけではない。都市そのものが溶けて流れ出していく。

「都市が溶ける」

「なんだって……、都市がどうした……」

佐々木がじつと九鬼の顔を覗き込む。

「都市が溶けて……」

赤道直下で熱せられて高温になった海水が大海流となって大量に北上する。黒潮となつて日本列島周辺海域へ流れ込むのだ。

日本列島を取り囲む高温海水域の熱い海水から大量の水蒸気が立ち昇り、とぐろをまいて上空へ向う。

大きく張りだした太平洋高気圧が居座り続け、水蒸気を腹一杯詰め込んだ上昇気流は巨大な積乱雲を生み、時折雷鳴を轟かせるが、雨は海上や沿岸一部の局地に降るだけで、熱波が広がり灼熱化している日本列島には一滴の雨粒も落ちてこない。

こうして日増しに日本列島全体が高温化していき、ホットスポットを形成していく。やがて日本列島は地球におけるヒートアイランドとなるのだ。

時たま、日本列島の日本海側海岸付近には降雨があった。太平洋側ではフェーン現象が常態化し、西からの乾燥した熱風が吹き荒び、軒並み五〇度を超えるのもめずらしくないのだ。

また逆に、日本海側がフェーン現象に襲われた。そして高温と乾燥が決まって山火事や大火事を引き起すのだ。

熱波が日増しに強まりつづけ、現代文明都市東京が連日熱せられて、ついに溶け出していく。人間はなす術もなく、溶けていく現代文明都市のなかで、ただ阿鼻叫喚を発するほかないのだ。

12

「地球上で、なぜ特定地域にだけ熱が集中するのか、そのメカニズムを是非解明したいのです」

ACARのピーターソンだった。メールで佐々木教授のアポイントを取ると、その日の便で来日したという。

成田に到着した日に、背の高い痩せ男は研究室を訪ね、日本列島ヒートアイランドプロジェクトへの参加を申し込んだのだった。

佐々木が国際会議で日本列島ヒートアイランド化モデルの報告をしたとき、顔を紅潮させて、いの一番にコンタクトをとってきた男だという。

ピーターソンを紹介されたとき、九鬼には太めの黒縁の目がねにブラウンのもじやもじや頭と長い濃いもみあげのいかにも精悍な感じの引き締まった顔立ちの若い男にどこか見覚えがあった。もしかしたら、ACARを訪れたときに会ったことがあるのかもしれない。

ACARはロッキー山脈の山麓都市ボルダーにある大気圏に関する米国有数の研究機関であった。内外の大学や他の研究機関にも開放されており、世界中から多くの研究者が集まって共同研究をしている。九鬼も前年、約六カ月間共同研究のために滞在したことがあった。

「九鬼さんじゃありませんか。アンダーソンも日本列島ヒートアイランド論には大いに関心を示していますよ」

ピーターソンは九鬼の顔を見て思い出したらしく、笑みを浮かべた。やはり一度会ったことのある男だった。アンダーソンはACARの研究員で、共同研究した仲間だった。

「なぜ日本列島のヒートアイランド化に関心があるのですかね」

佐々木はしばらくふたりのやりとりを見ていたが、やがてピーターソンが持参したこれまでの研究論文を手に取り、ピーターソンと九鬼の顔を交互に見た。

「ACARはどうなんですか。共同研究を望んでいるのですか」

九鬼は佐々木に代わって、ピーターソンに返事を促す。

「文明が崩壊する原因のひとつが都市のホットスポット化じゃないか、そんなふうを考えているんです。過去の例を見ても、森林を切り開いて造った都市がヒートアイランド化すると、気候変動が起こり、干ばつに襲われ、乾燥化して水不足に陥り、農業が影響を受け、社会経済の弱体化が進む。

そして都市の崩壊がはじまり、これとともに文明そのものの衰退化がはじまったんじゃないか、そんな感じがするんです。もちろん、そのほかに外敵の侵攻もあったでしょうが、文明衰退化の主要因のひとつはホットスポット化だと思う。日本列島ヒートアイランド化のケースがこの仮説の検証に役立つんじゃないかと思っています」

ピーターソンは他人事のように言う。

「現代文明の崩壊仮説の検証……。ホットスポット化で降水量が少なくなつて日本列島が干上がれば、現代文明崩壊のはじまりかね。日本列島ヒートアイランド化はその第一歩ということか」

佐々木はぼそつとした声で呟く。

「日本列島ヒートアイランド化で東京などの大都市がどのような影響を受け、どう変化していくのか、極めて興味あるのです。地球上のヒートアイランド現象が現代文明の崩壊へとつながっていくのか分かりませんが、日本列島のケースが世界を覆っている現代文明の将来と深く関わる出来事であることには間違いありません」

ピーターソンは盛んに鼻をぴくつかせる。

「日本列島ヒートアイランド化は地球温暖化の果てに待ち受けている未来世界の先駆的ケーススタディだということかね」

佐々木がいささか皮肉っぽい固い笑いを浮かべた。

「それに最近熱波が世界各地を襲っているし……」

ピーターソンは佐々木の皮肉な指摘に全然頓着せず、調子よくつづける。

ヨーロッパ各地を激しい熱波がなんども襲った。最近では、二〇〇三年の熱波で、五二〇〇〇人もが熱中症で亡くなったという。二〇〇七年には気温が四五度を超したところもあって、ふたたび多くの被害者を出した。

また中国北部では一九九〇年後半から何年も干ばつがつづいた。慢性的な水不足と砂漠化が進み、連日のように砂ぼこりが舞い上がり、農作物は育たず、視界も遮られ前も見えない有様だ。二〇〇〇年に入ると、オーストラリアが大干ばつに見舞われる。降雨のない日が何年もつづいた。

「方々にホットスポットが形成され、急激な気温上昇が起きている」

九鬼が相づちを打つ。

急激な気候変動が進行しているのだ。そして日本列島のヒートアイランド化もはじまっている。

「現在、われわれはまさに急激な気候変動に直面し、地球温暖化の真つ只中にいますが、これにどう対応するか、誰も真剣に考えようとしていない。世界にはまだまだ大丈夫だと思っているひとが大分いる。いまからでも二酸化炭素の排出量を減らせばなんとかなると考えているひとと大勢いる。誰かがなんとかしてくれるだろうと大半のひとがそう思っているだけなのか、この一〇年、そして二〇年、世界の二酸化炭素排出量は増え続けてきた」

ピーターソンはこんな状況だからこそ、日本列島ヒートアイランドのケーススタディが意味があり、重要なのだと言う。

ピーターソンが言うには、地球温暖化で地表の気温が一律同程度に上昇するわけではなく、地域的にばらつきがある。だから気温上昇の大きい地域は地球温暖化のいわば先駆的地域であって、このようなケースを徹底的に解明しておくことが他の後発地域の参考にもなるにちがいない。これらはまた、現代文明の先行きや崩壊過程を読み取るためにも大いに役立つものだというのだ。

大停電の懸念からはじまった日本列島ヒートアイランド化の議論が、いつの間にか現代文明大都市東京の崩壊から、さらに現代文明そのものの衰退を崩壊へと連鎖的に展開していった。

九鬼は不思議な気持ちで振り返る。

確かに、地球温暖化をもたらしたものはまさに現代文明都市だった。そしてそれは都市を維持するために造りだした諸々の仕組みや装置にほかならなかった。

森を切り開き、土を盛り、アスファルトで蓋をし、自然を遮断して人工都市を築き上げた。こうして最適空間を造りだし、利便性と快適性をぎりぎりまで追い求めた人間は、もはや自然に帰ることは能わなかった。人工の世界で人工の空気を吸いつづけた現代人は、いつのまにか未熟児のための保育器のような人工的に温度設定された最適空間で棲息することしかできない人工の生き物と化してしまっていたのだ。

だが地球温暖化は現代文明をとおしてさらなる最適空間を追い求める人間に予期しない結果をもたらし、折角つくり出した最適空間を奪いつつあった。想定外の気温上昇をもたらし、安定化しつつあった地球気候システム

を攪乱し、異常気象の頻発を招いたのだ。

最適空間を追い求め、最適空間をつくりあげたそのときに、最適空間を維持する諸々の仕組みや装置の動作環境が地球温暖化によって大変化してしまった。その結果、これらの最適空間を維持する諸々の仕組みや装置が機能不全や誤作動に陥り、突然大変動を起こし、最適空間そのものが奪い取られようとしているのだ。

東京など世界の現代文明大都市が崩壊すれば二酸化炭素の放出量も急減し、地球温暖化も徐々に終息していくことになるのだろうか。それとも現代文明そのものが終焉を迎えるのだろうか。

「本当は現代文明都市そのものが地球温暖化の元凶なのかもしれない。その現代文明都市が地球温暖化によって息の根を止められようとしているのか」

九鬼は誰ともなしに呟いた。

13

「先生、『日本列島ヒートアイランドプロジェクト』を大々的に立上げるほかありませんね」

九鬼は佐々木の眼窩の奥に窪んでいる目を覗く。

日本列島ヒートアイランド論はまだ仮説に過ぎず、「日本列島ヒートアイランドプロジェクト」はまだ二人だけのプレサバーの段階だった。

ピーターソンがプロジェクトへの参加を申し込んできたものの、彼はA CARに共同研究の意向があるのか、最後まであきらかにしなかった。プロジェクト自体がまだプレサバーの段階ではピーターソンにしてもそう

せざるをえなかったのかもしれない。

「ピーターソンは共同研究の可能性を探りにきたのだろう。とにかく、彼自身の参加とACARとの共同研究は別だからな」

佐々木は遠慮がちに、九鬼の目をちらつと見た。

九鬼はふたたび大学に戻ったものの、「急激な気候変動」の研究に熱中したあまり亜耶子を死なせてしまったという思いもあって、一度は地球温暖化の研究をすっぱり止めようと思った。そのことを知っている教授は九鬼の提言を受け入れる前に彼のこころのうちを確認しておきたいのだ。

「もし、このプロジェクトを立上げるなら、国際共同研究として大々的に実施するほうがいいと思います」

九鬼は挑むようにはつきりと言う。

「……………」

佐々木は無言のまま、手に持っていた夕刊を差し出し、じっと九鬼の目を見る。

夕刊の科学欄に「日本列島焦熱地獄か」と大きな見出しが踊っていた。

九鬼は夕刊を受け取ると、目は見出しの「焦熱地獄」に釘付けになった。

ピーターソンと会うまで、彼はこの問題が世界を巻き込むほどの大きな問題だとは思っていなかった。いや思いたくなかったのだ。彼のこころのどこかに、これをなぜか日本だけの問題としておきたいような気分があった。

地球温暖化の研究にふたたび戻ることを決意したとしても、一度は地球温暖化研究から撤退を決めた以上、あまり自立つようなことを避け、大学の片隅でこつこつやっていたかった。たとえ重大な研究であっても、まだ

研究を国際的に広げ、派手に振る舞いたくなかった。

こんなふうに考えるのは、地球温暖化という地球規模の問題で日本だけが「焦熱地獄」の貧乏くじを引いたような気がしたせいだろうか。それとも亜耶子を死なせてしまったのに、またふたたび地球温暖化の研究をつづけようとする自分に後ろめたさを感じているからだろうか。

彼は夕刊の見出しをじつと見た。若い記者の小造りな顔が浮かんだ。

大学の片隅でこつこつ研究をつづける気であったのに、なぜ取材を受け、地球温暖化研究への復帰を自ら宣伝するようなことをしてしまったのか。夕刊の紙面で踊る見出しはまるで反省の足りなさをあざ笑っているように見える。

彼は後悔した。

だが個人的な感傷に浸っておれなかった。前方から攻めてくるピーターソンから逃げようとしても、どこにも逃げ道はなかった。若い記者の取材を受け、自ら逃げ道を塞いでいたのだ。

「ピーターソンはホテルからACARの意向を確かめているかもしれないが、こちらからも積極的に共同研究についてアプローチしてはどうかと思います。われわれのほうもこの研究を大学での自主研究から国のプロジェクトへ拡大して実行することにはどうですか。これは一発電所や一漁場の問題というより、日本全体に関わる問題、いや、世界全体に関わる問題ですから」

とにかく、日本列島ヒートアイランド化のメカニズムをできるだけ早く徹底的に解明し、これから何度も襲い来るであろう「焦熱地獄」の予測と対策に役立てることだ。

九鬼は赤毛のアンダーソンの顔を思い浮かべ、佐々木の返事を待たずに

受話器を取り上げた。

14

「アンダーソンか、ACARには『ヒートアイランドプロジェクト』についてわれわれと共同研究する意向はあるのか」

九鬼は挨拶もそこそこに用件を切り出す。アンダーソンとは「急激な気候変動プロジェクト」で同じ調査船に乗って北大西洋の海洋調査をやった仲だった。

「『ヒートアイランドプロジェクト』？ いままでどこにいたんだ。連絡しても所在不明で返事がないし……」

受話器の奥から、アンダーソンの間延びした大声が響く。

「うん、一寸……。ところで、『日本列島ヒートアイランド』プロジェクトに参加したいと、ピーターソンという男が来ているが……」

「ピーターソンなら、丁大学の佐々木教授を訪ねたはずだが……」

アンダーソンは九鬼が佐々木のもとに戻ってきたことをまだ知らないらしい。彼はアンダーソンにこれまでの経緯を手短かに話す。

「分かった。ACARの最終決定はピーターソンの報告を聞いてからだと思うけど、プロポーザルがしっかりしていれば問題はないと思うよ。別建ての予算がムリなら、きみも参加した『急激な気候変動プロジェクト』の一環とすることもできるだろうから」

二人は互いに近況を話してから、受話器を置いた。

九鬼は佐々木にアンダーソンとのやりとりを報告すると、夕刊を手に自室へ戻った。

「あれからどうしていたんだ。なんの連絡もないので、心配していたんだが……」

机に広げた夕刊に目を据えているのに、九鬼の頭のなかをアンダーソンの詰問調の声が繰り返して響きわたる。彼は戸惑い、何度も頭を激しく振り、アンダーソンの大声を必死に叩きだそうとした。

アキラを残して妻亜耶子が逝って以来、彼は自分を許せずにいた。妻を奪った熱中症に対してよりも、身重の妻をひとり放置して「急激な気候変動」研究にここを奪われていた自分を許すことができなかった。彼は自分を責め、一度は地球温暖化に関わる研究から離れてアキラの育児に専念しようと思った。こうすることが亜耶子に対するせめてもの償いかと思っただけだった。そして柏田やアンダーソンとも一切連絡を絶った。

大学へ戻っても変わることがなかった。

春になると、初夏のような陽射しが照りだし、日増しに強烈さを増していく。いつの間にか、今年も大停電事故が起こるのではないかと気になりだしていた。気が付くと、柏田の姿を探していた。

そしていま、大停電の危険のある東京からアキラを連れ出し、郷里の母の元に預け、自分はふたたび本格的に地球温暖化の研究に戻ろうとしていた。

だが安全と思っていた郷里にも原子炉暴走の危険が潜んでいるのだ。

アキラをひとり郷里に残して大丈夫だろうか。亜耶子をひとり日本に残してACARのプロジェクトに参加したことをあれほど悔やんだのに、ふたたび亜耶子が遺したアキラをひとりにしてしまっている。亜耶子がひと

りで死んでいったことを忘れてしまったのか。

ピーターソンの議論にさらに挑発され、「日本列島ヒートアイランドプロジェクト」を国際研究として展開する気になっていた。彼はすっかりもとの自分に戻ってしまっていたのだ。

彼は戸惑い、迷った。

ピーターソンの言うように、日本列島ヒートアイランド化から現代文明の崩壊へと進むことがあるのだろうか。

だがどんな理由があろうと、一度地球温暖化研究を断念したのにそれを覆すことは、明らかに自分自身に対する背信行為だった。

彼は亜耶子を思い浮かべた。彼女は微笑んでいるように見える。いや、彼女はあきれ返っているにちがいない。彼は未練がましく死んだ亜耶子に許しを乞うほかないと思った。

「日本列島がヒートアイランド化して『焦熱地獄』になるというのは、本当ですか」

夕刊の記事が事態を急変させた。一本の電話からはじまったマスコミからの取材が引きも切らずつづく。

取材攻勢は佐々木にもおよんだ。

テレビや週刊誌がワイドショーや特集を組み、さらに騒ぎ立てた。

九鬼が不用意に「日本列島ヒートアイランド化はすでにはじまっている」と言った一言が大きな波紋を描いた。

記事のなかで、二〇〇三年にヨーロッパを襲った大熱波について詳細な報告の紹介があった。

これによると、ヨーロッパにおいて、二〇〇三年の夏は過去五〇〇年の

なかで最も暑い夏といわれ、フランスでは異常な高温が六月にはじまり、八月のはじめの二週間がピークだった。クーラーなどの備えの必要のない涼しい高緯度の国々だけに、熱波の被害は甚大だった。ピークには一日二〇〇人以上の死亡者がでた。ヨーロッパ全体では、その夏、熱中症などで五二〇〇人以上もの犠牲者が出たという。

この出来事が「日本列島ヒートアイランド化」による被害発生可能性を裏付けるものと受け取られ、九鬼の発言の信憑性を一層高めた。

だが一方で、九鬼らに対して、国内の一部の学者や研究者から「日本列島ヒートアイランド化」を裏付けるデータもないのに、あたかも日本にもヨーロッパを襲ったような熱波が来襲する恐れがあるとして、社会不安を煽るものだという非難があがった。なかには九鬼を目立ちがり屋の張ったり屋と貶すものさえいた。

「こんなことになって……」

九鬼はふいに現れた佐々木教授に深々と頭を下げた。彼は若い記者について調子に乗って喋りすぎたことを悔いた。

「これで踏ん切りがついたんじゃないのかね」

佐々木は笑顔を見せた。窪んだ眼窩の奥に光る小さな目までが微笑んでいる。

「……………」

九鬼は佐々木をじつと見た。彼は若い記者の取材を受けながら、自ら退路を断っていたことに気付いた。

大停電の再来を案じたのも、アキラや母の熱中症の危険を恐れたからではなかったのだ。地球温暖化の研究へ戻りたくてうずうずしていたのに、亜耶子の死をおもい、研究に熱中したあまり彼女を死に追いやってしまっ

たことを悔い、そうしてはならないと自戒し、自らを抑圧していたにすぎなかった。その抑圧から自らを解き放つために若い記者の取材を受け、あえて自分に対する非難や中傷が渦巻くように自ら演じていたのだった。

「きみに対する非難や中傷も、きみが立ち直るために通らなければならぬ。専門なんだよ。この程度のことには怯むようでは研究には戻れない。郷里に帰ってアキラちゃんと遊んでおればいい。だが亜耶子はそんなきみを見ても決してよろこばないだろうな」

佐々木は突き放すように言うと、九鬼を残して自室へ戻っていった。

15

「ACARは『日本列島ヒートアイランドプロジェクト』についてよろこんで共同研究をしたい意向です」

研究室に入ってくるなり、ピーターソンが佐々木と九鬼に言った。

「そうですか。それはいいですね。でも、熱波に襲われ、日本列島がヒートアイランド化するといっても、このような極端な気象現象は今年だけのことではないし、また日本だけのことでもない。同様の出来事は世界各地でこれから何回も繰り返されることでしょう。そこで、九鬼くんとも話をしていたのですが、いつそのこと、世界各地で頻発している異常気象や気候異変といった極端な気象現象を予測するモデルの開発をやってみたらどうかと……。手始めに、われわれとACARで試み、近い将来に日米共同研究から国際研究プロジェクトへと展開し、最終的には世界中が協力してこのプロジェクトを進めることにしてはどうでしょう」

佐々木の話はこうだ。

科学だけではなく、経済や政治的思惑も絡み、いたずらに「地球温暖化が人間活動によるものかどうか」といった論争に明け暮れているうちに、取返しの付かないところまで地球温暖化を進行させてしまった。その結果、大雨、干ばつ、熱波、巨大暴風雨（サイクロン、ハリケーン、台風）、竜巻などの異常気象が世界各地で頻発し、年々激しさを加えている。

長い間つづけられた「地球温暖化が人間活動によるものかどうか」論争は不毛な議論で、全く時間のムダだった。土台、地球気候システムのような巨大かつ複雑なシステムを相手に「地球温暖化が人間活動によるものかどうか」を厳密なレベルで科学的な実証を求めること自体無茶なことだ。それは科学の方法というものを知らないか、それとも政治や経済の思惑を背景に科学を悪用して時間稼ぎを企むもののやることだ。

こんな議論に明け暮れているうちに、地球環境は取返しの付かない状態となり、人類を滅亡へと追いやることになる。

地球温暖化が人間活動によるか否かの議論に災いされて、われわれはなんとか地球温暖化が人為的なものになっていることを科学的に実証しようとして時間をムダにしてきたが、こんな努力はもうやめることだ。

何回かの氷河期を経て、大気中の二酸化炭素濃度は減少し、二万年前にはついに約二〇〇PPM程度になったが、その後、二七五PPMまで回復したものの、産業革命が始まるころは二八〇PPMだった。それが一〇〇年そこらで三〇パーセント以上増加し、やがて五〇〇PPMを超えていくだろう。大気中二酸化炭素濃度の急激な上昇は安定化していた地球気候システムに大攪乱を呼び起こし、異常気象を頻発させ、気候を大変動させることになるのだ。

気候変動シミュレーションモデルの開発が一九八〇年前後代からはじまり、九〇年代に本格化した。コンピュータの機能向上とともにモデルの精度も向上し、大気モデルと海洋モデルとのカップリングが試みられ、ようやく気候変動予測の全球シミュレーションモデルが開発された。

だが気候変動シミュレーションモデルはいまだに一〇〇年後の平均気温上昇といったことを予測のターゲットとしている。このモデルで予測できるのは二酸化炭素など温室効果ガスの増加にともなう地球全球の平均気温上昇や降雨量の傾向といったもので、突然襲う異常気象や気候変動を予測することはできない。

これからは一〇〇年後の気候変動予測のみでは足りない。大雨、干ばつ、熱波、巨大暴風雨（サイクロン、ハリケーン、台風）、竜巻など、世界各地に頻発する異常気象や気候異変といったいわば極限的気象現象をも予測することを目的とした地球気候モデルを早急に開発する必要がある。今後、少なくとも数百年間あるいはそれ以上にわたり、人類は地球温暖化にともなうさまざまな異常気象や気候異変に悩まされるのは間違いないからだ。

巨大な地球気候システムは一度攪乱しはじめたら簡単には収まらない。もし人類が存続しようとするならば、世界中で協力してこの極限現象予測地球気候モデルを開発し、人類存続のための対策を実行することが急務だ。

「いま、世界各国は市場原理主義に煽られ、グローバリゼーションの大波な煽られ、マネーゲームに明け暮れ、羽目を外して騒ぎまくり、地球を台無しにしている。足元がぐらつきだしているのに誰も気付こうとしない。国が争い、人間同士で騙しあい、いがみ合い、貧困を再生産し、格差が拡大している。地球環境がいくら不安定化しようがお構いなしだし、エネルギーや資源の浪費を止めようと思わない。こんな世界をみていると、世界が協

力して極限現象予測地球気候モデルを開発することなど不可能なことのようにみえる。でもこのままでは、世界各地で、大雨で大洪水が起き、また熱波に襲われ、干ばつで水が不足し、何十万人何百万人もの人びとが犠牲となるだろう。日本列島は多分、この夏、最大級の熱波に襲われることになる。われわれは手始めに『日本列島ヒートアイランドプロジェクト』を進めるが、これを一つのケースとして、将来的に、極限現象予測地球気候モデルと対策モデルの開発につなげていきたいと思う」

佐々木は言い終わると、大きく息をし、今度はきみの番だというように、九鬼に目を向けた。

「ドクター ピーターソン、いま佐々木教授がのべられた構想のもとで、われわれはまず『日本列島ヒートアイランドプロジェクト』に着手するが、このケースの対象は日本列島であっても、地球全体のシステムとも関連している、是非A C A Rの協力を願いたいと考えている。研究全体の将来構想も取り纏めているので、これについても併せて検討して欲しい」

九鬼は目を丸くしている。ピーターソンに、「極限現象予測地球気候モデルと同対策モデル開発全体構想」と「日本列島ヒートアイランドプロジェクト研究計画」のドラフトを手渡した。

16

「日本列島がヒートアイランド化しているというのは本当か。根拠はなん

だ」
受話器の奥から、柏田の声がした。夕刊の記事が大騒ぎを引き起してい

るといふ。

「うむ……、親潮が弱まってきているらしい」

九鬼は一瞬息を呑んだ。

「それと『日本列島ヒートアイランド』がどう関係するんだ」

柏田の声には微かに怒気があつた。

「親潮の流れが弱まっているうえ、水温も上昇してきている」

「……………」

柏田の声が途絶えた。怒りをおさえているのか、それとも彼の話のつづきを待っているのか。

「……今年は太平洋側でも暖水塊がさらに北上することになるのか」

しばらくして、柏田の低い声が響く。

「日本列島周辺海域の海面水温が一層高まることになるだろう」

「暖水塊じゃないのか。日本近海全域にわたって高温になるというのか」

柏田は夕刊の記事以来、電力会社の担当者から九鬼のかつての上司であ

る中西のところへ暖水塊来襲予測依頼が引つ切りなしにきていると言ひ、

「それじゃ、発電所ごとにいちいち来襲を予測することもないか」と声を上げて笑う。

「電力の海水温上昇対策は十分できているの」

九鬼は郷里に帰ったとき、近くの原子力発電所で暖水塊対策として取水海水温を一度でも二度でも下げたための取水口移設に立ちあつているといふ柏田に会ったときのことを思い浮かべた。

原子力であれ火力であれ、海岸に立地している臨海発電所のすべてが海水温の異常上昇の影響を受けるはずだ。そのなかの多くが直接影響を受けることになるだろう。そして日本中で大小の停電事故を引き起すにちがひ

ない。

「冷却水の取水口を移動する程度のことでは十分でないかもな」

受話器の奥で、柏田の自嘲気味に呟く声がした。

「……………」

「国（監督官庁）からは大停電は回避しろと言ってくるし……、実際のところ、電力としては廃棄寸前の老朽火力の埃を払って予備電源を確保するほかないんじゃないか。それも老朽火力があればの話だが……」

柏田は自分の言ったことをカバーするように加える。

規制緩和の一環として実施された電力の自由化以来、競争が激化し、電力会社は懸命なコスト削減を余儀なくされた。その結果、安全サイドからゆとりをもって設置されてきた設備が見直され、供給力確保のための電源のゆとりも見直され、予備率が年々低下していた。

もし、電力各社間で融通しあう余剰電力もなく、日本全域で電力不足が発生するようなことになればどうなるのか。大停電の再来か。かといって、大停電を回避するために、冷却水の異常上昇を無視して発電をつづけることが可能だろうか。大量に吐き出される温排水が七度を超えてさらに上昇し、周辺海域に高温な熱水塊が形成され、ふたたび発電所を襲うことになるのか。

「漁民は……、発電所は……」

「漁民がどうした」

「海水温が高温な温排水でさらに……」

「漁民に被害がでるかもしれない。発電所の発電効率も低下することは避けられないだろう。でも大停電を回避できればいい」

「電力は昨年の大停電事故からなにも学ばなかったのか」

「いまの世の中、コストのまえには何事も無力なのだ」

競争第一の新自由主義経済が蔓延っているところでは、すべてがコスト第一で、これが基準となる。安全よりもコストを重視し、安全を評価する基準もコストなのだ。大停電で被る経済的コストのほうが漁民の被害や発電効率の低下よりも大きいのだ。

「復水器の設定温度を無視して運転をつづけても問題がなければいいんだが……」

九鬼は柏田の兄康平の顔を思い浮かべる。

「問題が起こるまえに予備電源を立上げる。心配ない」

「……………」

「来年も高水温の海水が日本列島周辺海域にやってくるのか。まさか、このまま居座り続けるのではあるまい」

「それはまだ何とも言えない」

「何年も高水温の出現がつづくのであれば、発電所サイドの高温対策も進むだろうが、そうでなければ、電力の対策は来年も今年同様せいぜいお茶を濁す程度で済ますことになるだろうな」

「……………」

企業は地球温暖化の影響をなぜ正当に評価しようとしなのか。企業とはいえ、人間がつくりだしたひとつの組織に過ぎないのに、生身の人間の痛みを感じることができないのか。

ふと、九鬼はたとえ的確な予測があっても、異常気象や気候異変が現実となるまで誰も対策のための行動をとろうとしないのかもしれないと思った。そして現実となった被害のツケはいつも未来へ先送りされてしまうのだ。

アキラの寝顔が浮かんだ。九鬼は受話器を強く握りしめた。掌に汗が噴き出た。

無言のまま、返事もせずにいる九鬼に気分を殺されたのか、柏田は「じゃ、なあ」と短く言い、電話を切った。

九鬼は受話器を持ったまま、しばらく机の電話機を見つめていた。

17

「異常気象というけど、最近はずいぶん大雨や日照りなど異常な天気が続いている傾向にあるようだね。異常気象が常態化したわけか。これじゃ、もう異常気象なんて言えないよね」

佐々木はデータを整理している九鬼に話しかける。

六月に入ると、陽射しが急に強くなった。今年も関東地方では梅雨入りが遅れそうだった。

近ごろは、梅雨になっても、以前のように、毎日のように細かい雨がしとしと降り続くことはなかった。梅雨の終りにあった大雨が梅雨に入ったばかりのころにもやってくる。大雨には決まって洪水、山崩れが起きた。土地や森林の包水容量を超えた大雨にも原因があるが、無計画な土地開発や森林伐採などによる包水容量の減退がさらに輪をかけるのだ。

雨の降り方も一点集中型が多くなった。九州地方で大雨がつづいているのに、隣の四国では小雨が何年もつづいて水不足に悩まされているのだ。

一度に年間降雨量を超える降雨を見ることも珍しくなかった。雨量が増えていくだけではなかった。これまで殆ど雨の降らないところにも大雨を

降らすのだ。

一時大雨で水浸しになっても、つぎの日から日照りがつづき、干害に悩まされることもあった。

だが今年は違った。梅雨の時季なのに雨が降らないのだ。

関東、東海では真夏の太陽が照り、連日三〇度を超した。猛暑の日が連日つづき、夏に給水制限が行なわれるのじゃないかと、水がめの心配がはじまった。

「傾向があるということはそこになんらかの法則性がかくされているのかもしれないですね」

何万年といった長期間における傾向であれば掴みやすいが、ごく短い期間のなかでの変化傾向を読み取ることは至難なことだった。ことに複雑な事象には要因要素が数多く関係しているうえにさまざまな夾雑物が紛れ込み、一層複雑化しているからだ。

二人はなんとかデータのなかの変化傾向を読み取り、モデル化していく。

大気中に大河や高速道路のような気流の流れがないと熱エネルギーが効率よく移動し拡散することはない。大気中の熱エネルギー移動は水蒸気を含む大気の移動による。風や対流がないときには、太陽光線や地上からの放射熱で暖められた空気が集まり、巨大な暖気団へと成長していくことがある。こうして形成された巨大な暖気団は蓄熱した熱を放射しながら一地点に長く留まる。移動するにしても鈍い足取りだ。大気中を移動して居心地のいいところを見付けては居座り続け、地上と熱のやり取りをしながらますます巨大化し高熱化していくのだ。

「やはり、この夏は強烈な熱波に襲われるにちがいない。それもかなり長期間居座りつづけるかもね」

佐々木はディスプレイに目を据えたまま、呟く。

ペルー沖から太平洋の赤道域で強い東風が吹くと、ラニーニャ現象が発生する。こうして太平洋西部に高温の海水域ができる。今年はこれに加え、インド洋には暖水域と冷水域のふたつの水温域ができ、ダイポール現象が形成されているのだ。

「これではほぼ確実に、この夏は日本列島が猛暑に襲われそうですね……」

彼も過去のデータから日本列島に猛暑を呼ぶこれらの二つの現象が気になってきた。もし日本列島が確実に熱波に襲われるというのなら、住民に事前に知らせるとともに、それなりの対策を講じるように政府や関係行政機関にすすめるべきではないのか。

だが彼には政府や関係行政機関が真剣に事前の対策を実施するか懐疑的だった。発生時期が不明でも必ず襲い来ると予告されている都市直下型地震に対してもなかなか徹底した対策を講じることがなかったからだ。

大体、地球温暖化の影響に対して、住民の一人ひとりとは真剣でなかった。

地震の被害は局地的で一時的なものであつて壊滅的なものだ。これに対して、地球温暖化の影響は広域的で、永続的なものでも壊滅的打撃をおよぼすとは思えないらしいのだ。たとえどんな酷暑や大雨でも、今年は滅法に暑いとか、なんて酷い土砂降りだぐらいで過ごしてしまう。

彼は一人ひとりもつと真剣になるように、今年は今もつとつと酷くなればいといとさえ思ってしまう。

彼は佐々木をそつと窺う。

佐々木は相変らず、ディスプレイに目を据えたままだ。

「先生、どうしますか。熱波予報を出して、対策を講じるようにアクションを起しますか」

彼はしびれを切らしたように、言う。

「あれで十分じゃないのか、われわれとしては……」

佐々木は夕刊の記事のことをいつているらしい。

確かに、熱波の来襲が一〇〇パーセント確実だとは言い切れなかった。

そのうえ、熱波の程度を正確に予測することもまだムリだった。

科学者は憶測でものを言つてはならないのだ。たとえ仮説を提示する場合でも、根拠とするデータを示し、反証可能性を確保していなければならぬ。

長期的な気候変動と違い、熱波のような短期の異常気象を正確に予測するには、現在世界各地で用いられている天気予報モデルの世界版のようなものが必要だった。だが現在実施されている各国の天気予報はごく狭い地域を対象とするもので、これを用いて熱波のような異常気象を確度高く予測することはまだできなかった。

九鬼は一週間や二週間先の異常気象や極限現象には関心がなかった。これは台風の進路予報のように、いまの天気予報でも十分だった。

彼は急激な気候変動のもと、日本列島には今後数十年数百年にわたり、さまざまな異常気象や極限現象が襲ってくると考えていた。できたらこれらの異常気象のうちの極限現象を一年間あるいは一〇年間、さらにそれ以上の長期間について、いつでもどこどの程度の極限現象が発生し、どのような経路で消滅していくかを予測したかった。

もし極限現象の予測が的確になされれば、これに応じて対策を講じることができるとだろう。少なくとも、地震対策のための都市構造や社会システムが考えられているように、地球温暖化の極限現象対策を講じた都市構造や社会システムが考えられるのではないか。また耐震建築や耐震構造

と同様に、耐極限現象建築や耐極限現象構造があつてもいいはずだ。

とにかく、今後数十年数百年の間つづく気候大変動期に備え、災害や環境激変に対して脆弱な都市構造や巨大システムを見直し、大都市を改造するのだ。これは日本の存続のためにも必要不可欠なことだった。

18

「佐々木先生、『日本列島ヒートアイランド』とはユニークな発想で、仮説としては面白いですな」

振り向くと、縁無しメガネがすっかり溶け込み、メガネをしているのか分からない日焼けした丸い顔があった。K大教授の宗田だ。佐々木が座長をしているK省の気候変動に関する委員会のメンバーだった。

佐々木がK省のある合同庁舎ビルのエントランスホールでエレベーターに乗り込み、一番奥で上昇するのをまわっているとき、扉が閉じる間際にあふたと駆け込んできた短軀の男がいた。それが宗田だったらしい。

佐々木は宗田の顔を見たとき、一瞬、今日が委員会開催日かと思つた。だがそんなはずはなかった。

「そうですか。いつまでも仮説であればいいのですが……」

「……………」

宗田は怪訝な顔をした。

「この夏、日本列島が仮説を実証するような事態にならなければいいと思つているのですがね……」

佐々木は低い声で呟くように言う。

もし日本列島がヒートアイランドと化したらどんな酷いことが起こるか、彼は内心気が気でなかった。彼は決して表情には出さなかったが、九鬼のどことなく沈んだ目を見るたびに熱中症で生命を奪われた妹亜耶子のこと 생각이出され、こころを痛めていたのだ。

宗田には佐々木の声が聞き取れなかったのか、「それじゃ、また」と軽く言い、去っていった。

佐々木は目で宗田の後ろ姿を追いながら、薄暗い廊下にしばらく立っていた。

廊下の左右両側に執務室が並び、これを挟んでビルを中心を走る背骨のように廊下が延びている。

「佐々木先生、お待ちしていました。どうぞこちらへ」

後から声が出た。

委員会の事務局を担当している斉藤という課長補佐だった。奥の会議室に案内すると、課長を呼んでくるというので、細身の男は姿を消した。

中央はこじんまりとした会議用テーブルが置いてある小さな会議室だった。佐々木はブラインドを下ろしたままになっている窓辺に立ち、隙間から外を覗いた。

一面に高層ビルが建ち並び、その間を縫うように走る道路には自動車が数珠繋ぎになって奔り回っていた。

佐々木はふと、九鬼が「都市が溶ける」と言ったことを思い浮かべた。

「お待ちせしました」

背後から、張りのある声が出た。久遠課長だった。面長の白い顔に笑みを軽く浮かべ、「わざわざ何事ですか」と言いながら、テーブルの椅子を引いた。

佐々木はいつも電話で済ましていたが、急に掛ける気になったのは、一度直に会って課長の本心を確かめておきたかったからだ。

「実は『日本列島ヒートアイランド』に関する研究プロジェクトを立ち上げることにしました。当面は小規模なものと考えていたのですが、国際的な関心を呼んでまして、あまりのんびり構えていることもできなくなってしまいました……」

「そうですか……」

課長は先を促すように、目を上げた。

「つきましては、ご協力を頂ければと思っております……」

佐々木はまずは大学の予算の範囲で行なおうと考えていた。それでは共同研究を申し込んできたACARに主導権をにぎられてしまう。

「研究計画はできていますか」

「これが当面の計画概要です」

佐々木はA4のコピーを課長の前に差し出し、話をつづける。

「……われわれが最終的に意図していることは、今後数十年数百年にわたる日本を襲うであろう極限気象現象の予測モデルを開発することです。地球温暖化にともなう異常気象は今後ますます巨大化の一途をたどり、日本に対して甚大な被害をおよぼすことになるからです」

佐々木は日本列島ヒートアイランドのメカニズムの解明からはじめる研究計画の内容と予算規模を説明し、予測モデルの開発には世界各国の協力が不可欠なことを説く。

「『日本列島ヒートアイランド』でも日本だけではダメなのです」

「日本列島のヒートアイランド化は地球全体の温暖化の結果として形成されるもので、日本だけの現象ではありませんし、日本周辺がホットスポット

ト化の対象となっている以上日本がこのプロジェクトの主導権を握っておくべきだと思うのです」

「分かりました。最終的には、委員会に図ることになりますが、まずは内部で検討します。できるだけ早く結論を出しますが、日本列島がどうしてヒートアイランドとなるのですか。それはいつのことですか」

K省で一番若い課長のエリート官僚は目をしばたかせ、佐々木を盗み見る。

「ある気象条件のもとでは、日本付近に熱が集中する傾向があったのですが、日本周辺海域の表面海水温が高まりだして列島全体が熱のバリアーで囲まれてしまい、一層蓄熱しやすい状況が生まれているのです」

「それで日本がヒートアイランド化するのはですね。それはいつですか」

「昨年、暖水塊群が日本列島周辺の海域に押し寄せてきましたが、このところ、寒流である親潮の勢力が一段と弱まり出しているようなので、今年は南からの大暖流である黒潮がかなり北上することでしょう。そして日本列島を包囲しそうですね。こういう状況で夏場に太平洋高気圧が勢力を拡大して日本全域を覆うようになると、日本列島は夜間の放熱が妨げられて蓄熱を重ねることでしょう」

「するとこの夏にも日本列島がヒートアイランド化する……」

「多分そうなることでしょう」

「断言できるのですね」

「まあ、親潮の勢力がどの程度減退しているか、それとメキシコ湾流とその統流である北大西洋海流の現況データがあれば明確に予測できるのですが……」

「もし日本列島がヒートアイランド化すればどうなるのですか」

「確定的なことは言えませんが、気温は平年より五度から一〇度は高くなるでしょう。それに日照りがつづき乾燥し、雨も殆ど降ることはないかもしれません。こんな状況が太平洋高気圧が張りだしている間中つづきます」

「それでは……」

「人びとの健康や都市機能などにどのような影響がでるか分かりませんが、でも徹底した対策を講ずれば、この種の二次的被害は最低限に止めることができるはずですよ」

若い課長は口を閉ざしたまま、じつと佐々木の目を見た。

佐々木は一応言うべきことは言ったというようにさっと椅子から立ち上がり、軽く会釈すると、化石のように身動きひとつしない課長を残したまま、ドアを押し開いた。

19

「先生、A C A Rのアンダーソンが北極海へ調査船を出すといってきましたよ」

九鬼が佐々木の姿を見るなり、帰りを待ち構えていたように駆け寄った。

彼は執務机に向う教授を追って、アンダーソンとのやり取りの一部始終を話す。

「北極海調査に行かないか」

A C A Rのアンダーソンだった。

「いつだ」

九鬼は受話器を左手に持ち替える。

「六月末、二八日ごろか、サンディエゴを出航する」

アメリカ西海岸にあるS海洋研究所の調査船をチャーターしたという。

「じゃ、こんどは気兼ねなく十分調査できるわけだね。それはいい」

前回のメキシコ湾流の調査のときは別の調査グループがチャーターした調査船に相乗りだった。そのため、チャーター主の調査が優先され、十分な調査ができなかった。

「そうだ。時間があれば、前回取り残した分まで調査したいと思っっている。だから、ドクター九鬼にも是非参加してもらいたいのだ。どうか」

計画では六週間かけて北太平洋から北極海を抜け、グリーンランド沖を南下して北大西洋まで足を延ばしたいという。

「深層海水生成ポイントを含めて、グリーンランド周辺海域は是非調べておきたいところだね」

コンベヤーと呼ばれている地球上最大の熱配分システムである熱塩大循環（深層大海流）が北大西洋での深層海水生成の減退によってかなり勢力を弱めているらしいのだ。

「それもそうだが、ベーリング海峡から流れ出る海流についても詳しく調査するつもりだ。日本列島ヒートアイランドと直接的に関係するだろうが、わが国はもちろん、全世界の異常気象とも関連するからな」

「そうだね。だが……」

「サンディエゴじゃムリなら、アンカレッジに立ち寄るからそこで乗船すればいい。どっちにするか決まったら連絡してくれ」

アンダーソンは九鬼が当然参加するものと決めているように言い、電話を切ったのだった。

佐々木はじつと九鬼を見つめた。別れてきたばかりの若い課長の面長の白い顔が浮かんだ。

「いま、K省の久遠課長に例のプロジェクトについて話してきたところだ。

日本列島ヒートアイランドについて聞かれたが、現在親潮の勢力が弱っているようだから、この夏にも日本列島がヒートアイランド化するだろうと言っておいた」

佐々木は課長とのやり取りの模様を詳しく話した。

「……………」

九鬼は教授を黙って見ている。

「ベーリング海や親潮の水温データがあれば、もっと説得力があるだろうが……」

地球観測衛星からのリモートセンシングによる海水温の測定ではごく表層水温に限られ、水深の深いところの水温を測ることができない。一メートル以深といった水深の海水温は直に測るほかないのだ。

それゆえ、地球観測衛星の表面水温データだけでは、親潮の勢力が弱っているかどうか断定することはできない。表面水温がいくら高くても、直ぐ下に低温層が潜んでいるときがあるし、このような場合には日射が途絶えたり、風があると表面水温が著しく低下することがあるからだ。

「そうですね。アンダーソンの調査に合流して、データを取ってきましょう」

こんどは佐々木が九鬼の顔をじつと見る。

できるだけ早くデータは欲しい。委員会のまえに手に入れたい。だが六週間の調査は長すぎる。日本列島がヒートアイランド化する最中、九鬼が

日本を留守することになるのだ。

佐々木は熱中症で逝った亜耶子を思い浮かべた。あのときも九鬼が海洋調査で日本を留守したときだった。なにかしら不吉な思いに駆られた。

「なにも心配いりません。途中からデータを送りますから、先生はそれで早く手を打って下さい。データがあれば、K省や委員の先生方も反論できないでしょう」

九鬼は教授の心配をよそに笑みを返し、屈託なく「部屋に戻って、いますぐアンダーソンに連絡します」と言い、踵を返して出ていく。

佐々木は突然浮かんできた不吉な思いをこころの奥底へ押し込み、曖昧な笑みを浮かべながら、九鬼を見送った。

第三章

20

「ベーリング海一帯の海水温が例年より高い。太平洋から大量の暖かい海水が北極海へ流入しています。親潮（千島海流）の水温も高まっています」

九鬼がアンカレジへ発つてから一週間ほどして、第一報が入った。

佐々木はこのデータをもって、K省の委員会に臨んだ。だが誰も真剣に取り合おうとしなかった。

「日本列島ヒートアイランドモデルは巧妙につくられています、前提条件が問題だ。日本列島の周りの海面水温が三〇度を超えるようなことは到底考えられない。ラニーニャ現象が日本列島まで広がるのですかね……」

「親潮が勢力を失い、黒潮がオホーツク海まで北上するともいえるのですか……」

「地球温暖化でいつかは日本列島がヒートアイランド化することがあるとしても、いつそんなことになるのですか……」

佐々木は委員たちの声を反芻しながら、九鬼が送信してきたデータをもう一度チェックする。

赤道で熱せられた高温海水が大奔流となって日本列島へ押し寄せる。日本列島に近づくにつれふたつの流れに引き裂かれ、一方が日本海側へ、もう一方が太平洋側へと回り込み、高温海水が日本列島を挟むように包み込むのだ。

佐々木にとってこうなることは全く疑う余地がなかった。これは時間の

問題にすぎないのだ。

この夏、日本列島はヒートアイランド化する。彼はヒートアイランド日本列島の突然の出現によって右往左往する委員たちの顔を思い浮かべながら、ふたたびデータのチェックをつづける。

電話が鳴った。

彼は手を無理に伸ばして、受話器を取る気がしなかった。

電話を一瞥すると、ベルの鳴る止むのを待った。

パソコンのディスプレイを見ながら、彼は九鬼を思い浮かべた。不吉な思いをこころの奥底へ閉じ込めたまま九鬼を送り出して手に入れたデータにもかかわらず、ついに委員たちを説得できなかった。このことが重い重しとなって彼を押し潰す。

ふたたび、電話が鳴った。

彼は椅子から立ち、執務机をゆっくり回って、書類の山のかげに埋もれている電話機から受話器を取った。

「九鬼先生がつかまらないので、佐々木先生にお訊ねしたいのですが……」

九鬼を紹介したM新聞の佐藤だった。

「東京にも給水制限が出ましたが、雨が降らないのも日本列島ヒートアイランド化と関係があるのでしょうか」

例年、梅雨が明ける時期には大雨が降ることが多いが、今年の梅雨は全国的に空梅雨模様だった。時折、突然勢力を増す熱帯性低気圧がもたらす集中豪雨のほか、雨らしい雨がなかった。ことに関東地方では春から小雨傾向で、七月に入ると、首都圏で給水制限をはじめるところが出たのだ。

「もちろんですよ」

「でもまだそう暑くないですが……、日本列島でヒートアイランドがはじ

「まりだしているのですか」

「まだ梅雨前線が完全に消滅していないし、太平洋高気圧の勢力もまだまだですからこれからでしょう。急速に気温が上昇しますから、気をつけな
いとね」

「どんな点に気をつけなければならないのですか」

「熱中症にならないようにするとか……、給水制限されていますが、各家
庭で上水を貯め置きするとか、それに……」

一瞬、彼の脳裏に不思議な光景が浮かんだ。高層ビルが林立する現代都
市が蟻細工のように溶けていくのだ。それはいつか九鬼が言っていた光景
だった。

「昨年のような大停電も発生することになるのですか」

「さあ、大停電は昨年のことですから、電力会社はなんらかの対策を考え
ているんじゃないでしょうか。電力会社に確かめてみてはどうですか」

「はい。そうします」と言い、佐藤は電話を切った。

佐々木は疾風のような佐藤の電話に頭のなかが攪乱され、受話器をもつ
たまましばらく呆然として立ちつくしていた。

21

「先生、北極海の海水が激減しています。僅かに残っている海面の水の状
況から二、三年のうちにすべてが消えてなくなるんじゃないかと話してい
ます。そこで、完全に消失した場合を想定して、急遽、調査範囲を広げ、
もう少し詳細な調査を実施しておこうということになりました」

九鬼だった。

「そうか。北極海の海水がそんな状況であれば、グリーンランド氷床も酷
い状況だろうな」

佐々木はメキシコ湾流やさらに北極海へ向う北大西洋海流の動向が気
になった。これらについても詳細な調査が必要となるにちがいはなかった。

「実は、今回の海洋調査出張のことをまだ母に知らせてなかったのです。
アキラのこともありますので、あまり長引くことになる……」

九鬼は声をひそめ、口を濁した。

「調査船のチャーター期間は限られているんじゃないの。簡単に延期する
ことが可能なのかな」

九鬼は調査船のつぎの予定が大西洋からインド洋の調査なので、米国東
海岸で下船して調査船を引き渡すことも可能なのだという。チャーター船
は西海岸の出港地に帰る予定であったが、東海岸で下船となれば、西海岸
から東海岸への回船時間が短縮されることになるので、その分チャーター
期間の延期が可能となるらしい。

「最終的にどうなるかはまだ未定ですけど、もしかしたら、一、二週間程
度延びることになるかもしれないのですが……、もつとも、グラスゴーあ
たりに寄港することがあれば、そこで下船して予定の期日までに帰国する
こともできるかもしれません」

「こちらのことは心配せんでもいい。調査が第一だ。メキシコ湾流や北大
西洋海流の動向も調べたいだろうしな」

「ええ、そうですね。北極海の海水やグリーンランドの氷床の溶融で深層
水の生成が阻害されてコンベヤーベルト（熱塩大循環）が大分減退してい
るらしいので、この際は非調査しておきたいところですよ。日本列島ヒ

トアイランド化とも深く関係しているはずですから」

「きみもそう思うか……」

佐々木も日本列島ヒートアイランド化が地球の最大の熱分配システムであるコンベヤーベルトの機能低下と連関しているのではないかと思っていた。彼はなんとかしてコンベヤーベルトの機能低下を実測できないかと心待ちしていたのだった。

地球上で最大の熱分配システムであるコンベヤーベルトの機能が低下すれば地球上における熱再分配がうまくいかず、地球気候システムに大混乱が起こる。それゆえ、それに代わるものが用意されなければならない。その代替システム形成へのひとつの段階として、地球上に日本列島ヒートアイランドのようなホットスポットがいくつも形成されることになるのであるまいか。

地球上に新たに出現したこの種のホットスポットがコンベヤーベルトの代替装置の一環だとすれば、より効果的な熱再分配を行なうために、ホットスポットではまず熱を最大限貯め込み、蓄熱のピークをまっぴらに一気に放射放散するというパターンを繰り返すことだろう。日本列島ヒートアイランド化もそのようなパターンをたどることになるのか。そのとき日本列島はどうなるのか。

九鬼にも佐々木の思いが通じたのか、互いに無言のまま、相手の息遣いに耳をすましていた。

しばらくして「データは随時お送りします。では」と言い、九鬼の声が切れた。

22

「一体、どうしたんだ」

研究室の執務机でパソコンのディスプレイを覗いていた佐々木が突然驚きの声を発した。

海面水温三〇度ラインがぐんぐん北上し出した。日本列島周辺の高温海水域がみるみる一面に広がっていく。

日本海では、列島沿いに北上をつづけていた三〇度ラインがついに津軽海峡に達した。やがて高温海水域が海峡を抜けて太平洋へ顔を出すだろう。

太平洋岸沿いに北上する大暖流の黒潮は銚子沖からさらに三陸沖を超えて北上をつづけていた。津軽海峡から顔を出した海流は北上してきた大暖流黒潮に吸い込まれ、右へカーブを描いて日本列島を離れていく。

日本列島から離れた黒潮続流は大きな弦を描いて北太平洋へ向い、北太平洋海流となるのだ。

佐々木はしばらくディスプレイをじっと見つめていた。すでに日本列島の周辺海面がくまなく三〇度の高温海水で覆われていた。

この春先からラニーニャ現象が現れ、インドネシア付近の海水温が上がっていたが、赤道直下の強烈な太陽光線を受け、高温海水域が広がっていた。さらに海水温を上昇させ、南東の風に煽られて日本列島近海へと高温海水域が広がり、黒潮の流れに引き摺られて北上したにちがいない。

今年も梅雨明けの宣言も出ないまま、梅雨が明けていく。いつのまにか梅雨前線が消えてしまったのだ。

前日まで海上に梅雨前線名残のシッポが残っていた。だが一夜明けると、空には真夏の太陽が耀き、青空が広がった。一夜にして、気圧配置が一転

し、太平洋高気圧が張りだしたのであった。

佐々木は息を呑んだ。高温海域が太平洋高気圧ですっぽり覆われている。日本列島ヒートアイランド化がはじまるのだ。

このまま、コンペアーベルトの代替装置のひとつとして、日本列島が地球上の熱の一大集熱地帯となり、ヒートアイランド化していくことになるのだろうか。彼は自分が構築したモデルであるにもかかわらず、それが単なる仮説で終わることを願わずにおれなかった。

モデル通りのパターンをたどるとすれば、日本列島ヒートアイランド化はピークに達するまで蓄熱を繰り返すことになる。こうなれば日本列島は連日酷暑に見舞われ、焦熱地獄と化すにちがいない。それでも蓄熱がピークに達しなければさらなる烈火の炎が待っているのだ。

さらに問題は、ピーク後の一気の放熱放散だった。コンペアーベルトは海水（海流）による熱運搬システムであるのに対して、代替装置ホットスポットでの熱運搬は大気（水蒸気）がつかさどる。これは大気循環による熱再配分システムだ。ということは、海水に比べ、熱容量が遥かに小さい大気が海水と同じ量の熱を運搬するには、それに倍加する量と動きが必要となるといふことだ。

とすれば、蓄熱ピークのヒートアイランド後に待っているのはなにか。大気の倍加する量と動きとなれば、地球気候システムの大攪乱による気象大異変が日本列島に集中することだろう。ヒートアイランド化はその始まりの合図にすぎないのだ。

電話が鳴った。

彼は立ち上がって受話器を取り上げる。

「先生、日本列島がヒートアイランド化しているのですか」

久遠課長だった。M新聞から取材の申し込みがあったという。いかにも余計なことをしてくれたといった響きがあった。

「日本列島ヒートアイランド化の兆候が現れました。一両日中に気温が急速に上昇するでしょう。関係機関への連絡と、即刻対応策を講じるようにご指導願います」

疑う余地はないのだ。彼は一方的に告げると、電話を切った。

彼は窓辺に佇み、銀杏並木に目をやった。委員会の席上、無言のまま、委員のやり取りを冷やかに見ていた久遠課長の横顔が浮かんだ。事前に「日本列島ヒートアイランド」について説明し、もはや気候変動を食い止めることは不可能で、どう対応するかしか残されていないことを口を酸っぱくして説いておいたにもかかわらず、久遠課長は無関心風を装いつづけていた。地球温暖化なんて騒ぎ立てるほどのことではないと思っっているのか、それとも単に行政の担当者としての責任を回避したかったのか。

佐々木はパソコンのディスプレイを覗き込む。

燃えるような暑さがはじまった。

日本列島各地でこの夏最高の気温を示していた。自然現象は人間の思惑を顧みることもなく、ただありのままに振る舞う。

佐々木も事実を事実として受け取る。彼には人びとや生き物が対応できないほど気温が急激に上昇しないことをひたすら願うほかなかった。

23

「暑いな」

ごま塩の無精ヒゲのひとり暮らしの小男がベランダに這い出し、空を見上げた。一〇階建ての都営団地アパートの五階のベランダだ。

空には雲ひとつない。朝から灼熱に燃えた白い太陽光線が差し込み、裸体を容赦なく射る。

男は太陽光線を避け、遠くに目をやり、珍しそうに外を見た。

一戸建ての家屋が密集しているところに、さまざまな形の大小のビルが混じり、一面に広がり限りなく連なっている。その間を縫うように道路が走り、数珠繋ぎの車が奔めいていた。

一瞬、男には眼下に広がる大都市が無数の手足を方々に延ばした巨大な生き物のように見えた。長大な手足をばたつかせ、苦しみがいているようだ。いや、痙攣を起しているのだ。

日中灼熱の太陽に熱せられたコンクリートのアパートは夜になっても冷えず、逆に放熱を繰り返し、室内の温度は三八度を下ろうとしない。

連続して酷使続けていたせいか、クーラーの調子が悪かった。モーターの回転音はするが、思うように冷えないのだ。

男は腹を立て、ベランダに面したガラス戸を全開したまま、フローリングの床にバスタオルを広げ、夜通し全裸の身体を横たえていたのだった。

急に気温があがったせいか、身体が順応しきれないのか、妙に頭が重い。バスタオルが汗で濡れて湿っていたが、身体の皮膚は乾いており、汗は出ていなかった。

日本列島全体が太平洋高気圧に覆われ、急に暑くなった。

列島周辺を取り巻く高温の海面がバリアーとなつて放熱を妨げ、日中太陽に焼かれた日本列島は夜になつても気温が下ることがなかった。日本列島ヒートアイランドは、ピークへ向けて蓄熱を繰り返していた。

東京以西ではすでに朝から三八度を超えた。強烈な日射を受け、午前一〇時には四〇度を超し、午後二時には四五度を超すところが出た。関東の内陸部で五〇度の最高気温を記録した。

だがこれは序の口だった。その日を境に、日本列島各地で連日最高気温を更新していく。各地の気温が五〇度に近づいていた。

人口稠密な都会では夜になつても気温が下らず、昼間の気温がそのまま維持されることが多かった。車の渋滞やクーラーの一斉使用によって狭い空間に廃熱が渦巻き、いたるところに六〇度を超える超高温のヒートアイランドが無数につくり出されていく。

地心の盛り場から一〇キロほど離れた下町にある男のアパート付近にもヒートアイランドができた。

男はシャワーを浴びたいと思った。もう何日も風呂に入っていないかった。給水制限がつづき、毎日決まった時間に決まった量の給水が行なわれていたが、風呂用の水量を確保できるほどの給水はなかった。

電気が切れればエレベーターが止まるにちがいない。のどが乾ききっていた。立ち上がろうとして全裸に気付き、男は一瞬逡巡する。急いでバスタオルに手を伸ばし、腰に巻き、立ち上がる。

身体がふらついた。男は傾いた身体を持ち直そうと右足を出し、踏ん張る。

そのとき全身から力が抜け落ち、目の前が真っ暗になった。身体が妙にふわふわとなつて浮くように感じた。

男は真っ暗な空間のなかで、ゆっくりスローモーションの物体のように落ちていく自分の身体を見た。

男はフローリングの床に音を立てて倒れた。男の身体からバスタオルが

剥がれ、裸身が剥き出しになった。

腹だけが妙に膨れ、手足が妙に痩せ細った裸体がフローリングの床に転がっていた。

24

「佐々木先生、いつまでこの暑さはつづくのですか」

M新聞の佐藤が怒ったような顔を突きだし、尖った声を出した。

佐々木は突然訪ねてきて、ソファの中央にでんと座り、顔中に吹きだした汗をしきりに拭いている小男をしばらくじつと見ていた。

研究室は古い建物の二階の奥にある。日頃から冷房もあまり効かない。

だが建物の周りには深い木立があり、これが天然のクーラーとなつていいのか、時折、開放したままのドアと窓から風が入る。

「やはり、当分つづくのでしょうか」

佐藤はハンカチをズボンのポケットに捻じ込みながら、言う。

「多分、そうなることでしょう」

「そうですか。熱中症で死亡者が出ました。クーラーがかけっぱなしになつていたそうですが」

「クーラーをかけたままだったのか……」

と言いかけて、佐々木は口を閉ざした。やはり、九鬼が言っていたように、このところの急激な高温でクーラーが機能不全を起したということか。

彼は暗澹たる気持ちに襲われた。

「先生、なにかあるのですか。国の強い要請もあつて、停電だけは回避し

ようと電力が躍起になつているので、クーラーは止まることなどないはずですがね」

佐藤は佐々木の暗い顔に気付いたらしく、突っ込んでくる。

「きみには家族がいないのかね」

「……………」

佐藤は口を開け、きよんとした表情で佐々木を見た。

「クーラーを過信しないように注意しておくことだ。クーラーにかぎらないが……」

「はああ、わたしは単身赴任で、いまのところは独り身ですが……、でもなぜ、急に、家族なんですか……。先生にもご家族がおりでしょう……」

「ぼくは天涯孤独だ。ひとりいた妹が昨年の大停電で奪われてしまった」

「え、ということは……」

「熱中症だった」

「そうでしたか。でも今年はまだ停電事故がないようだし……」

昨年の大停電事故に懲りて、政府は電力会社へ大停電回避を命じていた。そのせいか、温排水を巡る漁民たちとのトラブルが発生していたものの、大規模な停電は発生していなかった。

「だから問題なんだ。電気が止まっていないのに、クーラーも動いているのに、効かない。クーラーが効いていると思つていると、いつの間にか、熱中症に罹ってしまったかもしれないのだよ。乳幼児やお年寄りが危ない」

「クーラーが動いているのに、効かないというのは、どういふことですか」

「販売されている機器類は地域のこれまでの平均の気象条件に合わせてつくられていふことですよ。いま日本列島を襲っているヒートアイラン

ド化型熱波のような超異常気象には適合していません」

佐々木は九鬼が言っていたことを思い出す。

通常の電子機器や家電は使用される地域の気象条件に合わせて最適動作範囲が設定されている。たとえば、日本で使用が予定されている家庭用クーラー（暖冷房用のエアコン）では、一般に、最適運転条件は湿度が八〇パーセント以下の状態で、冷房モードでは外気二二℃から四三℃、屋内二二℃から三二℃程度の範囲としている。ドライモードでは同一一℃から四三℃、同一一℃から三二℃の範囲なのだ。

「ほんとですか」

「多少の許容範囲があるにはあるが、想定されている運転条件を超えると、当然、機能不全に陥ることになるのですよ。机にあるパソコンだってそうですし、さまざまな家電や機器類に搭載されているコンピュータやIC部品は運転条件を超えると機能不全に陥り誤作動を起すようになるのです」

「すると、熱中症で亡くなったひとのお家のクーラーは機能不全や誤作動を起していたらしいということですか」

「その可能性がありますね」

佐々木は短く言った。久遠課長のエリート然とした顔が浮かんだ。

「こうなることは分かっていたのですか。先生、分かっていたのですね」

気温が急上昇し、酷暑がつづけば、大都市システムを支えている高温に弱い諸々の電子機器が機能不全や誤作動を起すのだ。

「現代都市システムそのものが機能不全や誤作動を起しかねないのです。都市は大混乱に陥るにちがいない」

「……………」

「それよりも恐いのは、急速な昇温による高温の生物への悪影響です。と

くに、人間に対してどのような影響をおよぼすか心配なのです。人間や動物は地域の環境条件のもとで生存しているからです。温暖化による急激な高温が問題です。ヒートショックに対して人間の脳は極めて弱い。人間の脳はデリケートで、四〇度前後でおかしくなります」

佐々木には気温が突発的に一〇度ほど上昇すれば人体にどれほどのショックを与える分からなかった。夏場で突然一〇度ほどの気温上昇というのは、日本人がかって経験したことのない四五度から五〇度といった高温域の気温帯だ。それもまだ暑さに慣れていない身体に突発的に襲ってきたのだ。乳幼児や老人にはまさにはじめて受ける耐え難い衝撃だったにちがいない。

「すでに犠牲者は出ている……………」

「日本列島ヒートアイランドでは、都市のハード面だけでなく、ソフト面でも大混乱を引き起すだろう。そのうえに、多くの熱中症患者や犠牲者が続出することになるにちがいない」

「日本列島がヒートアイランド化すると、大都市システムばかりでなく、そこに住む人間の臓器も機能不全に陥り、誤作動を起すということですか」

現代文明都市の心臓部に埋め尽くされているIC機器や電子部品が突発的な高温に襲われれば、それ自体が機能不全や誤作動を頻発させるのだ。そのうえ、それらを操作したり監視する人間も突発的な高温に弱い。現代文明都市が突発的な高温に襲われれば一体どんなことになるのか。

「すでに日本列島はヒートアイランドとなったのです。これからなにが起さるか心配です」

佐々木は佐藤の顔をじつと見つめた。彼の脳裏に超高層ビルが林立する現代都市東京が蟻細工のように溶けていく様子がまざまざと写しだされて

いた。

25

ガクンと前のめりするような衝撃をとまなつて電車が急停止した。

一瞬、悲鳴が発せられ、乗客が放り出された。吊り革を握らず、フロアに立っていた乗客が飛ばされ、折り重なって倒れた。

都心へ乗り入れている私鉄で、毎朝郊外から超満員乗客を運んでいるが、朝のラッシュアワワーのピークが過ぎ、乗客数も減り始めていた。

「どうした」

「線路が曲がっている」

「なんだと……」

「レールが浮いてくねっている」

「運転できないのか」

「脱線する恐れがある」

マイクの切り替えを忘れたのか、運転手と車掌の慌ただしいやり取りが車内放送のスピーカーからもれてきた。

背の低い中年の車掌が怪我人がないかチェックしながら、あたふたと車内を通り抜け、前方の運転室へと急ぐ。

「只今、急ブレーキを掛けてご迷惑をおかけしました。前方のレールが損傷しており、脱線の恐れがあるため、急停止いたしました。原因を調べ、

早急に運転再開をはかります。ご迷惑をお掛けしますが、しばらくそのままお待ち下さい」

車内放送があつて、しばらくすると、救急車のサイレンが近くから響いた。

気温はすでに四〇度を超していた。連日の高温で鉄製のレールが想定以上に延び、浮き上がってしまったらしい。

鉄製のレールは気温の変化によって伸び縮みする。そのため、レールの継ぎ目には隙間を開けておく。この継ぎ目があるため、レールを走る電車は「ガタンゴトン」といった音を発するのだ。

これはこれまで普通に用いられてきた単純な突き合わせ構造の継ぎ目のケースであるが、超高速の新幹線などで採用されているロングレールが一般にも用いられるようになると、これにともない、レールの継ぎ目も斜めに切り込む「伸縮継ぎ目」タイプとなった。これによって従来の突き合わせ構造タイプの継ぎ目が減ってきているが、都市内や郊外を走る短距離の電車にはまだ短いレールを突き合わせた線路を走るものが多かった。

鉄のレールは日本列島ヒートアイランドの猛暑に耐えかね延びに延びた。レールは継ぎ目の隙間の間隔を超えて延びていく。枕木に固定されたレールは体を揺り、曲げたり浮き上がろうとする。そのとき、レールは枕木に固定している犬クギやボルトを持ち上げたり、枕木そのものをも移動させてしまうのだ。

車内はフル回転をつづけるクーラーで冷えていた。天井から冷気を吹き出している。だが冷房がいつまでもつか分らない。電車が走っていれば、クーラーのラジエーターも効率よく熱交換がなされるが停止していれば効率が落ちるのだ。

時間の経過とともに、乗客には蒸し風呂の恐怖が襲い来る。

「いつになったら動くんだ」

「早くドアを開けろ。いつまで閉じ込めて置くつもりだ」

「外は暑いぞ。まだこのままの方がいい」

乗客が騒ぎだした。

「申し訳ありません。もう少しお待ち下さい。レールを点検しております。

異常箇所を水で冷やしております。元に戻れば運転を再開いたします」

マイクから車掌のアナウンスが流れてきた。

「前方のレールがやられているなら、バックして通過した駅へ引返せばいいじゃないか」

「後続の電車が近くまで来ている」

乗客が口々に言う。

高温によるレールの変形事故は各地で多発し、交通マヒを起した。

急停止によって線路上に立ち往生した電車は、線路に散水するなどの応急処置を行い、最寄り駅へ移動した。熱中症の危険もあって、灼熱の太陽光線が降り注ぐなかへ乗客を放り出すわけにいかず、変形したレールのうえを恐る恐る電車を移動させることにしたのだった。

電車に取り残された乗客の問題は、一応、解決したものの、そのあとが大変だった。全線にわたってレールの点検が必要だった。午後からはじまる沿線の高校や大学からの帰校ラッシュまでにはなんとか間に合わせたいが、高温のなか、点検作業が思うように捗らない。レールは軒並み変形しているのだ。

駅頭に生徒や学生の一群が現れたのを合図に、続々と生徒や学生たちの

群れがつつぎ、駅舎周辺に生徒や学生が溢れ出した。

だが電車は運休したままだ。運転再開のメドさえ立っていないかった。

刻々と会社勤めのサラリーマンたちの退社時間が迫ってくる。ラッシュのピークともなれば、都心から郊外へ向う何千何万ものサラリーマンの群れが押し寄せるのだ。

外気はまだ四〇度近い。太陽は西へ傾き、光線が弱つたとはいえ、残光はまだまだ厳しい。

駅舎にひとが溢れ、轟めく。高い気温とひとの大群が発する熱の灼熱地獄が待っているのだ。

26

救急車のサイレンが鳴り響く。

四〇度を超す酷暑がつづく三日目ころから、病院に熱中症患者が溢れた。

連日四〇度を超す日がすでに一週間つづいていた。

日本列島を覆い尽くしている太平洋高気圧には弱る気配がなかった。日照りがつつぎ、各地で人工ダム貯水池が干上がり、上水道用の水がめが底を突き出した。大河川の流量も極度に減った。

都市住民は酷暑と極度の給水制限に見舞われた。日常生活がすっかり破綻した。水道から水が出ず、クーラーも機能不全に陥り、毎日テレビを見て安閑と暮らしていた人びとをどん底へ突き落とした。

熱中症患者がうなぎ登りに増えていく。ことに東京が酷かった。

気象庁は熱波来襲を告げ、ようやく日本列島ヒートアイランドについて

の解説をはじめた。

テレビや新聞などマスコミは特集やワイドショーで連日熱中症の危険と予防法を繰り返す。

ひとの健康被害だけではなかった。ほうれん草などの葉物やトマト、なす、キュウリなどが日照りと高温で枯れた。高温障害が広く発生し、国産の生鮮野菜が極度の品不足で店頭から姿を消した。

IT機器の誤作動が頻発し出した。電子部品が高温で狂いだしたらしい。

都心で交通事故が目立った。運転中のドライバーが暑さで意識が朦朧としたり、気を失ったりする症状も多く見られたが、ドライバーの体調と関係なく、カーナビが変調を起こしたり、自動車が突然暴走をはじめたりするのだ。なかには急にエンジンがエンコして、運転不能となることもあった。

タイヤのパンクもつづく。すり減ったタイヤが渋滞で長時間太陽に熱く焼けたアスファルトのうえで激しく熱せられたかららしい。

交通信号の誤作動が頻発した。電子部品の誤作動で交通信号が正常に機能しないのだ。そのほかに信号伝達ソフトの不具合も重なって、赤と表示すべきときに青になったり、赤のまま青に変わることがなかったり、交通に大混乱が生じた。

交通信号が赤信号を表示したままとなった交差点では、交通渋滞に苛まれた運転手やドライバーらは互いに譲らず、われさきに交差点へ突っ込み、正面衝突する事故が多発した。

交通渋滞のなかで一度事故が起これると、収支がつかなくなってしまう。パトカーも救急車も事故現場に近寄れず、事故車ばかりか怪我人も放置されたまま、事故処理が一切進まなかった。そればかりではなかった。事故

が新しい事故を呼んだ。

都内の主要幹線道路や首都高速には数珠繋ぎの車の列ができた。一時間に数百メートルも進まず、殆ど動くことはなかった。

午後になっても渋滞が解消せず、渋滞に嵌まった車は長時間にわたり強烈な太陽光線を受けていた。車体は高熱に熱せられ、車内の温度が急上昇し出す。次第にクーラーの冷房能力が落ちていく。耐えられなくなった運転手やドライバーは裸になってウインドーを全開してしまう。我慢しきれなくなったのか、車を道路の端に放置して、車から逃げ出すものまで出る。

交差点の事故のせいとか、信号機などの誤作動のせいとか、道路には車が溢れ、交通がマヒした。

盛り場を走る片道二車線の幹線道路には数珠繋ぎの車が犇めき、何時間も身動きできない状態だった。何人ものドライバーが車から降りて小走りに道路脇の自動販売機に向かい、冷えた飲み物を手にして戻るが、車の行列は一向に動く気配がない。

駐車していた背の低い外国車の中で、使い捨てライターが突然破裂して火を噴いた。助手席にライターと一緒に置かれていた遠視用メガネの凸レンズがフロントガラスからの太陽光線を集光し、ライターを焼いてしまったらしい。

車内に煙りが充満した。近くでコーヒを呑んでいた濃い色の大きなサングラスを掛けた若い男が小走りに戻ってきて、車のドアを開く。

その途端、ボンと爆発音とともに、一瞬大きな炎が噴き出す。男は慌ててドアから手を離し、後ろへ飛ぶ。

開けたままのドアからもくもくと黒煙が噴き出す。炎が混じり、車を包んだ。

「ドアをしめろ」

やじ馬が集まりだした。遠巻きに眺めている。若い男は車に近づきドアを閉めようとするが、炎の勢いが増して近づけない。

「ガソリンに引火するぞ」

「みんな、離れろ」

道路には渋滞して動くに動けない車が片側二車線のなかと両側の駐車スペースに、右側三列、左側三列、計六列縦隊で行列をなしている。

黒煙を噴いている車の近くの車が少しでも離れようと必死に前後に移動する。だが渋滞している車の車間距離は僅かだ。バンパーを小突き、クラクションが鳴る。

黒煙に火がつき、炎を噴き、ウインドウのガラスが次々に割れていく。

フロントガラスが割れ落ち、炎が大きくなった。

近くの車のなかから人が飛びたす。周りの車の人びともつづく。

黒煙のなかの炎が幾分下火になったように見えた。炎の色が変わったのだ。黄色の炎になって太陽光線に溶け込んだのだった。

つぎの瞬間、火炎が四方に散り、爆発音が響き渡った。

27

「兄と連絡が取りたいのですが……」

佐々木は受話器の奥の声に聞き覚えがあった。九鬼の弟信二郎だった。

マンションや研究室へ何度電話しても留守なので、思いあぐねて電話したという。

「九鬼くんはいま調査船の乗っているのですよ」

「それじゃ、東京にいないんですか」

「ええ、北極海の調査なんです。なにか急用でも……」

「……実は……、母の体が思わしくなくて……」

一瞬、間を置き、信二郎は言い淀んだように言う。

「お悪いんですか」

佐々木の脳裏に、九鬼を調査へ送り出そうとしたとき頭を過った不吉な予感が蘇った。全身から汗が噴き出した。

「ええ、それで一目……」

「分かりました。至急本人にあなたへ連絡するように伝えましょう」

佐々木は切れた受話器を握ったまま、しばらく立ちつくしていた。

妹亜耶子の顔が浮かんだ。妹が熱中症で息を引取ったのは彼女の夫である九鬼陽一郎が日本を離れ、米国で研究していたときだった。

そしてまた、同じようなことが起こるのか。

佐々木はやり切れない思いがした。亜耶子のときも、また今回も自分が九鬼陽一郎の背を押していたのだ。彼は受話器を返すと、目を閉じた。

「先生、もう少し調査予定が残っているので、それを了えてから帰ろうか思っております。二、三日で終わります」

九鬼だった。

「お母さまのご容態は……」

「まあ……」

「すぐ戻れないのか。ヘリで近くの空港へ送ってもらえないのか」

「いまは北極海のど真ん中ですし、近くの小さな空港よりもこのまま調査

をつづけ、ストックホルムかオスロなどの大きい空港へ行つたほうが早いらしいのです」

「そうか。とにかく、できるだけ早く帰ってくるように」

佐々木は受話器を置くと、急ぎ立てられるように研究室を出た。

あの様子では九鬼が日本に戻るのには早くても五日後だ。果たして間に合うだろうか。佐々木は気が気でなかった。またしても同じことを仕出かしたと思うと、居ても立ってもいられなかった。

外へ出ると、空にはヘリコプターが何機も舞い、爆音が響き渡っていた。

東京駅の方向に黒煙が立ち上っているが、少し離れているようにも見えた。

熱い空気が身体に纏わりつく。一瞬、呼吸が止まった。肺が熱い空気の浸入を拒否しているのだ。汗が噴き出る。

佐々木は息苦しさに堪え、一刻も早く地下に潜ろうと、太陽光線を避けて小走りに近くの地下鉄の駅へ向う。

地下鉄は動いていた。東京は向うダイヤは平常通りで、乱れていなかった。

佐々木は東北新幹線に乗るために東京駅へ向つた。

28

「本社近くで火災が発生しているのかよ。ヤバイ」

携帯の画面をちらと見て、若い男子派遣社員が隣の机で手持ちぶたそうにしている中年の女子雇員に囁く。

「見つかるわよ」

女子雇員は壁の時計に目をやり、椅子から立ち上がると机のうえの茶飲み茶碗を片付け始める。

若い男は携帯を作業服の胸のポケットに仕舞い、何事もなかったように伝票整理をつづける。

電話のベルが鳴った。若い男はゆっくり手を伸ばして受話器をとる。

「バカ野郎、なにやっているんだ。早く来い」

班長の声だ。

「いけねい、忘れていた」

若い男は仮建築の事務所の引き戸を勢いよく開けて、飛びだす。

「閉めていつてよ」

後ろで女子雇員の声があった。

若い男は発電所専用岸壁に横付けになっている小型漁船を目指して突っ走る。

急いで乗り込むと、船は直ぐ動きだした。

事務所から走ってきたせいとか、息苦しい。噴き出している汗が潮風を受けても消えない。汗に濡れた下着が皮膚にべったり纏わりつく。気温が高いせいとか、潮風が熱風のように熱いのだ。

船は沖を目指す。若い男は甲板の手すりを握って、砂浜の海岸に立地されている原子力発電所群の全景を眺めていた。

「フル運転か。今日も水温測定が長引くな」

男は眩きながら、発電所専用港湾の両端にまとめて設置された放水口から吐き出された温排水が描く白い泡の広い帯に目を移す。これでは温排水による海水温上昇範囲が沖合の遠方まで広がっているにちがいない。

原子力発電所の前面には砂浜を掘って専用の人工港湾がつくられ、両サ

イドから波浪防止の堤防が沖合へ延々と伸びて、波浪を防いでいる。発電所群の放水口は堤防の外側付け根にあった。大きな口から常時大量の温排水を吐き出す。

前年、この原子力発電所がずっと運転を停止し、首都圏は大停電に見舞われた。なにが原因で発電所が突然運転停止に追い込まれたのか、なぜか未だに明らかにされていないかった。

冷却用海水の水温が異常に上昇したのがきっかけとなったらしいことが指摘されたが、なぜ海水温が急に高温になったのか、その原因が不明だった。

もし運転停止が発電所サイドのミスとなれば、電力会社は大停電による損害を賠償しなければならないが、地球温暖化による暖水塊のせいとなると、問題がややこしくなってしまう。地球温暖化が原因となれば因果関係が錯綜するからだ。

停電事故の原因説明が不十分なまま、責任関係も曖昧の状態で、このため発電所側も十分な高海水温対策を講じることもなく、ふたたび夏場を迎えることになった。

だが難敵が待ち構えていた。発電所にとって一番の難問は地元の漁民であり、漁業組合だった。海水温が上がれば海流や魚場も変わり、養殖漁業ばかりではなく、これまで獲れていた魚介類が獲れなくなるからだ。

漁民にとって、海水温が変化することは死活問題なのだ。温排水で海水温が上がれば魚場がダメになるなら、それを実力で阻止するために、石やコンクリートブロックなどを放り込み、冷却水の取水口や温排水の放水口を塞いでしまうだろう。

取りあえず、この夏は漁協と共同で温排水による海水温上昇範囲を測定

することになった。もしその範囲が立地に際して事前に決めた範囲（海域で魚類を獲る権利である漁業権を消滅させた範囲）を超えていれば、それに応じて発電所側が補償金を支払うことにしたのだった。

臨時の調査船となった小型漁船は速度を速め、沖合へ出た。揺れが激しくなった。

しばらくして、船は減速した。

「おい。はじめよう」

若い男は水深水温計とブイを海中へ投入する。ワイヤーがするすると延びる。

「大丈夫かな」

「今日もフル（運転）なのに（出力が）一〇〇パーセントを割っている」

二人の若い運転員が勤務を了え、当直運転員と交代してして中央制御室から出てきた。ひとりは背が高いが、痩せてひよろひよろしている。もうひとりは背は低い、がちりした体格だった。

「うん、それより、中給（中央給電指令所）ことだよ」

「中給がどうした……」

「本社の近くで大火災が発生しているそうだ。中給、大丈夫かな」

「え？ ホントかよ。誰から聞いたんだ」

「当直長が話していた」

「なんて……」

「類焼の危険があるらしい」

「……………」

「たとえば、中給と連絡が取れなくなっても、ここはフル運転をつづけるこ

とになっているそうだ」

「調整はほかの火力でやるのか。この際、ロードを落として復水器系をチェックしたほうがいいと思うんだがな」

「やはり、心配か」

「うん、今日も炉はフルなのに、一〇〇パーセントを割っていた」

ひよろひよろが同じことを繰り返す。

このところ、冷却水用として取水している海水の水温が復水器の設計設定水温を超えていた。だがこれを無視して、連日の酷暑で高まる電力需要に備え、フル運転をつづけているのだ。

取水量を増やすことができなければ冷却水が復水器で昇温し、規制値の七度をかかなり超えてしまう。冷却水の水温が高くなると熱交換の効率が低下し、発電出力が一〇〇パーセントに達しないのだ。

また、冷却水として取り込まれた海水中の魚卵や稚魚などが七度を超える昇温の影響で死滅する恐れがあるばかりか、放水口から海中へ排出される大量の高温排水による海洋生態系への悪影響も心配だった。だがふたりにそれよりも復水器細管そのものへの異常な昇温による影響が懸念材料だった。

29

東京駅はラッシュアワーのときのように混雑していた。行列のように連なる乗降客の流れを縫って、佐々木は地上の新幹線のホームに出る。

ヘリコプターの爆音が耳を劈き、油が燃えるような臭いが鼻を突いた。

東北新幹線のホームには一〇輛編成の列車が発車時間を待っていた。佐々木は自由席の車輛を探してホームを彷徨う。

発車のベルが鳴った。

彼は近くのドアから列車に乗り込んだ。

空席を探して腰を下ろした。列車が動きだした。

佐々木はなんととしても今日中に九鬼の母を見舞いたかった。一刻も早く彼女に会って、九鬼を北極海調査へ送り出したこと、そして現在直ぐ戻れないところにいることを謝りたかった。

近くで赤ちゃんの泣き声があった。辺りを見回すと、いままで気が付かなかったが、こども連れが多かった。

佐々木はぼんやりと子供たちの動きに目をやる。子連れの若い母親を見て、酷暑のなか、厳しい給水制限の東京にいるよりも、子供に早めの夏休みを取らせ、実家のある田舎へ連れて帰るのだろうかと思う。

田舎には孫の訪れを楽しみにしている老父や老母が待っているのだろうか。

佐々木は甥のアキラを思い浮かべた。病院に妹亜耶子を見舞ったとき、保育器のなかにいたアキラも一歳二か月となつてはいるはずだ。幼いアキラと一緒に遊んでくれた祖母良子が病に伏していることをどう感じているのだろうか。

彼はいつも柔和な笑みを絶やさないう良子を思い浮かべた。数えるほどしか会ったことがなかった。だが小柄で、どちらかといえば輪郭の曖昧な優しい顔立ちで、強烈な印象からほど遠いが、幼くして母親を亡くした彼には決して忘れることができない深い印象があった。無意識のうちに、彼は良子の柔和な微笑みに亡き母の面影を感じ取っていたのかもしれない。

うとうとしかけたとき、列車が突然減速した。次第に速度を緩めていき、ついに停止した。

佐々木は窓の外に目を移す。辺りは一面に水田が広がり、遠くの方に二、三軒の人家が離ればなれに点在している。向こうには山脈が連なり、その手前に小高い丘陵が見えた。

一体、どこだろうか。まえの停車駅宇都宮を出て、何分走っただろうか。次の停車駅が郡山だったか。

「只今、沿線で火事が発生しているので待機するようにとの連絡がありました。新しい情報が入り次第お知らせいたします。お急ぎのところ申し訳ありませんが、しばらくそのままお待ち下さい」

スピーカーから車掌の上ずった声が流れた。

「火事？」

佐々木は東京駅の新幹線ホームで油が燃えたような臭いに襲われたことを思い浮かべた。

あのときの火事が広がり、東京駅が類焼しているというのだろうか。それとも列車の進む先の方の沿線で火災が発生しているということか。

「山火事？」

彼の脳裏に一面火の海が広がった。

何日も雨が降らず、山を覆う森林の樹木は乾ききっていた。これらに一度火が付けば瞬く間に火が広がるだろう。

もし新幹線の線路に火災が襲い、架線が断線し、電源が断たれたらどうなるのか。一〇輛編成の列車が動力を失い、このまま立ち往生すれば、数百人もの乗客が高架橋の線路上に置き去りにされてしまうことになる。

電源が切れれば、エアコンも切れる。四〇度を超える酷暑のなか、冷房

の切れた車内は太陽光線を受け瞬く間にオープンと化するだろう。赤ちゃんや幼児、それに老人は耐えられるだろうか。

佐々木はまわりの子供たちに目をやり、全身に戦慄が走るのを覚えた。

子供たちはおもしろいおもしろい恰好で声を出し、屈託なく遊んでいる。隣の席へ伸ばした足を動かしながらゲーム機で遊んでいる男の子、菓子袋を片手に座席に立って後ろの席を覗き込んでいる子、思い出したように鼻の穴に人さし指を射込んで鼻くそをほじくっては床に捨てながら絵本を見ている女の子、菓子頬張り口を動かしながら隣の子のゲーム機を覗き込んでいる子、通路に出て走り回る男の子……。

「ママ、電車止まったよ。どうして」

窓の外を熱心に見ていた女の子が赤ちゃんを抱いて眠り込んでいる母親を小突く。母親は目を閉じたまま生返事を繰り返す。

女の子は彼の目に気付き、小突くのを止め、母親の袖を引く。

彼は女の子から目を離し、天井を見上げた。エアコンは軽い唸り音を発し、冷気を噴き出していることを確かめると、彼は目を閉じた。

いまさらじたばたしてもはじまらない。まな板の上のコイの心境だった。

彼はひたすら列車が動き出しのを待った。

30

那須岳が望める河川敷でバーベキューをしていた男女の若者グループが、あまりの暑さに残り火の後片づけもそこそこに水遊びをはじめた。

連日の日照りで流水が殆ど枯れ、岩陰の淵の深みに僅かな水が残っている

た。若者たちは水溜まりを目指して走り寄り、水を掛け合ったり、水中に潜ったり、夢中にはしゃぎまわっている。

河川敷の大石の陰に置いていた三本の携帯用のガスボンベに強烈な太陽光線が射した。一本のボンベは微かな音を発して動いた。小さな亀裂からガスが噴き出した。

ボンベが飛んだ。つぎの瞬間、残り火にガスが引火して、激しく炎が噴き出した。瞬く間に、残りの二本のボンベが爆発し、火を噴くボンベが空中高く飛んだ。

火は日照りつづきで一面枯れ草に覆われている山腹へ飛び、藪を燃やし、からからに乾いた灌木に燃え移った。火はドミノ倒しに山肌を駆け登る。森林を燃やし、やがて旋風を巻いて山二面に勢いよく広がっていく。

若者たちが気付いたときには火は勢いを増し、四方八方へ広がりに出していた。

火は上昇気流に煽られ、白い炎の長い舌を巻き、手当たり次第に呑み込んでいく。植林したものの、手入れせずに荒れるままに放置されていた杉林はマッチ棒のように火を噴いて燃え尽きていった。

日照りつづきで乾ききった樹木にはすぐ火が燃え移る。森林を総なめして広がる火は山腹の別荘を襲い、麓の集落へ飛び火した。

火は上昇気流に煽られ、火炎はつむじ風となって飛び、東へ西へと列島を横断するように広がっていく。東西へ向った火はさらに北へ南へと広がった。

同じころ、那須高原、いわき、湯沢付近の東北自動車道、磐越自動車道、関越自動車道の高速道路で横転事故が続いた。

一〇〇キロを超えるスピードで走行中のトレーラーや大型トラックにタイヤのパンクが続発したのだ。タイヤはいずれもかなりすり減っていたが、道路は連日の強烈な日射で焼けてかなりの高温となっていたうえに、道路面に無数の凹凸が生じていたのが原因となつたらしい。

それに酷暑による運転手の注意散漫が加わり、ブレーキが遅れ、慌てて踏んだ急ブレーキに後続車が次から次へ追突していった。何十台もの玉突き追突事故で分離帯を越えて対向車線まで事故車や牽引車輛が飛び出し、高速道路の上下線に自動車は何キロにもわたって数珠繋ぎとなった。

トラックに激しく追突されて後頭部がペメシャンコに押し潰された乗用車からガソリンが染み出た。

「早く逃げろ」

トラックの運転手が運転席から飛び降りた。後続の事故車からつぎつぎとドライバーらが飛び出す。

「車に人がいる」

潰れた乗用車にはドライバーがハンドルと座席シートに挟まれ、頭から血を出し身動きできずにいる。トラックの運転手が走り寄りドアを開けようとノブを引くがびくともしない。

「火がつくぞ」

「離れろ」

つぎの瞬間、路面に洩れたガソリンが爆発的に燃え上がる。過熱していたエンジンから引火したらしい。

遠くでサイレンの音がしたが、なかなか近づいてこない。

車から降りた人びとが自分の車に目をやりながら、後ずさりしていく。

四〇度を超す酷暑なか、オーバーヒート気味の焼けたエンジンは染み出

たガソリンに火を放つ。追突車の行列の後ろからも火炎が上った。

挟み撃ちにあつた人びとは逃げ場を失い、防音壁によじ登る。

数珠繋ぎの車が隣の火炎を受けて順々に爆発していく。爆発のたびに火炎が広がり、誘発を繰り返す。火種が四方八方へ飛び散った。

突然、トンネル入口に近い、崖が迫る切り通しの路上に停車している車のガソリントankが爆発した。黒煙とともに、巨大な火炎が立ち上った。

崖の上から垂れ下がっている松の枝に火がついた。火は枝を伝つてすると上った。崖の上から細かい火の粉が降り注ぎ、路上に白い灰に混じって黒い灰が積もった。

強烈な陽光が車から逃げ出してきた人びとを情け容赦なく射す。逃げ惑う人びと頭に火の粉まじりの灰が降る。太陽を避け、人びとがトンネルに殺到する。

ヘリコプターの爆音が響く。

マスコミのヘリか。二度三度空中を旋回して去っていった。

山火事の発生は北関東だけでなかった。九州、四国、山陰や北陸で山火事が散発していた。

太平洋高気圧に覆われ、二週間も晴天がつづき、すっかり乾ききつていた日本列島ではどこでも火災発生の危険があつた。ことに、西日本から北関東にかけて、昨年の暮れから小雨傾向で、降雨量は例年に比べ半減していた。降雨があつても局地に偏り、殆ど雨らしい雨が降らない地域が広がっていた。

全国的に降雨パターンもすっかり変つていた。極端から極端へと走り、どっかと大雨が降ると思えば、からからの日照りが何日もつづくのだ。

長年にわたり、日本列島ではいたるところで、森林を切り開き、山肌を削り、道路やゴルフ場のほか、さまざまなレジャー施設用の土地を造成してきた。これらの多くの地域は手入れも行き届かず、日照りがつづけばからからに乾燥して砂ぼこりを立てるか、大雨時に大量の水を吸い込み、山崩れを起し、濁水とともに土砂を流していた。

以前、林業が盛んだったときに植林された杉や松の林は手入れもされず荒れるがまま放置されていた。台風で倒れた木々に枯れ枝や落ち葉が積もつた。日照りつづきに周辺の低い草木も枯れ、からからに乾ききつている。

海から蒸発した大量の水蒸気で巨大に成長した積乱雲が降らせる雷雨も海上や海岸辺りに集中し、山を越える風は乾ききつていてさらに乾燥に拍車をかける。

雷はおろか、枝と枝が風で擦れても発火する状態だった。どんな小さな失火でも大火事になってしまうのだ。

火事になれば、人家への類焼を防ぐのが精一杯だった。ヘリによる上空からの散水も試みられたが、全く「焼け石に水」だった。

火炎は旋風を呼び、長い炎の舌を振り回し、獲物を見付けては呑み込み、急速に拡大していった。

31

「所長、中給と連絡が取れないのですが、このまま発電をつづけますか」

まるまると太った短軀の男があたふたと所長室に入ってきた。副所長の菅田だ。所長より二歳うえて、毎年のように、役員候補として噂にのぼる

が、今年も役員になれなかった。

「……………」

執務机で書類に目を通していた男が色白ののつぺらとした顔を上げ、黙って菅田をじろりと見た。渡辺は若いときから切れ者と噂され、技術系だが長い間企画畑の仕事に従事し、社長の覚えがよかった。数年前に取締役になり、いまは常務だった。昨年の大停電事故の後、責任をとった前所長の後任として派遣されてきたのだ。

「テレビでは本社一帯に火災が広がっているようですが……」

「うん、いつから連絡が取れないのかね」

「大分まえから中給と連絡がとれなくなったのですが、去年のこともあるので発電をつづけていたのです」

「ほかの給電所とも連絡がつかないのだね」

「それに山火事が発生して広がっている様子なので、これも……」

菅田は他人事のようにいう。

「どうすればいいと思うのかね」

「それで……、とりあえず、へりを飛ばして送電線路への山火事の影響を調べてはどうかと……」

七基の大容量原子力発電所（出力合計八二万二千キロワット）で発電された電力は、まず一〇〇万ボルト級の超高圧の一次送電線（五〇万ボルトで運転中）で首都圏近くの一次開閉所、一次変電所へ向う。そこ経由で首都圏へ送られ、二次送電線で二次変電所へ、そして三次送電線で三次変電所へと順次降圧して、最後に個々の需要家へ配電する。山火事で被害が心配されるのは山間部を通る超高圧の一次送電線路と二次送電線路だ。

「ではそうしたまえ。それに原子炉は慎重に運転をつづけ、中給の指令な

しに決して運転をストップしないように。大停電事故を二度と発生させてはならない」

発電所で発電し、需要地へ送配電している電力は直流ではなく、貯蔵のきかない交流である。それゆえ、交流電源である発電所では電力需要に合わせて必要な量の電力（電気エネルギー）を発電して需要家へ送る続けることになるのだ。

渡辺は汗を拭き拭き出ていく菅田を見送ると、立ち上がって応接セットの横にあるテレビの電源を入れた。

上空のへりから撮影した黒煙を吐く東京都心部の火災と山火事の映像がつづく。

高架橋で立ち往生している新幹線の車輛が大写しになった。高速自動車道で黒煙を噴いている車が見える。道路の端を逃げ惑う人びとや怪我人の救急活動の画面がつづくが、写しだされている場所がどこなのか判然としない。

白煙を発生し燃え広がる北関東の山火事現場の映像がふたたび写しだされた。だがこれもどこが燃えているのか、超高圧送電線の近くなのか、分からなかった。

渡辺は画面をじつと見入っていたが、しばらくするとテレビの電源を切つて机に戻り、受話器に手を伸ばした。

32

佐々木は赤ちゃんの泣き声で目を覚ました。

車窓からの風景に変わりがなかった。列車は田んぼの真ん中を走る高架橋に停車したままだ。

彼は腕時計を見た。一〇分ほどどうとうとしていたらしい。

エアコンが作動していることを確かめると、彼はふたたび目を閉じた。

それにしても車掌はなにをしているのだ。山火事の状態はどうか。山火事が下火になれば運行を再開するのだろうか。再開の可能性はあるのか。

情報が欲しかった。彼はもう一度腕時計に目をやると座席を立つて、車輛と車輛を繋いでいる連廊へ出た。

連廊には人びとが群がっていた。トイレのまえには順番を待っている人が列をなし、ドア付近では携帯で話している人で混みあっている。

彼は通路に溢れている人びとを見て一瞬迷った。車掌の様子を尋ねようと思つて席をたつたものの、車掌室がどこにあるのかさえ知らなかった。前の方だろうか。それとも後ろの車輛にあるのだろうか。

何人も携帯電話で話している。隣の話し声で聞き取れないのか、互いに話す声が次第に大きくなっていく。

「火事で止まって、いつ動くか分からない……」

「約束の時間には間に合いそうもないから、先にやっつけてくれ……」

「なに、そんなに広がっているのか……」

「東京駅もか……」

携帯で話している話し声が断片的に耳に入ってくる。彼は通路を塞いでいる人びとをかき分けて進むのも億劫になり、トイレの順番を待つふりをして、しばらく耳を澄まして話し声を聞いていた。

目的地まで運んで貰おうと列車に乗ったのに、どことも知れない高架橋のうえに置き去りになってしまっているのだ。それも外にも出られない車

輻という閉塞空間に閉じ込められたままだ。携帯だけがかりうじて外の世界と繋がっている。

彼は踵を返し、席に戻った。

子供たちも退屈しだし、声を上げ、騒ぎだす。

「いつまで待たせるのかしら」

隣の座席の夫婦らしい二人連れの女が車窓に目を向けたまま呟く。

スピーカーが鳴った。

「お急ぎのところ、お待たせいたしております。進行方向前方沿線付近で山火事が発生し、延焼中ですので、只今、運転を停止しております。危険が解消次第、運転を再開する予定ですが、いまのところ、再開見通しは不明です。司令室と協議し、とりあえず、最寄りの駅への移動を検討……」

突然、車掌のアナウンスが中断した。と同時に、車内の蛍光灯が消えた。非常灯が点いた。

「停電か、東鉄指令（東京総合司令室）と連絡は……」

車掌の慌てた声とマイクのスイッチを切る音がスピーカーから洩れてきた。佐々木はおもむろに天井を見上げた。微かに唸るように洩れていたエアコンの回転音がまだつづいている。

確かJRは新幹線用に自前の発電所を持っているはずだ。停電というのはそれがダメになったということか。もしそうなら、運転再開までにはかなりの時間がかかることになるのか。彼はあれこれ考えうることを考えつづけた。

彼は耳を澄ましてもう一度モーターの回転音を確認する。停電なのになぜエアコンが動いているのか。

彼はようやく非常用電源に切り替わっているらしいことに気付いた。もしそうだとしても車内の冷房はいつまで大丈夫なのか。

空には雲ひとつない。ぎらぎら燃える太陽はまだ真上にあるのか、両側の窓から射込む陽光はなかった。

急に、渴きを覚えた。彼は鞆からペットボトルを取り出すと、温くなったミネラルウォーターを一口呑んだ。まだ半分以上残っている。彼はペットボトルを前座席の背面のマガジンラックに挟む。

彼は背を倒し、目を閉じた。次第に胸の中が逆立っていくのを覚えながら、座席で身を強ばらせ、つぎのアナウンスを心待ちしていた。

時折、マイクから金属のぶつかり合うような音が漏れる。だが車掌のアナウンスはなかった。

「どうなるんだ」

「このまま立ち往生をつづけるのか」

「クーラーももうすぐ止まるぞ」

乗客が座席から立ち上がり、口々に喚ぎ出す。

車内の温度が上りだした。

彼はズボンのポケットからハンカチを取りだし、首筋の汗を拭く。

「只今、停電が発生しました。外へ出るのは危険ですから、絶対ドアを開けないようにお願いします。いましばらくお待ち下さい……」

話し声や雑音が漏れたが、つづいてマイクが切れた。

「いつまで待てというんだ」

「クーラーが効かない」

「熱中症になるわ」

「窓を開けて風を入れろ」

「窓は開かない、外は熱波だ」

連廊へ通じるドアが開放された。座席を立つて乗車口のある連廊へ移動する乗客の列ができた。連廊はすでに身動きができないほどの乗客で溢れている。

車内の温度がさらに上る。

「ママ、水……」

「待ってて、買ってくるからね」

若い母親は座席から立ったものの、通路には乗客が立ちほだかり、連廊にある自動販売機まで行けそうもない。それでも若い母親は身を細め、乗客の間を通り抜けて行くとする。

佐々木は薄目で若い母親の後ろ姿を見送ると、目を閉じた。急に睡魔が襲ってきて、彼はそのままうつらうつらしていた。

「すみません。お水分けていただけませんか」

目を開けると、さっきの若い母親が通路越しに佐々木の方を見て会釈した。窓側の席で三歳ぐらいの男の子が顔を赤くし、ぐったりしている。熱中症なのか。

熱中症は身体の水分率が減少することによって急激に症状が悪化する。

水分が三パーセント減少すると、のどの渇きや食欲不振に陥る。同四パーセント減少すると、皮膚の紅潮や疲労困ぱいとなる。同五パーセント減少すると、頭痛や熱にうだる感じとなり、同六〜七パーセント減少すると、めまいや呼吸困難が生ずる。同八〜一〇パーセント減少すると、身体動揺やけいれん、同一一〜一四パーセント減少すると、循環不全や腎機能不全を起し、同一五〜一九パーセント減少すると、難聴や皮膚の感覚マヒ、同二〇パーセント以上減少すると、無尿、死亡にいたるといふ。

「……………」

「飲み物が全部売れ切れてしまっていたので……」

「余分は持っていないと思うけど……」

彼は鞆を開ける。

「そこに……」

若い母親はマガジンラックに挟んでいるペットボトルを見ている。

「ああ、これですか。飲みかけですよ。口をつけて……。これでいいのですか」

若い母親はペットボトルを受け取ると、何度も頭を下げ、こんな事故に巻き込まれるとは思ってもみなかったと言いながら、急いでこどもに水を飲ませる。トイレが心配なので、電車に乗るときは水分を控えさせていたという。

男の子は目を開け、起き上がった。幾分落ち着いたようだった。だがクーラーもあまり効かない暑い車内に閉じ込められてはすぐ参ってしまう。

左側の窓から西日が射し込んだ。空席のブラインドも下ろされた。だが車内は蒸し暑く、サウナのような感じだった。隣の夫婦連れも席を立った。

「ドアを開ける」

「外へ出よう」

非常用コックのカバーが破られ、乗車口のドアが開けられた。数人の若い男が線路に飛び降りる。若い女の人もつづく。

「只今、停電中ですが、高圧電流が流れる危険がありますから、どうか線路には降りないで下さい。もうすぐ救援が来ます。しばらくそのままお待ち下さい。お願いいたします」

車掌の悲痛な声がつづく。

「どなたか医師の資格をお持ちの方はおりませんか。二号車に気分が悪くなった方がおります。三号車も……」

頭上でヘリの爆音がした。マスコミの取材機か。

佐々木は空席になった窓側の席へ身を寄せて、空を見上げる。爆音だけでヘリの姿は見えなかった。

数百人の乗客の乗せた一〇両編成の列車が新幹線高架橋に置き去りになっている。前方から山火事が迫る。東京駅は燃え、司令室とは連絡はとれない。

これではマスコミが放っておくはずがない。水田のなかを走る高架橋に立ち往生する一〇両編成の新幹線列車はヘリからの恰好の取材対象だった。

「後方数一〇〇メートル程の国道に救援隊とバスが来ています。お急ぎの方はお案内いたしますので、最後尾の車輛までお越し願います。いまのところ、停電の復旧見込みはありません」

車内アナウンスが響いた。窓の外をぼんやりと眺めている佐々木の耳元を車掌の声が流れていく。

座席の乗客が立ち、降車の準備をはじめ。

座席を立った乗客が通路を最後尾へ向って動き出した。

線路に降りた乗客は後方へ向って歩き出している。

彼はなんとなく身体を動かすことが億劫になって、そのまま座席に座っていた。

のどの渇きを覚えた。頭痛がした。彼は若い母親へ渡してしまったことを忘れ、ミネラルウォーターのペットボトルを探す。

引つ切りなしに乗客が通路を通り抜けていく。

うだるように熱い。だが動く気がしなかった。一寸でも動けば自分の身

体が溶けて消えていくように思われた。

佐々木は急に眩暈を感じて、目を閉じた。

女の人が近づいてくる。微笑みを浮かべた妹亜耶子が手を差し伸べている。彼も誘われて手を伸ばした。

33

「所長、送電ルートへの影響は避けられません。山火事が勢いよく広がっていると報告してきました」

菅田が飛び込んできた。

「両方もか……」

原子力発電所から関東地方へは超高压送電ルートが二ルートあった。一方のルートは群馬、埼玉県を通り東京多摩の変電所へ、他は群馬、長野、山梨県を通り抜けて静岡富士の変電所へ繋がっている。

「早めに原子炉を停止させたほうがいいと思いますが」

「それはダメだ。どんなことがあっても発電はつづけるのだ」

渡辺は菅田を睨むような目をした。白い顔が幾分紅潮している。

「送電線が切れたら危険です。どうなるか分かりません」

「過電流が生じれば自動的にストップするのじゃないかね」

発電所や変電所などには電流を遮断する継電器が設置されており、断線や需要が突発的に低下するなどによって過電流が生ずれば自動的に直ちに作動するのだ。

渡辺はさらにつづける。

「送電線がダメになるまで送電をつづけるのだ。いま、首都圏が停電したらどうなるか。冷房が止まり、水が断たれ、鉄道も車もストップする。この酷暑の最中に……」

「でも二ルートが共に断線すれば、当発電所が発電する分が一挙に過電流となつてここに跳ね返ってくる。となればどんな事態が生じるか……」

菅田は身体を震わせた。彼には八〇〇万キロワットもの規模の電流が過電流となつてここに跳ね返ってくる衝撃を想像することができなかった。

それに加え、たとえ高速回転中のタービンから発電機を瞬時に離脱することができたとしても、核反応をつづける原子炉は制御棒の装填が終わるまで大量の蒸気を発生しつづける。制御棒の装填が済んでも、炉はしばらく熱を発しつづけるのだ。

余分となつたとはいえ、原子炉で発生させた蒸気をそのまま大気中へ放出することはできない。放射能に汚染されているからだ。

「かといって、首都圏の一〇〇〇万の人びとを熱中症の危険に曝すわけにはいかないのだ。とにかく、最後の段階まで発電をつづけ、ぎりぎりまで送電するのだ」

渡辺は声を震わせ、冷たく言い放つ。

「へりはどこだ。ルートの巡視をつづけるように指示してくれ。状況を逐次報告するように。オレは制御室にいるから」

菅田は席に戻り、受話器を取って部下に命じると、中央制御室へ走った。心臓がドカンドカンと脈打つ。それでも彼は走りつづけた。

「おい、水くれ」

菅田は肩で息をしながら、当直長の机のまえに椅子を引き、太り気味の

短軀をズドンと落とした。

「副所長、どうしたのですか」

「中給（中央給電所）とは連絡がつかないんだな。出力は……」

菅田は言いかけたが、若い当直員が差し出した紙コップを受け取ると一気に水を飲み干す。

電話のベルが鳴った。

「副所長、電話です」

当直長が受話器を差し出す。

「ヘリからの報告が入りました。山火事は栃木北部から群馬西部一帯の山々に広がっているそうです。方々で煙を上げて燃えており、煙で見通しがきかないそうです。上空は熱気が強く、近くに近寄ることができないと言っています」

部下からの報告だった。

「送電線はどうなんだ。ルートへ火が迫っているのか、それとも送電線が火に包まれてしまっているのか」

「近づけないので……」

「監視をつづけ、ルートに火が迫っているところがあれば直ぐ報告するんだ」

菅田は受話器を叩き付けるように電話機に返す。

彼の脳裏にさまざまなことが矢継ぎ早に浮かぶ。

送電線が山火事に耐えられるだろうか。大量の電力を送っている最中に送電線が高温の炎に包まれたらどうなるか。耐熱アルミ合金の電線は高温の炎を浴びればどうなるか。一瞬に燃え上がり溶けてしまうか。そのまえに、高熱で張力が低下して断線するか。そのようなことになったらどんな事

態が生じるのか。鉄塔はどうか。熱で折り曲がることはないか。碍子はどうか。絶縁は大丈夫か。高熱で破損することはないのか。碍子はど

菅田は当直長を見た。脳裏に所長の生白い顔が浮かんだ。一刻も早く、炉を停止させたかった。発電を止め、送電を停止したかった。

「中給と連絡することはできないのか。このまま発電をつづけることは危険だ」

「わたしもそう思います」

菅田の目を当直長がじつと見ている。

「一号炉からスローダウンして出力を順次低下させ、万一に備えておくことにしよう。いいな」

菅田は頭を振り、所長の生白い顔を追いやった。

34

「ママ、暑いよ」

朝からクーラーをフル回転させているが、西日が射込み出したせいか、室温が急に上がった。

公団団地にある古い一〇階建てのアパートだった。三階の南西の角にある八畳ほどのダイニングキッチンだ。

中央にある大きめのテーブルに朝から広げたままの夏休みの宿題帳のままで、小学三年生の女の子は大きな欠伸をした。昼寝から起きたばかりだった。

「もう少し下げようか」

若い母親はクーラーのリモコンに手を伸ばした。節電のため二七度に設定している温度を一度下げ、クーラーに向けてボタンを押す。

反応がない。もう一度押す。やはり反応がなかった。

「変ね。故障したのかしら……」

「ママ、電気が消えているみたい」

冷蔵庫のなかを覗いて飲み物を探している女の子が振り向いた。

「え？ 停電なの」

午後三時五十五分、首都圏の一部に停電が発生した。以後、順次、停電範囲が広がり、最終的には首都圏のほぼ全域に拡大していった。

給水制限下にあつて通常より処理水量が減っていた給水所、浄水場、ポンプ場では停電と同時に、非常電源の有無にかかわらず、一時、作業を中断させられた。給水地域のマンションやアパートでは給水タンクの残り水を除いて断水した。

デパートや商店、レストランなどでクレジットカードでの購入や支払いが不能になった。ホストコンピュータの電源が切れ、カードの照会ができず、使用できなくなったのだ。

交通機関がストップした。JRの一部、私鉄の電車が運行停止となった。

道路の交通信号も作動せず、事故や混雑により車が至るところで立ち往生し、交通マヒがつついた。

ATMが停止した。非常電源への切り替えで、ほどなく復旧するが、株取引などはシステム停止のため再開は見送られた。

病院では手術や集中治療室の治療、酸素吸入や透析などが中断を余儀なくされ、生命の危険が生じた。非常電源の用意があるところでは直ちに電源が切り替えられたが、そうでないところでは電力会社等からの電源車の配車をまたなければならなかった。

都庁や区役所、出張所等ではオンラインがストップし、住民票などの発行、交付業務が停止した。

エレベーターやエスカレーターが動かず、使用不能となった。使用中に停止し、閉じ込められたひとが多く、救出に時間がかかった。何時間も閉じ込められ、熱中症の犠牲者も出た。

第四章

35

「九鬼先生、いつお帰りになったんですか」

受話器の奥から聞き覚えのある声があった。M新聞の佐藤だ。

九鬼は北極海の調査から帰って、研究室に着いたばかりだった。

佐々木教授の勧めもあって、彼は途中で切り上げて直ぐにも帰国するつもりでいた。だが調査船が寄港できる港を探しているうちに、母が快方へ向っているとの知らせが届き、そのまま調査をつづけてきたのだった。

調査は結局二週間ほど延び、八週間に及んだ。ほぼ二か月ぶりに帰ってきた東京は雰囲気が一変し、生気がなく、どこかよそよそしい感じがした。

調査続行を決めてから、研究室へ何度も連絡をとったが、佐々木教授とは繋がらなかった。それでも帰れば教授に会えると思っていた。だが研究室には教授の姿がなかった。誰に尋ねても行く先を知らないという。

途方に暮れているところに、佐藤の電話があったのだ。

「先生、八月は酷かったですよ、日本列島全体が。とくに、東京は大変でした」

佐藤は九鬼の顔を見るなり、汗を拭き拭き言った。九鬼の声を聞き、佐藤が飛んできたのだ。

まだかなり暑いのが、それでも九月に入って幾分暑さがおさまったのだという。

「東京は大変だった？」

九鬼は腕を伸ばしてソファをすすめながら、聞き返す。

彼はふと、佐々木教授の雲隠れと大変だったことが関係があるような気がした。一体なにがどう関係しているのか全然見当すらつかないが、なにかがあるような気がするのだ。

「東京では給水制限下でダブルヒートアイランドに見舞われたわけですからね、特別酷かったですよ。熱中症患者が溢れて病院に収容しきれないほどでね。まだ最終集計が出ていませんが、かなりの数に上ることでしょう。うちの推計では、東京だけで犠牲者が三万人を超え、全国で一〇万人に達するのではなかったかな……」

佐藤は紙袋からメモ帳を取りだし、捲りだした。

「……………」

「東京はもつと多いかも。なにしろ、停電が追い打ちしたからな」

佐藤は呟くように言う。

「え？ 停電があったんですか」

「首都圏一帯ですよ」

その後遺症でいままも首都圏では電力不足の状態だった。それでネオンや広告塔など不要不急のものは使用制限されていたし、駅やデパート、スーパー、モール、コンビニなどの商業施設、パチンコなどの娯楽遊技場では照明や冷房が極力抑えられていたのだった。

「……あのう、いままも病院に収容されている熱中症患者は大勢いるのですか」

「まだ大勢いるでしょう。いまでも熱中症で倒れて救急車で搬入される患者が後を絶たないようですから」

「教授は大丈夫だったのかな」

九鬼は呟く。脳裏に熱中症に倒れた亜耶子が浮かんだ。救急車で搬送されていく熱中症患者と教授がダブった。

「佐々木教授とはまだお会いになっていないのですか。研究室にも出ていらつしやらないのですか」

「どこにも姿が見当たらない。マンションも留守のようだし……」

「お住まいのほうにもいらつしやらないのですか。研究室には何度も電話したのですが、休暇中なのかと思っていたのですが……」

「……………」

やはり熱中症で病院へ担ぎ込まれたのだろうか。

「調べてみましょう。佐々木先生と最後に連絡を取られたのはいつですか」

九鬼の心中を察したのか、佐藤が携帯を取り出した。

所轄の消防署にあたって佐々木教授らしいひとを病院へ搬送したかどうかチェックするという。

「あれは確か八月の初めだったが……」

九鬼は母の体調が思わしくないとのお知らせを受けた日のことを思い浮かべた。

「その日だったかな、それともそのつぎの日だったか、銀座から新橋界隈にかけて大火事が発生した。渋滞して数珠繋ぎになっていた車がドミノ倒しにつぎつぎに火を噴き、道路がまるで火の河のようになって付近のビルが類焼したのですよ。タクシーも多数被害を被ったし、JR東京駅にも飛び火して新幹線や多くの列車の運行が一時ストップしたことがありました」

「え、そんなことがあったのですか」

まさかそんな日に教授が出て歩くことはあるはずがない。日本列島がヒートアイランドとなつているときに、主唱者の当の本人がヒートアイランド

の真つ只中の東京をほつつき歩くなつて、九鬼には考えることができなかつたのだ。

だがもしかしたら、教授はその日にかぎつて外出し、タクシーに乗つたのではあるまいか。あるいは新幹線に乗つて遠出していたかもしれない。彼の脳裏に不吉な影が忍び寄り、次第に彼を大きな不安に包み込んでいく。

妻亜耶子のときもそうだった。亜耶子が熱中症に倒れ、病院の一室でひとり息を引取つていったが、それは彼が海洋調査に出掛けた留守の出来事だった。そのときも調査が長引き、予定をオーバーしたのだ。今回もそうだった。

「警察にも当たってみますか、念のため」

佐藤が九鬼の顔を覗き込む。

九鬼は迷った。教授に調査の報告を済ませてから、新幹線で母を見舞うつもりで、成田国際空港から研究室へ直行したところだったのだ。

「とにかく、佐々木教授を探しましょうか。姿を現わすまで待つているわけにはいかない。取り返しがつかなくなるかもしれないから」

九鬼は自分に言い聞かせるように言う。かといって、彼にはどこをどう探せばいいのか見当すらつかなかった。彼は佐藤に付いていくしかなかった。

36

「社会部の連中にも相談してみる」という佐藤と別れ、九鬼は夜遅く大学に戻つた。

佐藤に付いて警察や消防署を回ったが、教授らしい人物に関する情報はなにもなかった。全くの徒労だった。もし佐々木教授らしきひとが現れれば、大学に照会があるはずなのだ。

通用門をくぐり構内へ入ると、車の走行音や街の喧騒は消え、空気も幾分涼しげに感じられた。いつも点いている外灯は消え、小高い木々の並木が黒い影を落としている砂利道を通り抜け、研究棟へ向う。

暗い夜空に垂直に立つ七階建ての研究棟には明かりが点々と点いていた。彼は一瞬教授の研究室に灯が点いているように感じた。黒い人影が動く。彼は急ぎ足で近づいていった。

教授の研究室は暗く、灯は点いていなかった。ドアのノブに手をかけた。鍵がかかっている。やはり、教授はいなかった。

九鬼は肩を落とし、一瞬このままマンションへ帰ろうかと思った。気を取り直し、自分の研究室の前に立ち、鍵をとりだす。

鍵を差し込もうとしたとき、彼はドアが僅か開いていることに気付いた。出掛けるとき鍵を忘れただろうか。それとも巡回の守衛が忘れていったのか。彼はノブに手を延ばす。

突然、研究室の灯が点いた。なかからドアが大きく開く。もじやもじや頭の背の高い男が顔を出した。

「きみは……」

ピーターソンだった。

九鬼は目を大きくして、しばらくじろじろ見ていた。

「ドアが開いていたので直ぐ戻ると思い、待たせてもらいました」

ピーターソンは東京が酷い熱波に襲われたことを知って、生々しい被害の現場を目で確かめたく、九鬼のあとを追いかけて東京へやって来たのだ

という。現代文明崩壊の端緒を探ろうと、躍起になっていたのだ。

佐々木教授を訪ねて大学に来たが、研究室のドアには鍵がかかり閉ざされていた。幸い九鬼の研究室のドアが開いていたのでなかに入り、待つているうちにソファで眠り込んでしまったらしい。

九鬼は応接セットの椅子にドスンと身体を落とし、疲れた身体をクッションに沈めた。このまま眠りたかった。だが頭が妙に冴えていた。

ピーターソンもソファに戻る。

「教授にお願ひしたかったです……」

と言いつつ、ソファの横に無造作に置いてあったワインレッドのリュックサックを引き寄せ、ノートパソコンを取りだした。

「佐々木先生の行方が分からない」

九鬼はとろんとした目をして呟く。

「佐々木教授が……。でも東京に今日帰ってきたばかりでしょう。なぜ教授が行方不明だと分かったのですか」

ピーターソンはきょとんとした目付きで九鬼を見た。

「自宅にも居ないようだし、前々から連絡が取れなかったのだ……」

「なにか用事があるって、急に遠くへ出掛けることだってあるのじゃありませんか」

「そうであればいいが、なにしろ酷いことがいろいろあったというんだ。

連日四五度を超える強烈な熱波にクーラーなどの家電機器やIT機器類は機能不全を起したようだし、水道は給水制限がつづいていて。そのうえ、停電だ。独り身の教授がマンションの一室で、人知れず熱中症に倒れるということだつてあるかもしれない……。そうか、気が付かなかった……」

教授のマンションへは電話だけで、訪ねていなかった。九鬼は椅子から

立ち上がると、ピーターソンを促し、外へ出た。

タクシーを拾い、マンションを探した。ネオンや看板の照明が消え、街灯も極力制限されて、いつもの雰囲気がない。散々迷って、タクシーを降りてしまう。

歩道に立って辺りを見回す。どこをどうまわったのか、道路を挟んだ目の前に当のマンションが聳えているではないか。

エントランスのドアを入ると、小さなホールがあつて、奥に管理人室があつた。

九鬼は蛍光灯の白い光が射すカウンターに近づき、中を覗いた。人影はなかった。

ピーターソンを振り返る。呼び鈴に気付き、押す。奥に人の気配があつた。

「遅くすみませんが、実は……」

九鬼は事情を話す。怪訝そうな顔付きをして聞いていた頭髪に白髪が混じる初老の管理人が佐々木教授の名前が出た途端、鍵を取りだし、早速案内してくれた。管理人も教授の姿が見えないので、気になっていたらという。帰ってきた形跡がないので、海外への長期出張かと思っていたらしい。

扉の前で、初老の管理人は、確かめるようにもう一度九鬼の顔を覗く。ドアフォンを押し、返事がないことを確かめ、鍵を差し込む。

教授の姿はどこにもなかった。

食卓のうえに、空のグラスコップ、底に飲み残しの跡があるコーヒー碗とカチンカチンに乾燥したトーストの食べ残しを載せた皿があつた。

その日、教授は簡単な朝食を済ませると、いつもの時間にマンションを出たにちがいがなかった。そしていつものように研究室へと向つたのだろう

か。それともどこかべつのところへ出掛けたのだろうか。一体、どこへいつてしまったのだろうか。

九鬼は得体のしれない不安に駆られ、身体が震えた。やはり、佐々木教授は亜耶子と同じように、強烈な太陽光線を浴び、熱中症のかかり意識が朦朧となつて、路上で気を失つたのかもしれない。

彼はいますぐ、教授が通う研究室への道を辿り、気分を悪くし倒れ込んだひとを見かけなかったか調べたかった。だが夜も更け、街灯もまばらなマンションの通りには殆ど人影はなかった。

九鬼はやむなく、ピーターソンと連れ立って、研究室へ戻つた。

37

電話のベルが鳴つた。

九鬼には遠くで鳴っているベルの音は聞こえていたが、目が開かなかつた。開けようとしても瞼が接着剤で着けられたようにびくともしない。

しばらくして二度目のベルが鳴つた。腕時計を見ると、十一時を過ぎていた。

ソファにピーターソンが横になつていた。夜遅く研究室に戻つたふたりは応接セットで話し込んでいるうちに、そのまま眠り込んでしまったらしい。

執拗にベルが鳴っている。意識がまだ朦朧としていた。彼は半目で机に近づき、受話器を取つた。

「九鬼くんだね……」

柏田の押し殺したような低い声だった。

「え……」

一瞬、不吉な気分が襲った。半分眠りの中にいる彼は思わず狼狽える。

柏田は低い声で話しつづけるが、彼には遠い他所の国から流れてくるように響き、よく聞き取れない。聞き返そうと思っているうちに、いつの間にか電話が切れてしまっていた。

しばらく受話器を持ったまま机の傍らに佇み、彼は柏田の話を思い返そうともがく。だが記憶はまるで残っていないかった。諦めかけて受話器を戻したとき、研究室へ訪ねると言った、最後の一句だけが蘇ってきた。

ピーターソンがソファから身体を起こし、両腕を伸ばして大きな欠伸をした。

九鬼は目のまえのピーターソンのもじやもじや頭を見ることなしに見ながら、額の禿げ上がった柏田がどんな用事で訪ねてくるのだろうかとあれこれ考えていた。だが彼にはなにも思い当るものはなかった。それよりも彼には佐々木教授のことが気掛りだったのだ。

「熱波は来年も襲つて来るのか」

九鬼の顔を見るなり、柏田は搾り出すような声で言った。彼は柏田の憔悴しきった様子に驚き、しばらく声が出なかった。

ピーターソンは応接セットから離れてドアに近い壁際に置いてある大きな作業机でノートパソコンを見入っている。時折、キーを打つ音が微かに響く。

「それは……」

「やはり、そうか」

「地球温暖化が解消しないかぎり、程度の差があっても、毎年のように、熱波が来襲するだろう」

九鬼はまえにも同じようなことを言ったような気がした。

「暖水塊もか」

柏田はニヒルな笑みを浮かべる。

「実は北極海の調査から帰ってきたばかりなんだ。例の熱塩大循環がかなり衰えてきている。グリーンランドや北極海の氷が溶けて深層水の生成に影響を及ぼしているのが原因らしい」

「それじゃ、近いうちに温暖化から寒冷化へシフトするかもしれないんじゃないのか。急激な気候変動には熱塩大循環が関係していると指摘されているしな」

過去に現れた急激な気候変動のパターンは、まず、突発的に気温が急上昇し、気温がピークに達すると、徐々に寒冷化をしていき、最終段階で急激に寒冷化して終わる。周期は数百年から数千年ということだった。

「そう期待したいところだが、違っているようだ。過去の急激な気候変動では温暖化のピーク時には北極圏陸地での植物の活動が急激に盛んになる一方、北極海を覆っていた氷が溶けて海面が露出したため太陽光線の吸収が増えるものの、植物性プランクトンの大量発生にともない二酸化炭素の吸収も増え、トータルで大気中の二酸化炭素濃度が低下していったらしい。要するに、寒冷化へのシフトは大気中の二酸化炭素濃度の低下に誘発されたと考えられるということだ」

「今回はそうならないというのか。なぜだ」

「北極圏の吸収増よりも人間活動による二酸化炭素排出量のほうがまだまだ多いので、大気中の二酸化炭素濃度が一向に減らないからだ。たとえ、

世界の二酸化炭素排出量をゼロにできたとしても、即座に、地球が寒冷化へ向うことはないだろう。現在の大気中二酸化炭素濃度は短期間にあまりにも急増しているのだから、さらに減るのを待たなければならないかもしれない」

「ということは、とにかく、当分の間は日本列島は毎年のように熱波に襲われるということだな」

「そう。熱波が来ると考えて対策をしておくほうがいいだろう」

「うん……」

柏田は口を抑え、考え込んでいる。

「今回の大停電の原因は……」

九鬼は先走りして熱波対策を口にしたことに気付いて、修正を試みる。

「決定的な原因は超高压送電線の断線だろうな。だが断線前に周波数が低下したらしい。なぜそうだったのか究明中だがね」

「送電線の断線？」

「山火事だ。首都圏へは日本海と太平洋の海岸から何ルートもの超高压送電線を延々と引いて大電力を送電している。そのうちの何本かが山火事で火炎を受けて断線した」

「もう復旧したのかな」

使用制限がつづいているものの、東京の停電はほぼ復旧していた。

「超高压送電線の断線はまだ直っていない。生きている送電線を使つてやりくりしているのだろう」

「発電所は平常通り運転できていたわけ……」

「まあね……」

煮え切らない。

「ネットワークも問題なかった……」

九鬼には冷却用海水の高温化による発電所復水器の機能低下が気掛りだったし、また、電力送電網のIT部品への高温障害が懸念されていたのだ。

だが予想していたことよりもはるかに低次元の山火事が原因だったと思ひもよらないことだった。

彼は愕然として肩を落とした。

「熱波が毎年つづくなら、発電所は恒久的な対策を取らなければならない。今年はどうにか凌いだとしても来年はムリだろうな」

柏田は九鬼の心中を察したのか、発電所に話しを戻す。

「やはり、大システムは脆弱なんだな」

パソコンの画像をチェックしていたピーターソンが呟く。ピーターソンは自分が発した独り言の気付いて九鬼のほうを見て含羞む。

「山火事はそんなに酷かったの」

九鬼は柏田を見た。

「今朝、仙台から来たのだが、北関東の山地のかなり広い範囲が燃えつきたようだった。日照りつづきでからからに乾き切っていたからな」

森林だけが燃えたのではない。別荘や山麓の人家はもちろん、街にも飛び火した。高速自動車道や新幹線の高架橋も火炎に包まれ、いまだに復旧工事がつづけられているという。

「それで超高压送電線が火炎を受けて断線したというわけか」

「うん、ところで、今回の熱波襲来で、取水口の水深を下げる程度でお茶を濁していた発電所対策を本格的に行なうべきだという意見が高まってきた。だが問題は二年つづいたからと言って、今後も暖水塊や熱波が来襲するのかもしれないことなんだ」

取水口の水深を下げる対策を計画実行した発電所の担当者や所長は、今後の熱波来襲に強い疑問を呈している。自分としてもこの対策を推奨してきたこともあつて、本格的対策をあまり強く主張することもできない。かといつて、あのような対策は中途半端なもので、いずれ効果がないことが明らかになる。今回もいつ破綻するか毎日気が気でなかった。だから、一刻も早く本格的な対策に切り替えたい。それには今後の熱波来襲が定期的に予測されるという専門家の権威あるお墨付きがあれば助かるのだという。

柏田が突然訪ねてきたのはそのためだった。そして九鬼の先生である佐々木教授に書いて欲しいというのだ。

「お墨付き？」

「比喩的に言つたまでだ。そのような趣旨の論文を書いていただければ十分だ」

「……………」

その種のことは新聞やテレビなどマスコミを通して度々発言している。今更、そんなことは必要ないではないか。

九鬼は口を閉ざし、考え込む。

地球温暖化による気候変動で熱波だけが発生するわけではなかった。日本列島ヒートアイランドモデルは日本列島のヒートアイランド化といった側面に焦点を搾つただけにすぎなかった。地球温暖化を熱波来襲だけに限定するようなことになつては問題だ。

「佐々木先生にお会いして、直にお願いしたほうがいいかな」

柏田は九鬼を窺う。

「先生はいない。どこへ行かれたのか分からないんだ。事故などに遇つて

いなければいいんだけど……………」

九鬼は思わずこみあげてくるものを感じた。彼は怪訝そうな目を向けている柏田にマンションを訪ねたことや警察、消防署を回つて探していることを話した。

38

「調査に行きませんか」

柏田を見送つて戻つてくると、ピーターソンが寄つてきた。

「調査か」

九鬼は気のない返事をする。肩を落とし、重い足取りでとぼとぼと去つていく柏田の後ろ姿が目には焼き付いて離れないのだ。

柏田は佐々木教授が行方不明になつてを知ると、諦めたのか、直ぐ腰を上げた。「見つかり次第、知らせる」と言つても、柏田はなんの反応も見せず、次第に薄れ消え入るような後ろ姿を見せたまま帰つていった。

彼は柏田の後ろ姿に重ね合わせるように、佐々木教授を思い浮かべた。教授はどこへ行つてしまったのか。もう顔を見ることも話すこともできないのだろうか。

電話のベルが鳴った。だが彼はそれにも気付かず、ひたすら教授を追い続ける。

「九鬼さん、電話ですよ」

ピーターソンの声に、九鬼はようやくわれに返つた。

「はい……」

受話器から佐藤の声がした。

「社会部の連中は教授が行方不明になった日が分かれば探しようがあると
言っているのですが……」

そして東京の大混乱を上空から写した映像を手に入れた、と佐藤は言っ
た。

「是非、見てみたい」

それは彼が日本を留守にしているときの出来事を撮った画像だった。教
授が行方不明になったとき、東京で一体どんなことが起きていたのだろう
か。そのとき教授はどうしていたのだろうか。

佐藤は直ぐ持つていくと言って、電話を切った。

九鬼は教授と最後に連絡した日がいつだったか、思い出そうと記憶を洗
う。あのときは確か北極海で調査中だった。「一刻も早く帰国するように」
と心配する教授に応えようと可能な方法をいろいろ考えたものの、結局、
陸地に近づくには一週間待たなければならなかった。そうこうするうちに、
弟から母快復の知らせがあったのだ。

「あのう……」

ピーターソンが九鬼を窺う。

「あ、調査だね。ところで、わたしが至急帰国しなければならなくなった
日はいつだったかね、きみ、知っている？」

「はあ……」

「ほら、北極海で調査しているとき、教授から連絡があつて……。あそこ
からどのルートが日本へ一番早く着くかと、みんながいろいろ考えてくれ
たことがあつたらう」

「あれね、確か、八月の初めだ。えーと、何日だったかな」

「北極海のご真ん中だったよな、あのときは……」

「アンダーソンにも確かめてみますか。航海日誌を取り寄せますか」

ピーターソンはパソコンの電源を入れる。

「ああ、いまひとが来る。電話してきた新聞記者だ。上空から撮った映像
を持つてくる。調査はそれを見てからのほうがいいと思うよ」

九鬼はピーターソンが早く調査に出たがっているのに気付き、はやる気
持ちを抑えるように言う。彼は佐藤が持つてくる東京大混乱の映像を見れ
ば、教授についてなにか分かるようにな気がした。それにそのときの映
像はまた、ピーターソンが調べたい思っている対象にちがいないと思つた
のだった。

39

「これがあの日の映像を記録したものです」

佐藤がDVDを差し出した。

九鬼はピーターソンを呼んで紹介し、DVDを渡した。ピーターソンは
作業机からノートパソコンを応接セットのテーブルに持つてきて、九鬼の
隣でDVを再生する。

ヘリコプターの爆音とともに、黒煙がもくもくと立ち上る画像が現れる。

「東京銀座付近だ。次第にクロースアップしていく」

佐藤の説明に應えるように、画面がアップしていった。

交差点だ。片道二車線の道路が十字に交差している。四方から車が突っ

込んだのか、衝突したのか、フロントが潰れてしまった車を先頭に交差点の路面一杯に車が溢れていた。数台の乗用車から煙が立ち上り、火を噴いて燃え上がっている。

黒煙のなかで、時折爆発し、巨大な火炎を噴き、火が広がっていく。

「どうしたんですか。衝突事故ですか」

佐藤に目を向け、ピーターソンが声を上げる。

「いま原因を調べているところだが、熱波で交通信号が誤作動を起したらしい。ドライバーの注意散漫も重なったかもしれないが、交差点の信号がすべて青になって車が突っ込み、衝突事故となった。洩れたガソリンに何らかの火が引火したのか……」

渋滞の中、クーラーをフル回転させて車のエンジンが焼けていたのか、数珠繋ぎの車が次々に火を噴き、四方八方へ火が広がっていく。

「付近では外気がすでに四五度を超していた。アスファルトからの照り返しのほかに、車やビルの冷房機などからの人工廃熱などで、都心にはヒートアイランドができて五〇度を超していたかもしれない。日射を受けた車の中はクーラーが止まれば、瞬く間に一〇〇度近くなる。黒塗りの車のボデーはそれ以上になっていて、自然発火の一步手前だったかもしれない。そんな状態だから、隣の車が火を噴けば、直ぐ燃え移る。付近に燃えやすいものがあれば、たとえば日よけのすだれや天幕、可燃性の看板などといったものが火を呼び、火の海を広げていったようだ……」

画面を見ながら、佐藤が説明を加える。

車からの火炎を受けて付近の建物が燻りだしている。ガード下に火が飛び、線路下に連なる商店街から煙が上がった。火がさらに広がりだしていく。

火はますます勢いを増す。サイレンの音が入るが、消防車の姿は見えない。ドライバーが逃げ出した放置車が道路一杯に溢れ、消防車や救急車の通るスペースがないのだ。

「放置車が邪魔するし、ガソリンを満載した車は爆発のおそれがあるので近づくこともできない。地上の消火活動はままならず、ヘリで漸く本格的な消火活動がはじまったときには火はすでに東京駅まで達していた……」

映像の視野が急に広がった。ヘリが上昇したらしい。そして、東北新幹線の線路に沿って北上し出した。

遠くのほうに白い煙が見える。

「今度は山火事の現場だ。熱波が何日もつづいて乾燥していたせいか、方方で山火事が発生した。これからの映像は北関東を総なめにした最大規模の山火事のもので……」

佐藤の声が上ずっている。

「四月になってからも雨が殆ど降らなかったからなあ」

九鬼が呟く。

「あれはなんですか」

ピーターソンが指さす。

新幹線の高架橋に白い芋虫のようなものがとまっている。

「列車が停止しているのでしょうか。山火事で新幹線の運行がストップさせられたのですよ……」

佐藤が言い終わらないうちに、停止している列車が大写しになる。ヘリが上空に着いたらしい。

一〇輛編成の列車が水田を横切る高架橋の上に停止していた。

「東京に繋がる主要幹線交通システムもやられたんだ」

ピーターソンが独り言を言い、自分で頷いている。

「高速自動車道もやられた……」

佐藤が加える。

「停止させられた列車はどうなったんですか」

九鬼は乗客が気になった。

「都心の火災がそばを走る新幹線の架線を切ってしまったらしく、電気が止まってしまって、結局、立ち往生させられたのです。JR東京駅にも飛び火して運転指令室もやられてしまって、新幹線の線路上で立ち往生させられた列車は全国でかなりの数に上ったはずですよ。なにしろ、東海道新幹線では数分おきに出ている時間帯もあるから……」

「車内には相当の数の乗客が乗っているんじゃないの。大丈夫かな、電気が止まったら、冷房も止ってしまうんじゃないのかな」

「車輛の編成にもよるが、一列車に数百人から千人を超える乗客が乗っている。とにかく、乗客の救出が大変だったようだ。自走して最寄り駅へ着いた列車や救援列車の手配ができた列車は多少の時間を我慢すれば済んだが、そうでないところは大分てこずったらしい。東北新幹線では相当もたついていたようだった……」

「……………」

九鬼はじつと佐藤の顔を見た。

「このあとにそのときの救出現場の映像が出てくるはずだ……」

佐藤はピーターソンに再生速度の回転アップを指示する。

水田の上を走る高架橋に停車している列車の後方東京寄りの三、四〇〇メートルのところに避難用のスペースがあり、高架橋の下を国道が横切っている。そこにパトカーや救急車、はしご車、リフト車のほか、振替え用

のバスが数台待機していた。高架橋の避難用のスペースから地上に通じる非常階段が新たに設置された。

線路には太陽光線が容赦なく降り注ぎ、灼熱に燃え立たせていた。

列車の最後尾車輛の乗車口ドアが開かれ、デッキに非常用梯が掛けられた。乗客が梯を伝ってつぎつぎと線路に降りる。先導の係員のあとを、頭上から太陽光線と線路からの照り返しを受けながら、乗客は熱せられた枕木の上を行列をなして歩いていく。

会社員風の男たち、大きなバッグを肩にかけた若者の姿や子供の手を引く母親、夫婦連れの年配者、赤ちゃんを抱いている若い母親……。

急患がいるのか、行列のわきを担架をかかえた救急隊員が列車へと急ぐ。

映像の視野が急に広がっていった。ヘリが急上昇したらしい。

遠くに見えていた白煙が広がっている。火は山裾を南下し、旋風を巻いて火炎を立ち上らせ、周りを燃えつくしていく。点々と火の粉が飛び、煙を出して燻りだす。つぎの瞬間炎を発生し、燃え上がる。

山麓の人家に火がついた。山腹の別荘が火を噴いて燃えている。

乾燥した杉林は火を呼ぶのか、瞬く間に葉をつけた枝が音を立てて燃え、火炎を噴き上げる。あとには燻る垂直に立つ幹だけの林が残る。そしてつぎの獲物をめがけて飛び火する。

杉だけではない。松や松など樹脂の多い木々は炎を噴いて燃えた。灌木や藪も乾燥しきっているせいか、火は走って広がっていく。

やがて山火事は北関東一円に広がった。

海岸の原子力発電所から山腹を縫って首都圏へ大電力を運ぶ超高压送電線が火炎を浴びた。鉄塔の周囲や架線の直下の樹木の枝はおろされ伸びた下草は刈り取られているものの、連日の四〇度を超える酷暑にすっかり伸

び切った電線は弧を描いて垂れ下がり。火炎を受ける恰好の位置にあった。

火炎は旋風を巻いて鉄塔や架線を襲う。そこへ 消防ヘリが近づき、上空から水を撒くが、送電線にはなかなか命中しない。ヘリは舞え上がる炎の真上に近づくことができないのだ。

やがて送電線は炎に呑み込まれてしまう。

「長大送電網の悲劇だね」

ピーターソンが呟く。

映像の視界が広がった。方々で白煙が立ち上っている。

「これでお終いだ」

佐藤は九鬼とピーターソンの顔を見て、言う。

九鬼は大きく息を吐いた。彼の脳裏には東北新幹線の乗客救出現場の映像が焼き付いて離れなかった。熱中症で逝った亜耶子の面影が脳裏を過る。

あの乗客の中に佐々木教授はいなかったのだろうか。担架を抱えて急ぐ救急隊員の姿が目に見えぬ。教授が熱中症で倒れていたのではあるまいか。

彼はDVDをもう一度再生し、救急現場の場面に戻した。

「佐々木教授の姿はないかな」

彼は呟きながら、線路の枕木を歩く乗客をひとりひとりチェックする。

映像には教授の姿はなかった。

「ここはどこかな」

彼は佐藤の顔を見る。

「さあ、黒磯を過ぎたところらしいが……」

「救急車など、待機している車はどこのかしら」

彼は待機している車の映像を静止させ、車のナンバープレートズームアップしていく。だが全体がぼやけてしまい、よく見えない。

「佐藤さん、どこのものか分かりませんか」

「先生はこの乗客のなかに佐々木教授がおられると思われているのですか。なにか心当たりでもあるのですか」

「確たるものはないかもしれませんが。ただなんとなく、もしかしたらわたしがすぐ帰国できないと言ったので、先生が代わりに母を見舞おうと出掛けたかもしれないとふと感じたからです」

「分かりました。調べてみましょう」

佐藤はすぐ立ち上がった。九鬼は研究室のその廊下まで出て、佐藤の後姿が見えなくなるまで見送った。

40

「現代文明の最先端科学技術を駆使する大都市システムは思ったよりも脆弱なものなんです」

ピーターソンはまだ映像を見ている九鬼に話しかける。

「東京という心臓への大動脈はものの見事にぶった切られた」

九鬼はまだ信じられないといった面持ちで映像を追う。

一瞬のうちに、都市交通システムは大混乱した。超高圧送電線が切れて大電流が遮断された。高速自動車道や新幹線が機能不全の陥った。

都市システムは環境条件に合わせてつくられる。多少のゆとりはあるが、ぎりぎりのところまでコストを抑え、費用効果最大を狙う。軍事技術のように過酷な環境条件を想定することはまずない。そのため、急激な環境変化には全く耐えられないのだ。

「日本列島ヒートアイランド下では今回のような山火事はこれからも毎年頻発するにちがいない。東京で生じたような出来事は他の大都市でも生じることだろう。都市の基盤である環境条件が激変して以前とは全く別ものになってしまうのだから」

「毎年のように、太平洋高気圧に覆われるころには四〇度を超す酷暑の日本列島が出現するだろうからね」

彼はピーターソンに相づちとを打つ。

「果たして、東京はこのような状況にいつまで対応できるだろうか」

ピーターソンは九鬼の顔を覗く。

「うむ……」

彼は教授に勧められて、新聞やテレビで熱波来襲予測や対策の必要性を力説したことを思い浮かべる。

それにしてもどんなに力説しても政治や行政が積極的に動こうとしなかったのはなぜか。

「やはり、地球温暖化は都市を衰退させ、現代文明を滅ぼす」

「東京は二週間でどうやら復旧したようだが……」

「いや、まだ電力は不足しているし、水も給水制限の状況だ」

「それらも追々もとに戻るだろう」

「来年も、そして再来年も……、毎年こんなことが繰り返されればどうなる。毎年毎年消耗を繰り返して、やがてじり貧となっていくことになるだろう。熱波は一年や二年で終わることはないからね」

「きみはまさか、東京にそんな兆候が見られたというんじゃないだろうね」

九鬼はダメを押すように言う。

「いや、残念ながら、すでに兆候は現れている。都市は一度大きくなりだ

すとますます大きくなっていくものだが、東京はあまりに大きくなりすぎてしまっている。すでに限度を超えている。だから環境の一寸の変化にもはや耐えることは難しいのだ。まして今回のような環境激変には到底耐えることはできない。この映像を見ても、その兆候がいたるところに出ているではないか」

ピーターソンは大電力を輸送する超高圧送電線や水、食料の輸送路など広範囲に広がる長大すぎる大動脈を例に上げた。それに都市化による郊外への面的広がりとともに、都心では超高層ビル化といった垂直方向への人口吸収が進んでいる。このため、人とともに、エネルギーや水、食料を東京へ集中的に掻き集めることになる。これでは周辺地域は疲弊し衰えていく。東京はさらに遠くへ手を伸ばし、これらを掻き集めようとする。そしてますます大動脈が延びていく。こうして大都市システムはますます脆弱化していくのだ。

だがこんなことはいつまでもつづかない。やがて周辺の衰えとともに、東京もおとろえていくのだ。環境の激変期にはこれが加速する。

「世界には東京のような大都市はまだまだある」

「アメリカではニューヨークやロサンゼルスもそうだ。世界には人口が極度に集中しているこんな都市は二〇ぐらいある。これらは地球温暖化による大きな試練に耐えられるだろうか。じり貧に陥るのは目に見えている」

「東京は熱波で綻びかけたということか」

九鬼は他人事のように言う。

地球のホットスポットである日本列島にとって熱波だけが問題ではなかった。あらゆる異常気象が問題だった。異常気温、小雨、大雨、大風、突風、なんでもありの気候大変動期に突入してしまった地球にあって、ヒートア

イランド化した日本列島はこれらの最先端の最頻発地帯でもある。だからこのことを前提に、日本は都市システムや都市のあり方を再検討しなければならぬのだ。

彼は憂うつな顔をして、ピーターソンと目を合わせた。

41

来日以来、研究室に入り浸っていたピーターソンはまた来るといつて、急にアメリカへ帰っていった。一人きりになった九鬼が机で頬づえをつき、佐々木教授のことをいろいろ思い巡らせた。

突然、なんの前触れもなく、開放してある研究室のドアの間からひとりの男がぬつと顔を出した。

いつもなら蛍光灯が点いていて明るいのが、節電で消灯しており、ドア付近は薄暗い。彼は一瞬、佐藤かと思った。三日にもなるのに、東北新幹線の高架橋で立ち往生した列車について調べるといつて帰ったきり、まだなんの連絡もなかった。

男は九鬼を認めると軽く会釈しながら、近づいてきた。

柏田かと思った。だが憔悴し別人のようだった柏田ではなかった。

「突然ですが……、弟が死にました……」

男は机から立った九鬼に叩き付けるように言った。柏田康平だった。

彼は呆然として、しばらく棒立ちのまま、柏田康平の顔を見ていた。

「一昨日、警察から遺体発見の知らせがありました……」

柏田康平はぽつんと言つて、目を落とした。

Tダム湖で溺死していたという。事故だったのか、自分で入水したのか不明だった。運転していた車が、路肩が崩れ、ガードレールが浮き出しているところから崖を滑り落ち、湖水へ突っ込んでいったらしい。湖水は底に僅かしか残っていなかったもので、水に浸かった車体の一部が露出しており、早々に発見されたのだ。

ソファに浅く腰を下ろしてぼそぼそ話す柏田康平が、九鬼にはつい数日前同じ場所に座っていた柏田のような気がしてならなかった。

一通り話し終わると、柏田康平はズボンのポケットに手を差し込みハンケチを取り出し、禿げ上がつて人一倍広い額の汗を丹念に何度も拭く。

「弟は自ら死を選んだのです。事故ではありません」

柏田康平は九鬼の目を見て、はつきりした声で言った。

「……………」

「弟には最初から、あのような対策では不十分であることがよく分かっていたので。でもあの対策を推奨したことになって責任を感じていたので」

九鬼は原子力発電所の暖水塊対策に立ちあっていた柏田を思い浮かべる。

そのとき柏田はいままでよりも幾分でも水温の低い海水を取り込むため、冷却用海水取水口の水深を下げるのだと言っていた。

「でもあのときは金がかかるから、この程度の対策しかできないのだと言つておられたが……」

「原子力発電所側の要望に沿つてあの対策を考えてあげただけなのに、熱波の酷暑期を迎え、フル稼働しだすと、問題が発生したのです。温排水の規制を超える水温上昇と発電効率の低下です。対策を担当したひとは逃げ、要領の悪い弟が矢面に立たされたのです。それに……」

柏田康平は口を抑え、しばらく涙を堪えているふうだった。それを振り払うようにつづける。

「……わたしが原子炉が過熱するおそれがあると言ったばかりに、弟はそれを気にしてところが休まることがなかったのかもしれない」

「……………」

それで疲れ果て、憔悴しきってしまっていたのか。九鬼は柏田の憔悴しきった顔を思い浮かべた。

だがあのとき、柏田はそんなことを一言も言っていなかった。むしろさらに積極的に新たな対策を進めるための説得材料を集めようとしていたではないか。

「事故です。事故だったんですよ」

彼は思わず叫んだ。

「え？ どうしてそう言い切れるのですか」

柏田康平は暗い顔をして、目を剥く。

「実は、亡くなる直前に佐々木教授に会いたいと言って、ここにみえたのです」

彼は教授の行方不明中であることも含めて、そのときのことをすべて話した。

「そんなことがあったんですか」

柏田康平は大きく息を吐くと、考え込んでしまった。

彼はもう一度、柏田が憔悴した顔で「お墨付きが欲しい」と言っていた、あの日のことを思い浮かべた。彼はふと、もしかしたら柏田は自ら死を選んだのかもしれないと思った。

それにしても、政治や行政にしろ、企業や事業にしろ、個々人にしろ、

最初から地球温暖化の徹底した対策を考えようとしなければなぜなのか。熱波が来襲すると口を酸っぱくして言ってもどこ吹く風で、誰も真剣に対策を立てようとしなければなぜか。

地球に対しては搾取の限りを尽くしても、そのメンテナンスには一切金をかけることを考えようとしなければ近代資本主義市場経済思想のせいだ。

コスト意識のせいだ。競争力向上のためのコストや経費の削減要請か。近視眼的行動優先主義か。コストや資金の短期回収第一のためか。長期的視野の欠如か。手取り早く結果を得ようとする目先主義か。

それとも事実認識が甘いからか。現実を見たくないのか。まだまだ意識が強いからか。自分だけは違うと思いついているからか。

未来の不確かさに対する戦略的思考力の不足か。将来は未定で、予測は的中しないことがあり、当てにならないからか。

ムダ排除意識が強いからか。社会的保険という考え方ができないのか。九鬼は柏田康平の後ろ姿を見送りながら、結局、柏田はこんな考えの犠牲になったのかもしれないと思った。

42

「遅くなりましたが、これから調査結果の報告に参ります。あまり思わしくないのですが……」

佐藤だった。受話器から洩れてくる声はなぜか弱々しい。

九鬼の脳裏を不吉な影が過った。やはり佐々木教授は見つからなかったのか。

だがあの列車にも乗っていなかったとすると、教授は一体どこへ行ってしまったのだろうか。

九鬼のころのどこかに、いずれ佐々木がひよっこり姿を現すのではないかという思いがあった。だから、東京を離れずに、毎日研究室に顔をだしていたのだった。

ところが教授は現れず、思いもかけない柏田兄弟が相次いでやって来た。

突然柏田が憔悴しきった顔を見せたすぐあと、兄の康平が来て、弟の死を告げた。

彼は柏田の死を受け入れることができなかった。なぜ死ぬ必要があるんだという思いが強かった。

母良子の顔が浮かんだ。北極海調査から戻って、直ぐ、母を見舞う積もりでいた。だが快方へ向ったという知らせに調査を継続してしまったことがなんとなくこころの重しになって、帰国した足で郷里へ向わず、彼は大学へ帰ってしまった。

まず、佐々木教授に調査結果の報告がしたかった。だが教授はいなかった。そして彼はそれ以来、教授が現れるのを心待ちし、研究室で待っていたのだ。

一度、郷里へ帰ろうかと思った。

「先生、すみません。遅くなって……」

佐藤が入ってきた。

九鬼は机から応接セットへと移る。

「救援現場へ集まった車は方々からやってきたものでした」

近くの市町村の消防車や救急車は山火事の消火に駆り出されていたので、新幹線乗客の救援車は遠くの市町村からの応援やボランティアなどの車だっ

たという。それらをいちいち当っているうちに時間がかかってしまったらしい。

「それはそれは……」

彼は早く結果を知りたかった。

「いずれにも佐々木先生は乗っていらしやらなかったようですね。誰も先生のような方を見かけたというひともいませんでしたし……、ただ……」

「ただ……、なんですか」

「熱中症になったひとが何人がいたらしいのですが、救急車の代わりに患者を運んだボランティアの車が数台ほどありましてね。そのなかの二台の車の行く先が確かめられなかったのです。その車がどこから来たのか、それに乗せられたひとがどなたか、確かめることもまだできていないのです」

佐藤は山火事で近くの病院は大混乱していたらしく、救急車は急患を隣の県の病院まで搬送していたという。

九鬼は佐藤の話聞いて、一縷の望みを抱く。死者は出ていないのだ。

もし患者の一人が佐々木教授でどこかの病院に収容されていれば、いつかは元気な姿を見せることがあるかもしれない。

だが佐藤の口から出たつぎの言葉が九鬼の期待を打ち砕く。

「まだ中間の集計しか出ていませんが、熱中症による犠牲者数は全国でかなりの数に上るようです。おおよその数ですが、一〇万人を超えそうだとわわれています。首都圏が約五万人、近畿圏で約三万人、中部圏が約二万人と予想されています。とくに大都市に集中していますが、大阪から京都ではさらに増えそうです……」

四週間つづいた熱波の酷暑期に発生した熱中症による犠牲者数には二つのピークがあったという。一つ目は急に気温が上昇し出した熱波襲来の初

期だった。このときは乳幼児と高齢者に多くの犠牲者が出た。二つ目のピークは一つ目を倍加するピークで、停電がかさなつたときだった。何日もつづいた熱波に老人も若者もすっかり疲れ果て、肩で息を吐いて酷暑に耐えるほかなかったときに電気が途絶え、つぎつぎと熱中症の犠牲となつていったのだ。

佐藤は水不足がことのほか堪えたらしいという。大都市ではエネルギー（ことに電力）と水の消費量がずば抜けて多い。東京では水は熱波来襲前から不足気味で、給水制限だった。そこに停電がかさなつた。これで水道の給水が完全に途絶えてしまった。

自前の個別電源や非常電源を備えていた事業所、病院、高層ビルなどはなんとか急場を凌ぐことができた。だがその他の大多数は焦熱地獄へ陥つていくほかなかった。

家庭用クーラーは気温が四五度を越えたところから機能不全に陥り、効きが極度に悪くなつていた。水道は出が悪く、時間給水だった。水不足で十分な調理もできないところに、多くの生鮮野菜が姿を消した。都市の大口の胃袋を満たす食べものも大半を外から運び込めなければならぬが、日照り続きで近郊の生鮮野菜生産量が極端に落ち、急遽海外から調達するも品不足だった。

酷暑のなか、不足がちな飲用水と片寄つた食事で次第に体力が衰えていたのだ。それに頼みの綱の冷房が切れてしまった。

なぜか、五、六階程の中層マンションの住民に犠牲者が多かつた。高層マンションにはそれなりの対策が講じてあるものが多かつたらしく、それが役立ち、多くの住民を救つた。

断水になつても給水車が時間を決めてやつてくる。だがエレベーターが

止まつたマンションの最上階に住むものには水をもつて階段を上る苦行が毎日つづく。水だけではない。食べものもある。

高層マンションでは上ることだけでも大変なので、あるマンションでは五階や一〇階ごとに非常用の倉庫が設けてあつて、飲用水と非常食などの非常用品を備蓄していた。これで住民は助かつた。

「やはり、対策があれば……」

「ええ、そうですね。でもこんなケースもありました……」

住宅の省エネ対策が進められ、北欧や北米産の断熱タイプの住宅が輸入されたり、壁の厚い断熱構造の国産住宅が開発されて、これまで数多くつくられてきた。だが真新しいこんなタイプの住宅でも自前の電源を持たないところでは熱中症の犠牲者が結構出たという。

この種の住宅は窓が小さくして開放部を極力減らし、電力で動くいわゆる二四時間計画換気システムを採用し、人工的に快適な環境を維持するものが多い。このシステムは停電になれば換気がストップしてしまう。開放部が少ないので外気が十分入らず、一度温まれば熱がこもりがちで、なかなか冷えないのだ。

「都会では物騒で窓を開放しておけないし、かといって、停電になるとね……」

「後半のピークには、締め切つた部屋で、ぐっすり寝込んでいるときに熱中症になつたひとが多いらしい。抵抗力が低下していれば、そのまま亡くなつてしまう。運良く救急車に乗せられて病院へ運ばれても、病院は満杯で、廊下まで患者が溢れ、たらい回しの目にあう始末だった」

佐藤は取材のときのことを思い出したのか、細めた目を遠くへ向け、しばらくぼうつとしていた。

九鬼には熱中症の犠牲者が一〇万人も出たとは思えなかった。患者数の集計ミスかと思った。だが街では時を置かずサイレンの音がつづいていった。熱波は幾分おさまったものの、未だに熱中症患者は引きも切らないのだろうか。

彼の脳裏に突然、保育器のなかで小さな顔を真っ赤にして手足をばたつかせていたアキラが浮かんだ。自分が未熟児であるのに保育器に入れられていることを怒っていたのか、それとも保育器から出ようともがいていたのか。

「そうか。現代の文明都市はいつの間にか保育器と化してしまっていたんだ」

彼は思わず叫ぶ。

「冷暖房完備の保育器都市ということですか」

佐藤が呟く。

「そうだ。そして都市住民は年々未熟児化していくということだ。エネルギーや水ばかりでなく、食べ物も目の前に差し出され、保育器のような環境にすっかり慣らされてしまい、外へ出て自分で生ようとしない。いや、現代文明に溺れた都市住民は自分で生きる力をとくに失ってしまっているにちがいない」

九鬼は自分に言い聞かせるように、静かな口調で言った。

都市住民たちの未熟児化が進むなか、保育器である都市そのものも地球温暖化による環境の激変であえなくダウンしつつあったのだ。年ごとの熱波に襲われ、コントローलをつかさどるホストコンピュータも熱を帯び、水、エネルギー、食料の大動脈は分断され、通信交通システムや都市システムが機能不全に陥る。頼りの保育器が機能不全に陥れば、未熟児はどう

なるのか。

こうして現代文明都市は外からばかりでなく、内からも崩壊していくのだ。

43

「兄さん……、帰っていたんだね」

受話器から弟信二郎の太い声がした。

一瞬、九鬼は自分が出口を求めて迷路を彷徨うような戸惑いを感じた。全く予期していない弟の声に驚いたからではなかった。むしろ、母を早く見舞いにいきたいと思いつづけていた彼には、こころのどこかで心待ちしていた声だった。だが「もう少し調べてみましょう」と言って帰っていた佐藤を送り、机に戻つてばかりの彼にはどことなくそぐわない声だった。

「母さんの具合はどう。早く何おうと思っっているんだが、実は……」

彼はこれまで経緯を話す。

「佐々木先生の行方が分からないのは、いつから……」

「それがはつきりしない。長い間連絡していなかったもので……。最後に先生の声を聞いたのはあのとときだ」

彼は「できるだけ早く帰国するように」と言う教授の声を思い出す。

「じゃ、もしかしたら、佐々木先生かもしれない」

「なんだって……」

「昨日、仲間の会合で身元不明の患者の話を目にしたんだが……、それで電話してみたんだよ」

信二郎は耳にしたということ話を話した。こんな内容だった。

北関東一帯が山火事になった日、その患者は乗用車で運び込まれたという。通りすがりのボランティアの車で、救急隊員の指示に従い、まず近くの救急病院へ運んだそうだが、山火事の負傷者が救急車でつぎつぎに運ばれおり、なかなか割り込めず、ついに満杯で断られてしまった。別の病院へ回ったが、そこも断られ、クリニックを開いている仲間のところへ担ぎ込んできたのだった。

意識を失い、痙攣を起していたので、救急病院じゃないが、やむなく点滴で水分補給を行い、応急処置を施した。そうこうしているうちに、搬入してきたボランティアの車は若い看護師に患者が新幹線の乗客であることが告げただけで、名前も名乗らず急いで帰っていつてしまった。

患者はかなり重体だった。ようやく意識を取り戻したので、家族へ連絡しようとして身元を尋ねたが、記憶を喪失していたという。

「記憶喪失か。それでどうして佐々木教授だと……」

「聞いたところ、年格好が似ているような気がしてね。兄さんの代わりに、母さんを見舞おうと出掛けてこられたのかもしれないと思って……、丁度、その日の一〇時頃、先生に電話したのだから……」

「……………」

「記憶喪失は一時的だろうと言っていたが……」

「そのひとの持ち物はないんだね。先生はいつも鞆を持って歩くが……」

九鬼はなんとなくその患者が教授じゃないような気がした。だがはつきり断定することもできなかった。

「うん、身元の分かるものはなにひとつなかったらしい」

「で、そのクリニックはどこなの」

「いまは大学病院へ転送されて、そこに入院しているらしい」

「じゃ、仙台か」

彼はその患者に会って教授本人か確かめたいと思った。長く会ってない母やアキラにも会いたかった。

彼は「これからそっちへ行く」といって電話を切った。だが彼はすぐ立ち上がる事ができなかった。なぜか動く気がしないのだ。理由が分からなかった。ただ動いてはならないような気がした。

彼はしばらく机でじつとしていた。

目の前で電話のベルがけたたましく鳴った。

「佐々木先生らしいひとが見つかりましたよ」

佐藤の弾んだ声が響く。

「これから出掛けるところですよ」

「佐々木先生が見つかったんです」

佐藤は九鬼のとんちんかんな返事にイラッたっているのか、怒鳴るような声で繰り返した。

「いま、大学病院に入院しているんですよ」

彼はさらに先回りする。

「え？　なんですって。九鬼先生、それ本当ですか」

「違うの。で、先生はどこにいるっていうの、きみの情報では……」

「いまどこにいるかは分かりません。佐々木先生を乗せた車が見付かったんです。運転していたひとの連絡先も分かっているんですよ」

「その車がクリニックへ運んで、その後、先生は大学病院へ転送されたんじゃないんですか」

九鬼は自分の情報と佐藤の情報が同じなのか、それとも全然別なのか分

からず、混乱していた。佐藤は言い合っても埒が明かれないと思ったのか、すぐ研究室へ何うから出掛けないうで待っていて欲しいと言い、電話を切った。

弟からの電話には半信半疑だったが、佐藤かの情報を耳にし、彼はようやく教授が無事であることを確信したのだった。

44

「九鬼くん、帰っていたのか」

顔を上げると、開いてあるドアのところに杖をついた佐々木教授が立っている。

「あ、先生……」

口を開け、棒立ちになっている九鬼をしり目に、教授は杖をつきつき研究室に入ってきた。

「いつ、帰国したんだね。もうお母さんとはお会いしたのかね」

教授はソファに腰を下しながら、九鬼を見上げた。

まだ半ば呆然としていた彼は急にわれに返り、佐々木のまえに寄って腰を下ろしながらじつと顔を覗く。

「先生、ご無事だったんですね……」

目が次第に潤み出していく。

「あ、佐々木先生だ。一体、どうしたんですか」

突然、大きな声が出た。佐藤だった。

佐藤は小柄な身体を敏捷に動かし、九鬼の隣の椅子に潜り込む。

「あ、佐藤さん、お願いしたいことがあった。丁度よかった」

「散々心配させておいて、丁度よかったはないですよ、先生。いままどこにいらしたんですか」

佐藤はすげすげ言う。

彼は一瞬怪訝な顔をした教授にこれまで行方を探していたことを説明した。

「そうだったの。それでどこまで分かったの」

佐々木は悪戯ぼつく笑う。

「わが社では先生を乗せた車を突き止め、運転していたひととの接触到功したところでした。九鬼先生のほうは大学病院に入院しているんですね」

「もう少し遅ければ、大学病院へ出掛けるところでした」

九鬼はぼつわるそうに小さな声で言う。

「それで、佐藤さん、運転していたひとはなんとおられたんですか」

佐々木は自分の行方不明を結構楽しんでるふうだった。

「それがなぜか言葉が濁してあんまり詳しく話してくれなかったんですよ。」

車には子連れの母親らしい若い女性と先生が乗って病院へ向つたらしいんですかね。それで九鬼先生と相談して直に会って話を聞こうかと思つたところでした」

佐藤は佐々木と九鬼の顔を交互に見た。

「やはり、先生も熱中症になったのですか……。で、その足の怪我は……」

「この怪我ね……」

佐々木は過去を手繰り寄せるかのように目を閉じた。しばらくして口を開き、話しました。つぎのような内容だった。

あの日、九鬼の母親を見舞うために乗った東北新幹線が山火事に遭い、途中で高架橋のうえで停止した。停電が重なり、運行できなくなった。生憎列車には自走装置がなく、救援列車も期待できない状況で、乗客全員が振替えバスが待機している国道まで高架橋の線路伝いに歩いて移動することになった。

佐々木は熱中症気味で時折軽い眩暈を感じていたが、冷房も止まり、オーブンのように熱く感じられてきた車内に留まる気になれず、みんなのあとに従い、車輛のデッキから非常用梯を伝い、外へ出た。線路に降りるとき、眩暈が襲った。そのとき足を挫いたらしい。右足首がねん挫し、小指の骨にひびが入った。

救急車が二台待機していたが、重篤の熱中症患者を乗せていつてしまい、佐々木は戻ってくる救急車を待つことになった。そこへボランティアの車がやって来て、教授を拾ってくれたのだという。

「でも、あれから約一か月にもなりますよ」

佐藤は口を挟む。

「その車に……」

と言いかけると、佐々木は遠くに目をやり、しばらく口を噤んでいた。

「その車に先客があった、例の子連れの……」

佐藤は間髪を入れず、けしかける。

「そう……」

佐々木は佐藤に伝えるように、先をつづけた。

その車を運転していたひとが子供連れの若い女性の父親だった。郡山で医院を開業しているが、帰郷中の孫が熱中症気味だと娘から連絡を受け、急いで迎えに来ていたのだという。

水分を補給し、冷房がよく聞いた乗用車で小一時間過しているうちに、眩暈もおさまり、気分も快復したので、仙台に向いたかったが、新幹線は運休だし、足の怪我の具合も思わしくなく、そのまま留まることになった。

「まあ、夏休み中のことだし、足の治療に専念したというわけだ」

「そうだったのですか。本当によかった」

九鬼は安堵したように言う。だが佐藤はまだ腑に堕さない風情で、上目遣いに教授の顔を見、さらに詳しい説明をねだっている。

「佐藤さん、地球温暖化対策のキャンペーンを大々的に継続してやっていただけませんか。今回の熱波はどうやら収まりかけてきているけど、来年、でなければ再来年にさらに強烈な熱波がやってくる。気温上昇だけじゃありません。今回は熱波と干害がセットされましたが、これだけじゃない。台風の狂暴化、巨大竜巻、バケツをひっくり返したような大雨、海面上昇、数メートルを超える高潮、巨大な高波などさまざまな異常気象が連続して生起するでしょう。地球はすでに気候大変動期に突入してしまっているのです。そして今後、何十年、何百年、それ以上つづく。ですから、これからすぐにも気候大変動のための十分な対策を講じる必要があるのです。さもなければ、年々犠牲者が倍加していくでしょう……」

佐々木教授は佐藤の要求には応えず、方向を転じ、地球温暖化対策の必要性について目をらんらんと輝かせて説きます。佐藤は頷きながら、黙って聞き入っている。

「対策としては、まずこれ以上二酸化炭素などの温室効果ガスの大気中濃度が増加しないようにしなければなりません。このために、まず、人間活動による二酸化炭素など温室効果ガスの排出量を大幅に抑制することだ。これとともに、地球温暖化に耐えうる人間社会を再構築することだ。これに

は……」

九鬼はふたりの様子を不思議そうに見つめながら、姿を隠していたこの一か月の間に教授のなかでなにかが大きく変わりだしていることを感じていた。

エピソード

日本列島は周囲を高温海水にとりまかれ、焦熱地獄と化した。大都市システムは破綻し、現代都市機能が不全に陥った。

急激な気温上昇に現代文明都市は耐えることができなかった。熱波の酷暑下、東京はじめ、大阪、名古屋などで大都市システムの脆弱性が露呈し、現代文明都市が綻び出した。

連日の酷暑に、電力が止まり、水道が断水した。交通通信がマヒする。家電の性能不備や電子機器の誤作動でクーラーや冷蔵庫の不調が多発した。

ライフラインが行き届き、エアコンを完備した保育器のような居住空間で生活する都市住民は急激な気温変化にことのほか弱かった。

熱中症犠牲者が予想を超えて多数に上った。人知れず息を引き取っていった一人暮らしの高齢者が多かった。

日本列島ヒートアイランド化は予測され、熱波来襲に対する対策の必要性も指摘されていた。だが誰もが真面目に対応しようとしなかったのだ。

地球温暖化が惹き起すものは気温上昇のみでない。海面上昇のほか、さまざまな異常気象が頻発する。ことに、ヒートアイランド化している日本列島にはさらに桁外れの異常気象が襲いつづけることだろう。

(第二部 完)

(この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものと一切関係がありません。)

主要参考文献

- J・ダイアモンド『文明崩壊』（楡井浩一訳）（2005）（草思社）
R・B・アレー他「グリーンランドの水が語る気候の激変」（日経サイ
エンス）1998年5月号

地球温暖化の果てに第二部―焦熱列島

生野以久男

二〇〇八年五月一日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2008

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウトデザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし